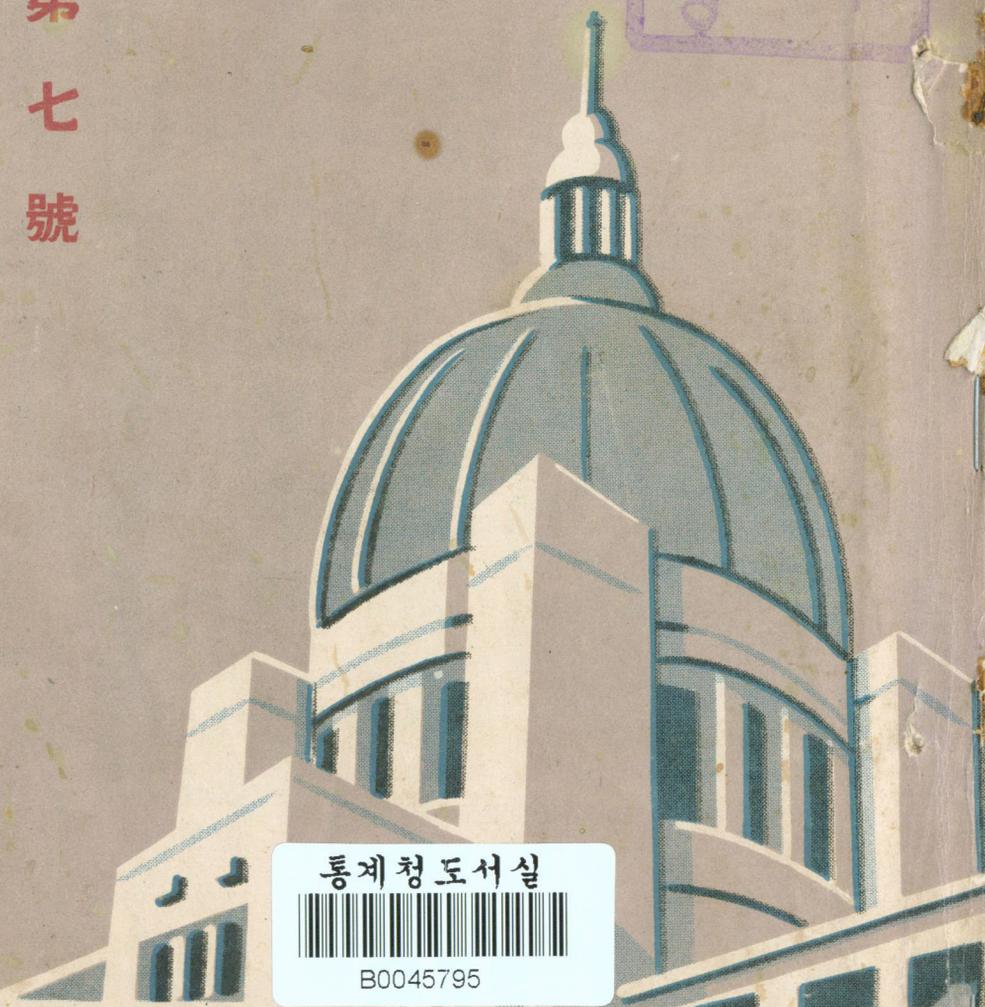


朝鮮統計時報

二十一年十月三十日發行

第七號



통계청도서관



B0045795

朝鮮統計協會

250 (원본)
1937. 10호

朝鮮總督府農林局米穀課編

愈々發行大好評

初版賣切再版發賣中

新刊

朝鮮米穀關係例規

本書は朝鮮に於ける

米穀關係の法規例規を

章別一覽

第一章	米穀ノ生産改良	第五章	米穀生産高現在 高及移動調査
第二章	米穀及雜穀ノ輸 出入	第六章	米穀檢査
第三章	米穀ノ自治管理	第七章	雜
第四章	米穀倉庫	第八章	參考法規
		第九章	附錄

洩れなく輯録したる
一大權威書である!!

本書内容ハ米穀ノ生産改良、米穀統制、米穀統制資料調査及米穀檢査ノ四大項目ヲ根幹トシ之ニ關係スル現行米穀法令全般ニ瀕リ米穀統制法、米穀自治管理法、朝鮮農業倉庫業令、朝鮮穀物檢査令及其ノ施行規則ハ勿論苟モ米穀ニ關係アル法律、制令、勅令、府令、告示、通牒、決定等數百件ヲ網羅輯録ス米穀ニ關係アル執務家ハ勿論米穀ノ生産者、取引業者一般ノ必讀良書ナリ

發行所

京城市壽松町二十二番地

朝鮮地方行政學會

電話號碼 三〇七三
電話號碼 五八二三

四六判六〇〇頁
裝幀優美箱附
定價一圓八十錢

(送料二十二錢)

營業科目

各種時計
 ダイヤモンド
 金、銀、製品
 裝身具
 アンチモニー
 銅、錫、製品
 高級陶漆器
 各種寫眞機
 活動寫眞機
 及附屬品材料
 眼鏡、雙眼鏡
 萬年筆

株式會社

大澤商會京城支店

京城本町一丁目
 代表電話本②
 〇二六六番
 〇二六九番
 振替京城二三一番



朝鮮統計時報

第七號

目次

諭告

支那事變の環境と意義

邑面職員に與ふ

誌上講義 統計の話(六)

昭和十一年の婚姻及離婚

統計事務に對する慶北清道郡の施設

實務の頁 人口調査小票記載要領

第二回統計功績者及統計優良邑面表彰

統計時報

耕地面積

(57)

肥料共同購入實績

(67)

米生産價額

(58)

畜牛

(68)

米第一回豫想收穫高

(60)

馬

(69)

朝鮮總督 南次郎 (2)

朝鮮總督官房文書課長 井坂圭一良 (3)

朝鮮總督府囑託 江上征史 (10)

京城帝國大學教授 大内武次 (17)

朝鮮總督官房 文書課 (26)

地方委員 許洽 (39)

朝鮮總督官房 文書課 (43)

朝鮮統計協會 (48)

我等の覺悟(扉)..... (1)

話の塵..... 大義生 (45)



□ 雜穀生産價額 (61) □ 驢、騾、山羊及緬羊 (70)

□ 豆類生産價額 (62) □ 養豚 (71)

□ 棉生産價額 (63) □ 林産額 (72)

□ 蔬菜生産價額 (64) □ 漁獲高 (73)

□ 桑苗生産價額 (65) □ 地稅 (74)

□ 甘藷及馬鈴薯生産價額 (66)

上海地名の讀み方 (44)

豊山思ひ出草 (82)

扶餘行(短歌) (87)

あき(俳句) (88)

出張中の失敗 (81)

祖國愛の叫び (84)

百濟故郷だより(俳句) (88)

朝鮮色ある姓氏 (85)

切拔帖

支那主要都市の人口—内地に於ける出生

率—内地の米第一回豫想—内地の麥實收

著増—農事講習所數—鷺・七面鳥—産金

計畫—滿洲國鐵産額—賃銀—小賣物價—

對支投資額—生活改善十則

原稿募集 (89)

統計日誌 (89)

協會人事 (90)

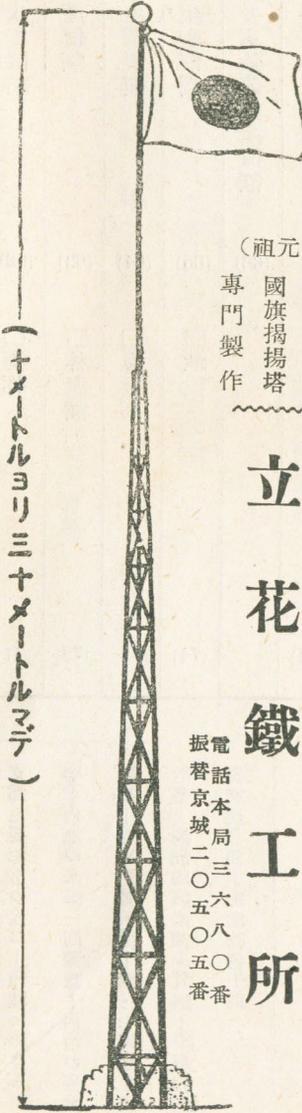
幹事竝に書記異動 (90)

地方委員異動 (90)

消息 (91)

編輯後記 (92)

{ 76 }



(祖元)

立花式鐵骨
國旗掲揚塔
専門製作

京 城 府 光 熙 町 壹 丁 目 一 四 五

立 花 鐵 工 所

電話本局三六八〇番
振替京城二〇五〇五番



大藏省 全國酒類品評會
主 催 最高優等賞受領

(鮮内入賞酒は金千代のみ)

釀造石高 鮮 滿 第一 位
本年度釀造高二萬三千石

(全鮮釀造高の約二割強)

昭和十一年度 朝鮮清酒釀造高十一萬石
昭和十一年度 朝鮮に於ての釀造場數百二十餘ヶ所

京 城 平 壤 齊 藤 酒 造 合 名 會 社

朝鮮統計時報

第七號

我等の覺悟

今や北支事變が支那事變となり、南總督の諒告中に見える如く、「事變は今や擴大して長期の訓練に耐ふるの覺悟を要す」る重大な秋となつた。皇軍は北支に、中支に將たまた南支に、東亞の平和を確立せんとする大なる使命のために、環境と戦ひ敵と戦ひ、眞に火の玉のやうになつて勇奮してゐる。日々の新聞に接する毎に、我々は眼のあたり其れを感じしめられる。しかしながら、實際かの地にあつて激闘する皇軍將兵の苦心は、それ以上に、我々の到底考へ及ばないやうなことが尙ほ數多くあることであらう。

事變以來わが國民が全く一丸となつて國難打開に當るの覺悟を定め、統後の謔りの萬全を期せんとしてゐることは、わが國眞個の美點が發揮されたものであり、内鮮一體の構へがこの秋、大なる貢獻をなしつつあることは誰しも知るところである。ではあるけれども我々は、皇軍の勞苦を思ひ、事變が長期であり、かつまた複雑な方面に展開するであらうことを思ふとき、より以上の信念と覺悟とを要することを痛感せしめられるのである。

然らばこの秋、我々會員としては如何なる心組みを以て之に處して行くべきであらうか。茲に我々は更に先の諒告中に見える一論、即ち「官民夫れ須く厲志し各其の本分に依て時艱の克服に邁進するに励めよ」とあるのを銘記して實踐すべきである。歐洲大戰の當時、英國に於てはその國民に對して、須らく平常の如くあれといふ標語を以て望んだといふことである。このことは我々としても亦一應味ふべきことである。非常時だといつて、若しも徒らに興奮するのみであつては、我々の正に爲すべきことが出来ないばかりでなく、又長續きのするものではない。ゆとりのある態度は何處までも欲しいのである。だがしかし、平常の如くある、といふだけでは決して充分ではないのである。ゆとりは飽くまでも存してゐなければならぬが、我國民の重大なる使命、累積せる難局を思ふとき、是非とも平常の状態から緊陣一番して、即ち「須く厲志し」て時艱の克服に邁進しなければならぬ。乃ち我々會員としては茲に我々の本分たる統計のために思を凝らし、實績を擧げ、以て一般の期待に添ひ得るやう萬全を圖ることが最も大切な任務と思ふのである。

諭 告

叡聖文武 天皇陛下臨時帝國議會開院式ニ親臨アラセラレ優渥ナル 勅語ヲ下
 シ給ヒ帝國用武ノ精神ガ一ニ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞ノ平和ヲ確立セント
 スルニ外ナラザル所以ヲ昭示シ軍人ノ忠勇ヲ嘉セラルルト共ニ一般國民ニ對シ忠
 誠奉公、和協一心以テ所期ノ目的ヲ達成センコトヲ諭シ給フ 聖旨崇曠洵ニ恐懼
 感激ニ禁ヘザルナリ

我が朝鮮ニ在リテハ事變以來國民の信念ヲ一ニシテ愛國ノ至誠ヲ具顯シ舉國ノ
 急ニ應ジ内鮮一體ノ實ヲ舉ゲツツアルハ本總督ノ深ク感銘スル所ニシテ我が地域
 ノ重要性ニ鑑ミ國家ノ目的ニ對スル寄與亦蓋シ大ナルヲ信ジテ疑ハズ

事變ハ今ヤ擴大シテ長期ノ試練ニ耐フルノ覺悟ヲ要ス半島國民彌々時局ノ趨向
 ヲ明察スルニ力メ堅忍持久、生業報國ノ信念ヲ堅持シ協心戮力以テ 聖旨ニ奉對
 センコトヲ期セザルベカラズ

疆内官民夫レ須ク厲志シ各其ノ本分ニ依テ時艱ノ克服ニ邁進スルニ勗メヨ

昭和十二年九月九日

支那事變の環境と意義

朝鮮總督官房文書課長
朝鮮統計協會長

井坂圭一良

一、背景としての世界情勢

世界には今大きな危険がいくつも存在する。人類は此の危険を取除かずしては次の時代に進むことができない。だから優秀な國民はいろ／＼とこれに就て熱心に考へてゐるが、いゝ答案はなか／＼書かれさうになく、危険そのものは腫物が膿をもつ様に刻々と悪化して行きつゝあるのが世界の現状であらう。試みに歐亞に互つての危険と不安の原因を數へ立てゝみれば、

第一にヴェルザイユ媾和條約の禍根がある。これは獨逸の將來の復讐を豫期するフランスの恐獨心理の所産として、中歐同盟側を再び起つ能はざる境遇に陥れることを目安として英佛中心の世界制覇を樹立した體制であつたが、獨逸の如き優秀民族が永くその桎梏下に満足する筈がなかつた。大戰後約十五年にして彼は勢を盛り返し、列強と對等の國際地位を獲得して國家均齊運動の先頭に立つて居る。

第二に「有つ國」と「有たざる國」との對立がある。此の點では大國中伊太利が獨逸に共鳴する。彼はアフリカ獨領植民地其の他の占取を聯合國側參戰の條件としたが、媾和會議で其の約束が認められず、隱忍十八年にして其の不満を晴らした。英、米、佛、露を資源飽滿國とすれば爾餘列國多くは資源貧弱國であつて、「有つ國」の現状維持と「有たざる國」の現状打破の二潮

流が交錯し、唯だ武力劣弱なる小國のみが此の間に介在して他力により國を完うせんと苦慮してゐる。

第三に思想と政治原理の相刺がある。ボルシエヴキズムとフアシズムとデモクラシーの三つは國際社會を區分するのみではなく國內相刺の原因を提供し、次の大戰の特徴の型を示すものとしてスペインの内亂が行はれつゝある。獨のヒットラー總統は「劍が抜かれるまではこれらの思想の間に平和はあり得ない。如何なる政治形態が歐洲に於て勝利を得るかといふ論争を決するのは戰場に於てである」と宣言したが、此の思想戰の原因はコミンテルンの支那進出によつて東洋にまで延びつたことを注意せずには居られない。

第四にロシアの海港慾求がある。これはコミンテルンの世界赤化策とは一應區別して考へねばならない。ロシアは廣くして資源に苦まないが海港を通じての世界との接觸面が狭いから富力興らず文化も揚らない。故に日當りのいゝ不凍港を獲得することとは、帝政時代たと革命政權たるとに變りない強い慾望であり、ロシアが昔から各國と戰爭を賭した動機は殆ど之に基く。南滿進出斷意後の彼は中央アジア及び外蒙、新疆を経ての南下策を英國に阻止され、其のコースを中部支那に曲げ來つたことに手段と目的の區別を見る。

第五に白色人種の優越的世界支配に對する有色人種の反抗がある。黒色人と銅色人とがいつその悲惨な境遇から脱却し得るか疑問であるが、ひとり東方アジアに黄色人種あつて對等の生存權を世界に主張するの實力を有し、日露戰爭以後の此の現象が有色人種の反噬として白色人の眼に映する。併しながら黃人の選手たる日、滿、支三國のうち、支那が利益の餌を以て白人國の勢力を借り來り、反滿抗日を國家統一の具とし、東亞一家の宿命を無視する危險なる國策をとるに及んでこゝにも平和の破綻が生じた。

第六に平和維持機構の權威喪失がある。日本の脱退によつて龜裂を生じた國際聯盟は、次で獨逸の脱退、伊太利の不即不離によつて全く無力となつた。ロカルノ條約、ワシントン條約、不戰條約、ロンドン條約等の現状維持的制縛は到底膨脹國民の自衛運動を抑止するの力がなく、集團的平和保障の機構は有名無實となつて、ベルリン、ローマ樞軸とか、ロンドン、パリ樞軸とかの外交的連衡によつてのみ、辛うじて危險が防止されてゐるが、これによつて生ずる「力の均衡」こそは歐洲再亂の原因となるものであらう。

第七にプロック經濟の武裝化がある。大英帝國がその廣大なる領土に互つて貿易の繩張りをしたことに始まつて自由通商主義の原則は死し、斬るなら突かうといふ關稅戰が展開して居る。工業と貿易によつて過剩人口を賄はねば立ち行かぬ國民の如きは自滅か爆發かの問題に面して立つに至つた。

更に檢すれば猶ほ幾項目かを擧げ得られるであらう。例へば無條約時代に於ける軍備競争と經濟との矛盾の如きをも擧げ得るであらう、更に心理的原因として、交戰國の直接戰費四千億圓、人命の犠牲八百萬、傷者二千餘萬といふ様な前大戰の悲惨な記憶が二十年の彼方に遠ざかつたことや、世界の人口が過去三十餘年の間に四億數千萬を増加して生活資料分布との比例を失ふ懸念あることなども作用せぬとは言へない。然し世界不安の根柢的な基調をなすものは國家を以て生活の單位とする國民、民族の「生きんとする意思」の燃焼であり、將來に對する積極的な安全獲得の努力であつて、優勝劣敗、適者生存の理法が事實となつて現はれて來たからに外ならない。生きる權利をもつ國民及び民族には其の生存に必要とするものが與へられねばならない。これを二三雄強國民の既得權を基礎とする規制を以て抑止せんとする所に危險が潜むことを世界の公平なる識者は知つて來た。資源飽滿國にも漸く反省の色があり、米國のハウス大佐をはじめ、植民地及び資源再分配の國際ニユウ、デー

ル提唱を弗々耳にすることは、平和論の基礎概念中に根本的、具體的な要素を含み來つた傾向を物語るものであるが、ジュネーヴにおける本問題の討論は未だ現實性なき空論として、世界の反響を呼ぶに至らない道程にある。

英のポールドウキン前首相は『文明の根柢を揺り動かされつゝある歐洲は、最早や前大戦のごとき衝突のショックに二度と堪ゆることはできない』と言つて危険に對する警告を放つたが、其の英國が十五億磅の大海軍擴張計畫や東洋の海軍根據地強化を以て他國を脅威せざるを得ざる所に、世界的苦悶の代表例が提示されて居ると見ねばならない。

二、支那の陥つた誤謬

前叙のごとき世界不安の因に對して列國各々數項目に互つて關係を有せざるはなく、而も之等の關係が交々相錯綜し、時と場合に應じて複雑の様相を呈するのであるが、東亞の一隅に卓立する我が日本帝國亦これが一メンバーとして、此の深刻な情勢の埒外に立つを許されないことは謂ふまでもなく、今次の支那事變もこれら世界情勢の影響として起つたことを認めなければならぬ。

昨年であつたか英國特派の支那財政顧問リースロス氏が支那の幣制改革を指導するに當り、我が外務省を訪れて日本の協力を求め『支那に經濟秩序を與へて繁榮に導くことは日本を含む列國共同の利益ではないか』と説いたのに對して、時の有田外相は『日本の支那に對する立場は單なる目先の利益問題ではなくして、もつと根本的な死活の問題である』と答へて日支關係の特殊性を明かにしたことがあるが、有田氏の寸言よくその重點を道破したものと謂ふべきであらう。

支那四億の人口と饒多なる資源とは歐米の工業國にとつて絶好なる消費市場であり、原料市場であるに違ひなく、其の經濟

的安定による購買力の増加が直ちに列國の商業貿易上の利益を意味することは勿論であつて、門戸開放と機會均等とが歐米各國の對支原則となつたことも其の故である。だが單り日本の立場のみは支那から必要な榮養量を吸収すれば足れりといふのでなくして、同じく東亞の天地に相隣し、世界生活に處しては俱に一家の安危を分ちあふべき關係にある。支那にして若し赤化勢力の舞臺とならんか日本の存立は多難となり、日本衰頽せんか支那は外力によつて豚肉のごとくに寸斷さるゝ可能がある（現に外蒙、新疆、西藏等然り）。日本は東洋平和保全をもつて國是とし、國運を賭して帝政ロシアの南侵を阻止した。爾來此の日本の實力が客觀的安定勢力として存在したからこそ東洋は安固を保ち支那は劫掠から免れて來たのである。東洋の問題を語るには、尠くともまづ過去百年の歴史を檢討した後ならざれば間違ひを生じ易い。

滿洲の張政權は、日本の此の犠牲と努力の結果を評價せずして、日本の特殊地位を否定せんとし、昭和六年の滿洲事變が起つた。曾て清朝時代の封禁の地にして支那の關外たる滿洲に、清朝直統の王種が民意に迎へられて帝位に即かれ滿洲帝國となつたのは勢ひの自然であり、漢民族が九割を占めて此處に安居樂業し、王道政治を謳歌して居るに拘らず、南京の黨人は之を以て日本の侵略なりと誣ひ、學校、軍隊、および社會に對する排日教育の好材料とし、屢々滿洲國攪亂を策して北支特殊地區の協定となつた。

支那が辛亥革命以來全國統一の業成らんとして成らず、地方軍閥や共產黨軍との内争のために民を屠ること一千五百萬、此の慘を避けて統一を進むるために排外政策をとるに至つたことは、一應の理解を持ってないこともないが、其の鋒先を英國から日本に轉じて所謂遠交近攻の術策を執拗に貫かんとしたことは、支那自身を誤る重大なる錯誤であつた。支那人識者中に『日本人は双の中に笑ひを藏するが、西人は笑ひの中に双を藏する』といふ程度に理解にまで達した者もあるが、日本が時に無慈

悲に見ゆる拳を揮ふことはあつたにしても、支那に對する肉親的な眞の擁護者は日本であるといふ事實を認識し得ずに居ることとは悲しむべき不幸である。日本は『幣原外交』以來、支那の幾多の排日毎日に対して摩擦を避け、彼の反省の期を待つて我慢して來た。が支那は日本の國際的弱點に乘じ、英米に利權の好餌を與へることによつて此の三大海軍國を咬み合はせんと工み、これを『太平洋上の三角鬭争』と稱して高見の見物をする立場をとつた。また昨年 of 西安事件の解決は蔣政權の聯露容共方針への轉換を示し、獨伊からは飛行機や兵器を盛に購入して貿易を密接化し、歐米勢力の各個を導入して對日包圍壓迫に成功したりと考へつゝあつた。一面裝備の高度化による中央軍の強化は對日一戰の自信を強めしめ、地方軍閥の相踵ぐ歸服は統一の觀を呈し、之に對する『支那を見直せ』との日本の輿論や佐藤前外相の『日支對等地位』の聲明は、日本の畏怖を意味するものと解した様である。日本が差伸べた親善要求の手を拂ひのけて最後に北支機關中央化の工作は思ひ切つた協定無視の覺悟の下に進められて來た。かくして北支での軍隊衝突が計畫的に起された。支那支配者の陥つた誤謬の訂正を、日支兩國民の犠牲の負擔において爲さなければならぬ所に、歐米の對支關係と異なる日支の特殊關係が嚴存するのである。

三、日滿支提携の目標

由來、帝國が劍を抜いて起つ時は、隱忍に隱忍を重ね、自衛上全く餘儀なき境地に追ひ詰められた場合のみである。日清日露がそれであつた。滿洲事變もそれであつた。青島戰は日英同盟の義務のための道義的動機であつて、戰勝の結果を正直に支那に贈物としたことは支那人の口にしない所となつて居る。近衛首相は七十二議會の演説に於て「一國が特定の他の一國を排侮蔑することを其の國策となし、國民教育の方針としてかゝる思想を幼少の頭腦にまで注入するが如きは東西の歴史に未だ曾

て類例を見ざる所で、これが將來に於ける結果を考へる時は、ひとり日支兩國の爲のみならず、東洋平和、延ひては全世界平和のため眞に寒心に堪へないものがある」と切言して居らるゝが、國民黨政府が之によつて現在の支那國民を泥沼の中に驅り立てるのみならず、次代の國民までも誤らしむることは日支兩國國民のために許されざる暴逆である。帝國が悲愴の決意を以て支那軍を討つことが固より支那民衆を敵とするものでないことは、皇軍が到處に支那民衆を撫恤してゐる事實の立證する所であるが、七十二議會に賜つた勅語によつて、民國政府の反省を促し東洋の平和を齎す以外に意圖なきことが更に明かにせられた。眞に崇高なる精神を表はず堂々たる態度であつて、いかなる第三國の猜視をも許さぬものである。

支那が長期抗日を呼號しつゝ短期潰滅に終る可能に強いことは冷靜なる第三國識者の一致せる見解である。打算に徹底せるアングロサクソンが東洋に支那の番犬として冒險を演ずるだらうと想像したことは支那の大誤算であつた。たゞ蘇聯が支那の敗戦と混亂に乗じて赤化の手を伸ばし、南京其他の親蘇派が此の機會を捉へて覇權を握らうとする氣流が濃厚となつたことは深き注意を要し、此の工作の進行に對しては防共を約する日獨の看過し得ざる所であるばかりでなく、同時に英米の座視し得ざる所であらう。國民黨政府が四億民衆を赤化の業火に投げ込むの愚を敢てすることによつて蘇聯を道連れとすることにでもなれば、日本の責任は彌々重大となり、事件の性質は更に擴大惡化して解決困難を加ふるものと覺悟せねばならぬ。日本は支那軍が潰え去り、南京政府が變形した後のことまでも隣人四億民衆のために心配してやらねばならぬ地位に置かれつゝあること國民は自覺すべきであらう。日滿支の完全なる提携一致は東亞各民族の安定點である。これを購ふに流血の犠牲を以てせねばならなくなつたことは不幸とすべきであるが、一たび劍を抜いた以上は姑息不徹底の解決を避け、皇道昭々たる恒久の大平和を日滿支五億數千萬民族のために保障する義務に於て事變の意義を全からしめねばならぬと信する。

邑面職員諸君に與ふ

朝鮮總督府囑託 江 上 征 史

本協會員(隨つて本誌讀者)の中の約六千人が邑面の職員諸君であると聞きましたので、私は時局關係のことを若干本誌上を借りて諸君に話しかけることにしました。此の頃は本府其他からいろ／＼と時局に關する小冊子類が諸君の手許に届きつゝある筈ですから、新聞と併せ讀んで諸君の認識内容も立派に充實して居ることゝは存じますが、時局は決して單純ではなく、幾つもの角度から幾様にも考察さるべきであつて、『これで澤山』といふ限度がありません。諸君は力めて各種の機會において頭の内容を深くして時局に對する判斷力を強くされ、邑面民の無智な人々を啓發してあげて下さい。これはお互ひ國民の非常時局に際しての大きな義務であります。

一 皇軍はなぜ強いか

いま北支一帯と、南では上海を中心として展びつゝある日支兩軍全面衝突の戦局に關する新聞の報道を讀んで、今更日本軍の強さに感嘆しない人はないであらう。支那軍と雖も外國製の優秀な飛行機を有ち、兵器も備へて居る。その上軍隊の數は歴倒的に多く訓練も相當なものである。それが地理に明るくして永久設備をした各所の要害に據り寡勢の日本軍を邀へ撃つのであるから、勝ち目は當然彼に無ければならないのに、實際に戦つてみれば日本軍は百戰百勝し、彼は百戰百敗する。此の不思議な現象は一體何によつて説明し得るであらうか。それは軍人の精神力の強弱の問題であると諸君も容易に考へられるであります。全くさうです。日本軍人の強さは實にその精神力にある。これは最も肝腎な點です。

支那兵も近頃は逆襲とか夜襲とかをやる。これは或る程度勇敢でなければできないことです。だが折角逆襲を思ひ立つて突き込んで来ても、日本兵ならば生死を超越して一塊の肉弾となり敵陣に飛込むといふ際どい所で、彼等は少し撃ち捲られると浮足立つて逃げるのです。命を惜むか惜まぬかといふことの微妙なる心理の差が何時も勝敗を決定する大きな要素となつてゐると思ひます。ナポレオンは『勝敗は最後の五分間にあり』と言ひましたが始めから逃げることを豫想しない日本兵の場合には何だかピツタリしませぬ。

日露役の時、旅順の要塞戦中、二〇三高地の攻略は皇軍の最も困んだ一戦で、有名な乃木大將の詩に『鐵血山を掩うて山形を改む』とある程です。當時露軍側に従軍したロンドン・タイムスの記者は『要塞の銃眼から日本兵の突撃ぶりを見下して、山腹を一面に覆ふた戦友の屍體を乗り越え、血走つた眼つきで齒を喰ひしぱり、今にも咬みつきさうな血相で駆け登つて来るブルドッグの様な恐ろしい姿を見ると、身慄ひが出て誰でも逃げ出したい氣持になる』といふ風に戦記に書いて居ます。全身これ忠魂義膽、いかなる堅壘にもぶつかつて行く此の日本兵の強さが、曾て島國の小を以て大國支那を討ち、ロシアを討ち、滿洲の張軍を討つて東洋平和の基礎を築いて來た原動力であることは申すまでもありません。然らば此の日本軍の精神力の強さは何から出て來るか。日本國民はつまらぬことを原因とした個人同士の喧嘩に必ずしも強いとは言へない。又不必要な争ひを成るべく避けて平和に暮したい性質を多分にもつて居る。が然し一たび御國の大事といふことになる、平生どんなに臆病に見える人でも人格が變つたやうに斷じて強くなるのです。既に御存知と思ふが日本軍人は召に應じて郷國を出るとき、誰一人として生還を期する者なく、陛下のため(即ち御國のため)戰場に軍功を樹て、斃るゝことを一身一門の譽とします。か弱き母親さへその愛兒の死出の征途を送るのに涙一滴をも見せず、親や家を顧みず軍功をたてよと激勵するのです。故に兵達

は戰場に臨むとき『靖國神社で逢はうぜ』と笑つて戦友と挨拶を取り交し、郷里の近親たちへも『靖國神社に會ひに来て下さい』など、手紙に書き、全く命を顧みぬ行動をとる心の準備ができて居るのです。靖國神社とは皇室が國民と共に戦死者の忠

魂を親しく御祀りになる神社(東京九段)です。日本軍人は死後神となつて國を護り、東洋平和を護るといふ信念で戦ひます。此の信念、魂、感激、満足があり、一死報國を期して突撃するのですから、日本軍の進むところ、いかなる障りもこれを阻み得ず常に優勢の敵を要害の地に壓して勝たざるなき理由がお解りでありませう。

二 支那とはこんな國

然らば支那兵は同じ人間でありながら何故日本兵と五分々々の太刀討ができぬか、何故日本兵の様な精神力の強さをもためか、それは歴史を通じて其の民族性を窺へば解ることです。今これを細かく詮索すれば面倒なることになりませんが、支那人には歴史の歸結として立派な國家意識、國民意識といふものが皆無とは謂へないまでも極めて些いのです。昔から易姓革命を繰返して王朝の興亡すること二十四たび、政權争奪のために行はるゝ相次ぐ内亂は一般の民衆にとつて天災地變とかはりない不可抗力として觀念され、國民がひと塊となつて國をよくするといふ考へも、努力もなかつたのです。『山高く皇帝遠し』で支配者は赤の他人であり、『宮闕の美を見ずして何ぞ帝位の貴きを知らんや』で、王城を見ねば治者の權威が認識されませんでした。多くの場合政府の保護を求めようとせず、あくまで自力を信じ財力を重んじて個人として他國にまで根を張つて行く支那人の民族性はこれに發します。蒋介石が革命軍を廣東に起して北伐に成功し、南京に國民黨政府を造つて全國統一を企てた時にまづ第一に手を染めたのは從來『天下の民』に過ぎなかつた支那民族を速に中華民國の『國民』に鑄直して世界列國並の近代國家を造り上げることでした。所が數千年來の民族性を鑄直し、名物の内亂をやめることは到底一朝一夕のことではない。そこで『内に和し外を攘ふ』の趣旨で外國排斥の運動を起すことによつて統一を進めることゝしました。そして最初に中南支を中心し經濟侵略の根を張る英國を排斥したが、英國の出兵となつて手ごはい目に會ふや、事を好まないで大抵のことは我慢して來た日本の足許を見て排日に轉じた。眞に東亞一家の理想を有ち從來も今後も外國の壓迫から支那を衛つてやることを立

て前として居る日本を排斥の目標としたことは、支那自身のためにも取返しのかね失敗であつたのです。かくて南京政府は排日を以て國の方針とし、國民教育、軍隊教育すべてこれを本にして日本に對する敵愾心を煽り立て、これで國民的感情を湧き立たせ國家統一を圖つて來ました。久しく續けられて居た地方軍閥との争ひ、ロシアが糸を引く共產黨軍との戦ひも之によつて歇み、二百萬といふ軍隊が政府の命令で動かせる状態となつたのですから國內的には大成功だつたと言へるでせう。然し蒔いた種子はいつかは苜らねばならぬ。多年の排日教育の結果として支那の隨所に日本人迫害が行はれ、軍隊による條約の蹂躪が行はれて日支關係は刻々悪化して行き、列國の手前マサカ本腰に起ち上るまいと思つた日本が劍を抜いて起ち上るに及んでモウ狼狽しても間に合はず敵はぬまでも長期抗戰を口にして一日々々と自らの命脈を縮めて行く外なき窮境に立つに至つた次第です。

南京政府や支那軍の幹部は久しく日本の國情を研究して居ました。特に日本の財政や經濟のこと、政治、社會、思想界のことなどを日本人以上に綿密に研究し『日本は今到底戰爭をする力をもたぬ。たとへやつても國內の利害や思想の對立が激化して破滅に瀕するだらう』との結論をつけて樂觀してゐたさうです。だがたとへ國內にいかなる争ひの原因があつても、一たび御國の大事となるや一身一家の利害や私情を犠牲にして一人のごとく結束するといふ日本國民性の傳統を研究の外に置いたことは明かに失敗でありました。部分を見て全體を掴まない觀察は何ごととも往々にして此の錯誤に陥ります。

前にも申した通り支那人には相手が強ければ屈從し、弱しと見ればそれに附け入つてどんな非道のことでもする性質がある。通州事件のごときも其の例で昔から支那の戰爭にいかにも慘虐な行爲が伴つて來たかは歴史を讀んで戰慄を禁じ得ない所です。支那兵は新式の武器を持たせられ、空軍も整備し、訓練も積んだ以上、日本軍敢て怖るゝに足らずとして教育されましたから、つひ日本軍に戦ひを挑む氣持となつたのでせうが、前申す様な精神力の差は戦ひ毎に立證されて來ました。元來支那には國民皆兵の制度がないから、其の兵は農村の壯丁を無理に徵發したり、匪賊を買収したり、甚だしきは『拉夫』といふ方法

で列車、盛り場などを包圍して働けさうな男を連れ去つて（身の代金を出せば釋放）軍服を着せた様なものが多く、其の年齢も随つて十七八歳から五十歳位まであり、僅かな給料（それも不渡り勝）で苦力にも劣つた境遇に置かれて居るのでから、其の教養や精神力の程度は言はずして明かです。近頃戦線で捕まる捕虜の中には隊長の名も知らず、何處の國と戰つてゐるかさへ辨へない者があるといふのですから、煽動にも乗り易い代りに負け戦に逃げ足の早いことも尤もな次第と思はれます。歐洲大戰に臨んだロシア軍が全くこれに似た素質であつたと言ひ、愛國心なき軍隊が衆はいかに多くとも結局勝利が味方するものでないことがお解りでせう。（支那兵も懸賞金がかけられる場合などは最も強く頑張るさうで、何ごとも金で片附ける民族性にふさはしい話ですが金が振ひ起す勇氣には程度があるでせう）。

支那軍は今日までの戦ひに於て、政府や軍幹部等の宣傳した所と異つて、日本軍がいかに強いものであるかを事實から教へられました。後方には逃げる味方を撃殺す役目を帯びた督戦隊といふのが控へて居るさうですから逃げるのも亦命がけといふことにもなりますが、全軍に互つて戦意が沮喪して來たことはその民族性に徴して疑ふ餘地がありません。戦線はおそらく異常の速度で前進することです。上海附近での戦線が急に展びなかつたのは、あの邊一帯に縦横に連るクリーク（幅五十米から百米もある運河）のためでした。

三 内鮮一體の思想の強味

以上私は日支兩軍の素質の比較を簡單に試みましたが、次に全體としての戦争の考へ方に少し觸れてみませう。『ドイツは戦闘に勝つて戦争に敗けた』と歐洲大戰の終りに批評されました。かく戦闘と戦争とは同一のものではなく、國軍が武を用ゐることが戦闘であり、此の戦闘行爲を可能ならしめ國家が其の結果を有利に收拾することが戦争であるといふ風に謂へるでせう。近代の戦争の内容を武力戦の外に戦時の經濟を十分に賄ふための經濟戦、第三國關係などを有利に導くための政略戦、お

よび自國民の精神状態を強くし、敵國民のそれを弱めるための思想戦などを含む所の國力戦であると謂はれる所以です。これらの諸要素は何一つとして重要ならざるはないが、吾々一般國民の心構へに於ては、特に思想戦に就ての十分な理解をもつて居なければならぬと思はれます。

歐洲大戰の事例を顧みてもロシアが先づ思想的に崩壊し、次でドイツが崩壊しました。フランスもイタリーもドイツが持ちこたゆれば敗戦の外なきまでに國民思想は危険に瀕して居りました。戦ひが足かけ五年にも互り、兵は十九歳から五十一歳まで徴せられて戦線に驅り出され、國民の生活資料は缺乏を告げて物價が亂騰するといふ様な事情の下に敵國側から加へらるゝ思想上の悪宣傳などに對して抵抗力が弱くなることは普通の國に於て無理もないことかも知れませぬ。例を過去にとる迄もなく現に支那においては財政經濟の破綻と相次ぐ敗戦の結果人民の思想上に大きな動搖が起り共產革命が之に乗せんとする傾向さへ強くなつて來ました。

我が日本は敵軍を國內に寄せつける心配もなく、且つ經濟の力は今よりもつと大規模の戦争にも日滿單位をもつてすれば七八年間位は堪へ得るだけの實力を有して居り、食糧は十分に自給ができるし、その上に艱難が加はれば加はるほど強く反撥する國民性をもつて居るのでありますから、いかなる事があらうと外國の様な思想の混亂に陥ることはありませぬが、然しなにも事も油断は禁物である。吾々國民は豫て十分に警めあつて此の強い結束を破り國民性を賊する者を出さぬやうにしつかりと腹を決めて居なければなりません。

私共内地人の立場から今度の時局に際して特に感激に堪へないことは、半島の國民諸君が全く内地の國民と同じ心になつて國を愛し、皇軍を支持し、銃後の任を頌たれつゝあることです。それらの美しい事績は新聞をはじめ色々の印刷物に錄せられ、多くの人々を泣かせて居ますが、先日政務總監は京城放送局から日滿兩國民に呼びかけてこれに對する感激を語られ、『朝鮮同胞が内地人と變らない熾烈な愛國心に燃えつゝあるといふ一事によつて、も早や内鮮人の思想感情が一致し、共に日

本國民として心の底から手が握り合へる境地に進み入つたことを斷言し得』『曾て内鮮人間の一部分にあつたかも知れないと思はる、薄い紙一枚の隔りすら取除かれた様な感じがする』といふ言葉を以て喜びを現はされました。私ども喜怒哀樂の感情をなべく外に表はさない様に教育されて来た者は、餘ほどのことでないと言情や言葉に現はし得ないのですが、内鮮の間がほんとに精神的にひと塊になつた此の喜びだけは涙を以て現はさぬ譯に行きませぬ。實にこれは東洋における一つの歴史的事實が見事に完成された姿であり、またこれを劃線として新しい歴史が始まることを意味します。吾々お互ひの感情、意思、希望、努力が全く相同じき國民としての資格に於て一致し、我々の國家がそれだけの質と量とに於て強味を加へたのです。半島同胞諸君も亦此の心境において無敵皇軍の勇ましい進軍に祈をさ、げ、日本帝國の指導下に東洋平和の大建設が行はるゝことを信じ得る喜びをもたると、思ひます。

今世界の總人口は約二十億餘にしてその中歐洲と北米に國する約六億五千萬の白人の支配の下に三倍餘の有色人種が屈服して居りひとり日本帝國の一億國民のみが白人と對等の實力を有し滿洲國民と手を繋いで東洋の平和を自ら衛るの使命に進んで居る。この光榮ある責任、名譽ある地歩、一に全國民の鐵のごとき信條と結束とによつて遂行さるべきは申すまでもなく、この國民的地位と使命を共に自覺された所に此の内鮮一體の實が擧つたことを疑ふ者ではありません。そしてこの時局に對する認識と信念とが全朝鮮の人々に及ぶときに、もはや吾々は敵國人などによつて爲さるるいかなる思想攪亂の陰謀をも反撥するのみでなく、敵國民をして吾等の強烈なる信條の下に屈服せしめる力をもつに至ることは明かです。

我が帝國の正しく且つ強いことを十分に信じ、我が帝國が東洋の恒久平和を建設し擁護する唯一最大の實力と使命とをもてる事實を信じ、そして此の光榮ある大國民としての誇と自負とをもつて各自が其の與へられたる職分を守つて努力の最善を盡してゆく此の精神的態度をお互ひ國民の一人々々に對して非常時の國家は要求して居ます。

諸君、吾々は千萬載にして、めぐり逢ひ得ない此の歴史上の大偉業を我々の國家によつて成し遂げる時期に生れ合せた感激を共にしてしつかり働かうではありませんか。(九月二十日)

義講上誌

統計の話 (六)

京城帝國大學教授 大 内 武 次

前回で官廳統計の三種別を申し上げて、それを第一種、第二種、第三種と申しておきましたが、矢張り何か特別の名稱をつけておかないと、工合が悪いのであります。それで只今でもまだ好適の名稱を見出しませんが、もつと良い名稱があつたら改めることにいたしました。一と先づこゝで命名をして置かうと思ひます。それで前回で第一種と申しましたのを記録統計、第二種と申しましたのを再製統計、第三種と申しましたのを實査統計、こう云ふ風に命名することにいたします。それでその命名の由來を御話しまして、そして前回の説明と多少重複することではありますが、改めてこの三つの統計の特色を明にしたいと思ひます。

記録統計

こゝで記録統計と申しますのは、官廳の活動それ自體が集積されて、その結果が記録として示される所の統計を指すのであります。官廳が自己に固有な事務を執行してゆくに際して、その事務の執行自體の中に、統計たるべき事實が存して居る場合、その事務の執行は當然官廳の記録として止めらるべき事であり、そこで記録そのものが統

計として示されることとなります。これを記録統計と申すのであります。即ち官廳の記録自體の中に統計が成立する。そう云ふ意味でこれを記録統計と命名するのであります。

各々の官廳は、それが司法に關するものでも、行政に關するものでも、立法に關するものでも、その孰れにあつても、皆夫々定められた固有の活動範圍を持つて居ります。従つてその活動の結果は記録に止められてゆくのであります。それでその記録の中で統計として成立するものがあつた場合にそこに記録統計が出現するのであります。稅務署は納税に付き、警察署は犯罪檢舉に付き、郵便電信局は郵便電信に付き、稅關は輸出入貨物につき、鐵道は運輸に付き、裁判所は民事刑事に付き、夫々記録が爲されます。そしてその記録の集成が統計として示された場合、即ち記録統計である所の、財務統計、警察統計、遞信統計、貿易統計、鐵道統計、民事又は刑事統計が成立するのであります。それでありませうから、この統計に於て、調査さるべき統計の客體は、官廳それ自身の固有の活動にあるのであります。その統計調査に該當するものは、官廳の機關としての機能そのもの、中に存し、そしてその内部組織の規程によつて、執務の規程が運用されて行く中に記録が出來上つて、それが統計となつてゆく、こう云ふ性質の統計であります。

それ故この記録統計にありましては、調査さるべき統計の客體は、全くその官廳の固有の活動範圍内に止り存して居るのであります。即ち官廳が自己の活動としてその範圍内にとり入れたもの、中にのみ、統計の調査客體は存するのであります。この點は後に述べる實査統計に於て、その調査客體が官廳の正規の行政行為の範圍外に存し、従つて行政上特別に整規せられた、統計的活動があるのでなければ、統計が成立しないと云ふのは全く趣を殊にするのであります。

再製統計

再製統計と申しますのは、その統計の基本となる所のは、記録統計に於けると同じく、各官廳の活動の結果たる記録として存して居るのでありますが、その記録自體が統計として示されるのではなく、その中から特に統計として示さうとする事項を拾ひ上げて、それを集計することによつて成立する所の統計を指すのであります。即ちこの統計を作るには特別の統計調査を必要とするものではない、既にその統計の基本たるべき材料は、官廳の活動の結果たる記録として成立して居る。たゞその記録の中から必要とするものを再びとりあげて、それを集計するからこゝに統計が出来上るのである。こう云ふ意味でこれを再製統計と名づけたのであります。内地にあつて、國勢調査が行はれます以前には、人口は本籍人口によつて示されて居りました。これは既成の官廳記録たる戸籍簿に基いて、人口を數へ上げて得た所のものでありますから、再製統計であります。

この統計と記録統計とを較べて見ますと、後者にあつては特に統計を作成すると云ふ特別の意思がなくとも、官廳自體の固有の活動の集積が、自ら統計となつて成立して來るのであります。前者にあつては、特に既に存して居る材料の中から、統計を作り出さうと云ふ特別の意思がなければ、統計は出来上らないのであります。それ故記録統計の成立にあつては見る事の出来なかつた所の、統計のための集計行爲と云ふものが、再製統計にはなければならぬのであります。それでありませうからこの統計の成立は、記録統計よりも手數のかゝつた所のものであります。然しこれを後に述べる實査統計に較べて見ますと、それにあつては統計作成のため特別の統計調査を必要とするのであります。再製統計ではそれを必要としない、たゞ集計の手間を加へる丈のことでありませうから、實査統計よりはその

作成の手續が簡單なのであります。

再製統計の最も進んだ例は、人口の動態統計であります。戸籍役場に出生、死亡其他の届出があつた場合、一方それは戸籍簿に登録せらるゝことでありますが、他方にあつては、それに基いて出生票、死亡票などが作成され、それは統計局に送られて、そこで集計されて統計が出来るのであります。それは再製統計の典型的のものであります。獨逸にありましては、その他に破産竝に犯罪に關する統計が、再製統計なのであります。即ち裁判所は破産の宣告、又は犯罪の確定判決を、調査票に記入して統計局に送ります。統計局ではそれを集計して統計を作ることになつて居ります。

そこで、今この再製統計に於ける、その調査さるべき統計の客體はどうなつて居るか、と云ふことを考へて見ますと、それ等の客體は、官廳の固有の活動の結果たる記録それ自體の中に準備されて存して居るのであります。けれどもそれは準備された文のものでありますから、統計とするには、その中から客體を求め出さなければなりません。そこで、にその客體を確認することが、行はれなければならないのであります。斯る客體の確認は、その統計の材料を準備した官廳によつて行はれることが、最も正確であり得るでありましよう。従つてそれは一般にその官廳が行ふことになつて居ります。けれどもそれを集計することになりますと、統計の進歩しなかつた時にあつては、同一官廳によつて爲されたこともありますが、今日では原則として統計専門の特別官廳がそれを行ふのを一般といたします。

實 査 統 計

實査統計は、只今述べた記録統計、再製統計と異りまして、統計を作るため特別の調査をして作り上げる所の統計であります。この場合、その特別調査たる實査がなければ、統計が出来上らないのでありますから、これを實査統計

と申したのであります。この種の統計の典型的のものは、國勢調査や勞働調査を行ふことによつて出來上る所の統計であります。けれども其他にも澤山あるのであります。今日外地に於て各年末現在に於て調査さるゝ所の現住人口に關する統計並に農産物の收穫統計、工場生産物に關する統計、漁獲物に關する統計などの産業統計は大部分これに屬するのであります。

實査統計にありましては、特別の調査によつて統計が出來上るのでありますから、行政上統計調査のために整規された特殊の活動を必要といたします。そのために統計局と云ふやうな、特殊の統計官廳が成立して居る場合もありますし、又そうでない場合もありますが、要するにそれ等のことに關しましては整然として規定された統計的活動を特殊行政として定めて置かなければなりません。元來實査統計にあつては、その調査さるべき統計の客體は、記録統計や再製統計の場合のやうに、官廳の固有の活動範圍内に存して居るのではなく、その以外にあつてその束縛を受けない別個の天地に動いて居る所のものでありますから、その點で嚴密な統計的調査方法が定められなければなりません。そしてその調査方法に基いて、統計活動に關する行政規定が詳細に定めらるべきであります。斯くしてこゝに整然たる統計行政が確立せられるのであります。而して今斯る行政的活動の行はれます場合を考へて見ますと、その調査の大部分は、調査客體の關係者から報告を徴したり、又は答辯をさせたり、或は申告をさせたりすることから成つて居るのであります。従つてそれ等の者に對してある強制を加へて、その調査の確實を期することになければなりません。それがため法律によつて、統計の調査客體の關係者に對して、報知又は答辯申告の義務を課することを一般といたします。官廳統計が民間統計などに比較しまして、その信憑性の高いものであると云ふことは、主としてかゝる權力の下に調査が行はれ得ると云ふ點にかゝつて居るのであります。このやうにいたしまして、實査統計は成立する

のであります。

尙ほ統計に付ては第一義統計、第二義統計と云ふ用語が存して居ります。第一義統計と申しますのは、統計を作成するため直接に統計調査を行つて得る所の統計を指すのでありますから、實査統計がそれに該当するのであります。然るに第二義統計はそのやうな直接調査からではなく、統計作成以外の目的によつて爲された行爲から、統計的結果が得られて出來上る統計を指すのでありますから、記録統計竝に再製統計がこれに相當するものであると云つてよいでありますやう。然しこれ等用語よりは、私が述べたこの三種の區別の方が實用のある區別ではないかと考へます。

記録統計の成立する基礎

以上述べました、官廳統計の三種別は、夫々の統計の信憑性を検査する所の基準にもなりますし、又夫々の統計の科學性を検討する所の基準にもなります。けれども、それ等のことは後に述べることゝいたしまして、こゝでは以前から述べて参りました統計の成立、竝に發展の過程を、この三種別に基いて述べて、その有様をもつとハッキリさせて見たいと思ひます。

只今も申しました通り、記録統計は、官廳の活動そのものが、記録として存する結果、出來上る所のものでありますから、官廳の活動があり、その記録がある限り、この統計は存し得る所のものであると云はなければなりません。然し乍ら、記録統計が正しく出來るためには、官廳の固有の活動の範圍が確定されて、秩序正しく間違ひなく、記録に止るやうな仕組になつて居なければなりません。特に行政機關が、特定の制度の下にあつて統一的組織を持つて居るやうになつて居なければなりません。それでなければ記録統計は成立することは出來ないのであります。

そこで今主として行政組織に付きまして、それがどう云ふ風にして完備して来たものであるか、その跡を辿つて見ますと、いづれの國にあつても、それは十九世紀に這入つてから始めて、その整然たる完備を見て居るのであります。佛蘭西に付て見ますと、行政組織は十七世紀あたりから統一されんとしつゝあつたのであります。絶對專制の政治が次第に中央集權の色彩を強めて參るにつれて、段々と整頓されて來て居るのであります。然し乍らその近代的整備の基礎が据えられましたのは、大革命に次でナポレオンの帝政が成立したときでありまして、それは十九世紀の初頭であります。獨乙地方、特に普魯西に付いて見ますと、この國は早くから官吏制度が確立されて居りまして、官僚的施政が行はれて居たのであります。その組織の近代的整備の基礎は、十九世紀初頭のスタイン・ハルデンベルグの改革と呼ばれる所の中央行政機關の改善によつて定められて居るのであります。又英吉利に付て見ますと、それは漸次の改革が行はれて居りまして、その主たるものは十八世紀末に於けるエドモンド・バークの行政改革、次でナポレオン戦争に際して行はれたウィリアム・ピットの改革などによつて、近代行政組織の素地が出来るのであります。歐洲の重要諸國に於きましては、このやうにしまして、行政組織確立の基礎が定められて居るのであります。そして其後に於て議會政治が完全に發達することになりましてから、一方に於て政治の目標は議會によつて決定され、行政はその決定に基いてそれを實行する部門であると云ふことになつて、こゝで眞に統一ある所の整然たる機構を持つた、行政組織の完備した形態が出現するに至つたのであります。それで記録統計は、このやうな行政組織の整備と併行しまして、その進歩發達を見て來て居るのであります。行政組織の整備は即ち記録統計成立の基礎をなすもののであります。それでありまして、記録統計の成立は十九世紀に於てゞあります。

然し乍ら、既に十八世紀にありましては、まだ專制政治の下でありましたが、ある程度行政組織の整備は見られた

ことなのでありますから、その頃にあつては、早くも記録統計と目し得べきものが存して居たのであります。もとより當時の統計は今日の意義に於ける統計ではありません。まだその公開が阻まれて居たときのことでありますから、ここに存する記録統計的のものは、眞の統計から見れば、その先驅たるものに過ぎないのであります。然しあらゆる統計の中で、その先驅たる統計として、最もその形式の整つて居たのは、記録統計だつたのでありますから、それは注目し値するのであります。即ち他のどの統計にも魁けて、統計として發達を見たのは、記録統計であつたのであります。

佛蘭西に付て申して見ますならば、政府の記録が公開されることになりましたのは、一七八九年のことであります。それ迄は凡ての政府記録が秘庫の中に鎖されてあつたのであります。そのやうに秘密ではありましたが、統計の形式を以て示された記録は、既に多く存在して居ました。その第一に數ふべきは財政統計であります。財政は既にそのこと自身が數字からなつて居る所のものでありますから、そのやうな記録は全然統計の形式をとるのであります。従つて記録統計の中で最も早く存在を見た所のものは即ち財政統計であります。その最も最初のもの十七世紀の初頭に遡つて見ることが出来ます。かの有名な政治家シユリー公が財政統計に着目したと云ふこと、竝に政府記録の重要性を認めて、それを保存するため一局を設けたと云ふことは、既に曩に申し上げたことであります。その記録保存局は、遺憾なことに當時の専制政治下に於きましては、永續出来なかつたのであります。財政の記録が其後に於て段々と存して居たものであることは、十八世紀に出版された書物に、それが収載せられて居ることによつて知る事が出来るのであります。元より此等の書物は孰れも秘密出版であります。その中から政府記録に基く所の財政統計を拾ひ上げることが出来ることと云ふこと、これは斯る方面に於ける記録統計の發達を證する所のものであります。殊に十八世紀になりますと、それが特に豊富になつて居ります。けれどもそれ等が記録統計として未だ不完全のものであつたと云ふことは、既に大革命の直前に於て統計局設立の必要を力説した、かの大政治家のネットケルが、「それ等の記録

は公開せられない所のものであるから、その點に缺點がある。特に上級の役人が自己の取扱へる金額を變更又は隠匿して居る點があるから、官廳の記録ではあるが信憑力は甚だ乏しいのである。」と云つて居る事によつて知ることが出来ます。そしてネットケルは斯る統計的記録の誤謬、虚偽はそれを公開することによつて是正せらるべきものであることを主張して居るのであります。斯くしてやがて、佛蘭西は大革命に入り、政府の記録はすべて公開せられることになりました。且又行政組織も一變せられ、眞の記録統計は成立するに至つたのであります。

財政統計に次で記録統計の先驅として、見遁すことの出来ないのは貿易統計であります。大革命以前に於て佛蘭西は領土の擴張、植民地の獲得、豪華な宮廷生活、それらを維持するため、資源たる商工業を統制し、貿易の均衡を計ることに努めなければならなかつたのであります。従つて税關の記録は重んぜられて居りました。十七世紀の中頃、佛蘭西の生むだ最大の財政家であると云はれたコルベールは、常にこれを利用して、輸出状態から國の年々の生産額を推定すると云ふやうな試をなしたと云ふことであります。それで十八世紀に這入りましてから、一七一三年に、貿易均衡を知るに必要とする記録を保存するため、特別の局が設立さるゝに至つたのであります。これは佛蘭西で統計に關聯して設立された官廳の、最初のものであると云はれて居ります。この官廳は其後續いて存置されまして、一七八五年にはネットケルによつて、貿易均衡局と命名せられました。そしてその活動は更に續けられたのであります。それでありまして、佛蘭西の貿易統計は一七一六年以降にあつては、累年に互つて存して居るのであります。然し當時の記録統計でありますから不充分のものであつたことは云ふ迄もありません。これも亦ネットケルの指摘することになりますと、税關官吏が密輸を行つて居たのであるから、その記録は甚だ不完全であるし又その貨物の金錢評價が甚だ不正確であつたと云ふことであります。然し大革命以後に於てこの記録も公開せらるゝことになり、又行政組織も一段と整備されて、これは次第に完全のものとなりやがて眞の記録統計として成立することになつたのであります(未完)

昭和十一年の婚姻及離婚

總督官房 文 書 課

第一 婚 姻

一 總數 朝鮮に於て昭和十一年に行はれた婚姻は内地人二、四〇七件、朝鮮人一二三、六九三件、外國人六九件、計一二六、一六九件で一日平均三四六件に當り、人口千人に付五・七二の割合である。之を前年に比較すると實數に於ては二、七五三件を、割合に於ては〇・〇八を増加した。

最近五年間に於ける婚姻率の趨勢を觀ると昭和七年の六・三四（人口千に付）より同十年の五・六四迄漸次減少を續けて來たが、昭和十一年に至り五・七二となり稍々増加を示した。

昭和七年	總數	内地人	朝鮮人	外國人	人口千
		一三〇、五〇〇	二、二七四	二六、三三五	六・三四
同 八年	總數	内地人	朝鮮人	外國人	人口千
		一三六、六四四	二、一四五	二四、四〇〇	六・〇九

同 九年	一三三、六三三	二、三三三	二九、〇四一	六	五・七五
同 十年	一三三、四六六	二、〇九二	二二、四六六	六	五・六四
同 十一年	一三六、六九九	二、四〇七	二二、六九三	六	五・七三

二 道別 昭和十一年に於ける婚姻を道別に觀ると最も多いのが慶北の一四、〇四五件で京畿の一、一五、一三件及慶南の一、二、三四六件之に亞ぎ、最も少いのは咸北の四、二四二件で忠北の五、三四一件及忠南の七、四七一件が之に亞いでゐる。尙人口千人に對する婚姻の割合を觀ると最高は江原の七・二六で黄海の六・八三及平北の六・六一之に亞ぎ、最低は全南の四・一六で之に亞いで忠南の五・〇四及咸北の五・二一と比較的低い方である。

各道の婚姻率を前年に比較すると増加したものの八箇所減少したものの五箇所、増加の最も著しいのは慶北の〇・五一及

忠南の〇・四九で、減少の最も著しいのは、黄海の〇・八六である。

	實 數			人口千に付
	總數	内地人	朝鮮人 外國人	
全 鮮	二六、一六九	二、四〇七	二、三三三、九三三	昭和 昭和 比較増 十二年 十年 (△減)
京畿道	一一、五二三	五、五七二	一一、四九六	五・三三 五・四〇△〇・七
忠清北道	五、三四一	二・六	五、三三三	五・八九 五・六三 〇・二六
忠清南道	七、四七一	九三	七、三七八	五・〇四 四・五五 〇・四九
全羅北道	八、三四四	一一五	八、三三八	五・四三 五・六九△〇・七
全羅南道	一〇、〇六一	一四〇	九、九二一	四・六 三・九三 〇・三三
慶尙北道	一四、〇四五	一五〇	一三、八九三	五・七二 五・二 〇・五二
慶尙南道	一一、三六六	四五一	一一、八九三	五・六 五・七 〇・四一
黃海道	一一、一〇一	八三	一一、二四	四・八三 七・六九△〇・八六
平安南道	八、四三三	一一三	八、三二〇	五・八七 五・九四△〇・七
平安北道	一〇、七〇〇	八七	一〇、五九四	六・六一 六・三六 〇・二五
江原道	一一、九六六	五五	一一、四〇〇	一・七二六 七・二〇 〇・〇六
咸鏡南道	一〇、三六六	三三	一〇、四九	三・六四七 六・四三 〇・〇五
咸鏡北道	四、四三三	二二三	四、一〇五	五・五二 五・二七 〇・〇六

三 年 齡 別 昭和十一年に於ける婚姻當事者の年齢階級別

百分比例を先づ夫に就いて観ると、内地人は二五—二九歳の五八・九%最も多く、三〇—三四歳の一七・七%及二〇—二四歳の一三・九%が之に亞いでゐる。朝鮮人は二〇—二四歳の

三七・三%最も多く、一七—一九歳の三一・四%及二五—二九歳の一三・五%が之に亞いでゐる。即ち朝鮮人は内地人に比し婚姻最盛期が一階級低い。

内地に於ける昭和十年の比例を觀ると二五—二九歳が最も多く四四・五%で二〇—二四歳の二四・六%及三〇—三四歳の一五・四%が之に亞いでゐる。即ち朝鮮に於ける内地人の婚姻は内地に於ける夫れよりは婚姻最盛期たる二五—二九歳の割合が遙かに高く二〇—二四歳の割合が少いのが著しく、朝鮮人に於ては内地に於ける夫れより婚姻最盛期が一階級低く二四歳迄の婚姻が内地に於ては僅かに二割六分なるに比し八割を占めてゐて早婚の傾向が著しい。

總 數	内地人		朝鮮人		内地(十年)	
	實 數	百分比	實 數	百分比	實 數	百分比
一七歳未滿	二	〇・一	一三六五〇	一一・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇
一七—一九歳	一三	〇・五	三八、八〇三	三・四	五、七九七	一・〇
二〇—二四歳	三六五	一・三九	四六、一二三	三・七	三、七三二	三、八七
二五—二九歳	一、四七	五・六九	一六、七〇七	一三・五	二、五〇、四八	四四・五
三〇—三三歳	四六	一・七七	四、三三四	三・五	八、五〇六	一五・四
三五—三九歳	二四	四・七	一、八九七	一・五	三、五四七	五・九
四〇—四九歳	六七	二・八	一、四四八	一・二	二、六三五	五・二

同	九	年	100.0	13.8	33.3	34.0	13.3	1.7	1.3	0.4	0.1	
同	十	年	100.0	11.6	33.4	35.9	13.3	1.6	1.1	0.4	0.1	
同	十	一	年	100.0	11.0	33.4	37.3	13.5	1.5	1.2	0.5	0.1

内地

昭	和	六	年	100.0	1.7	29.1	42.4	5.6	5.0	2.1	0.8
同	七	年	100.0	1.5	28.3	42.7	5.7	5.7	2.1	0.8	
同	八	年	100.0	1.4	26.9	42.2	6.0	5.2	2.2	0.9	
同	九	年	100.0	1.2	25.7	43.6	5.9	5.3	2.2	0.8	
同	十	年	100.0	1.0	24.6	44.5	5.4	5.9	2.2	0.9	

次に妻に就て観ると内地人は二〇―二四歳の六二・八%最も多く二五―二九の一八・九%及一五―一九歳の一一・七%之に亞ぎ、朝鮮人は一五―一九歳の七二・六%最も多く、二〇―二四歳の一四・〇%及一五歳未満の八・四%が之に亞いでゐる。即ち朝鮮人は内地人に比し婚姻最盛期が一階級低く、又内鮮人共妻の婚姻最盛期は夫に比し一階級低く、尙最盛期に於ける割合は著しく多い。

内地に於ける昭和十年の状況を観ると二〇―二四歳の五四・九%最も多く、二五―二九歳の一九・〇%及一五―一九歳の一四・二%が之に亞いでゐる。即ち朝鮮に於ける内地人の婚

姻は内地に於ける夫れよりも婚姻最盛期たる二〇―二四歳の割合が遙かに多いことが著しく、朝鮮人に於ては婚姻最盛期が一階級低く、二〇歳未満の婚姻が内地に於ては僅かに一割四分なるに比し八割一分を占めてゐて早婚の傾向が著しい。

内地人		朝鮮人		内地(昭和十年)	
總數	百分比	實數	百分比	實數	百分比
一五歳未満	1.8	100.0	100.0	55.6	100.0
一五―一九歳	21.0	21.7	89.8	7.9	14.2
二〇―二四歳	15.1	63.8	17.4	40.0	54.9
二五―二九歳	45.4	18.9	35.9	29.1	19.0

三〇—三三歳	九三	三・九	一、三三	一・〇	三、三三	五・四
三三—三六歳	二四	一・〇	五・九	〇・五	一四、九六	二・七
三六—三九歳	三	〇・九	四・三	〇・四	三、四七	二・四
三九—四二歳	四	〇・二	二・三	〇・二	五、七〇	一・〇
四二—四五歳	一	〇・〇	二・五	〇・〇	一、三九	〇・三
四五—四八歳						
四八—五一歳						
五二—五五歳						
五五—五八歳						
五八—六一歳						
六一—六四歳						
六四—六七歳						
六七—七〇歳						
七〇歳以上						

此の比例を既往五箇年間に就いて観ると内地人は二〇—二四歳が過半を占め大體漸増の傾向があり、第二位は、昭和七年及び同九年に於ては一五—一九歳が占めてゐるが、其の他の年に於ては二五—二九歳が之を占め、而して一五—一九歳は激減、二五—二九歳は激増の傾向を示してゐる。朝鮮人は昭和七年に於て一五—一九歳の六七・〇%、二〇—二四歳の

一七・〇%、一五歳未満の九・八%の順位で以後大體同順位である。而して一五—一九歳は逐年漸増し、二〇—二四歳及び一五歳未満は何れも減少してゐるが、概していへば妻は尙ほ依然として早婚の風が窺はれる。

之等を内地に於ける状況と比較して観ると内地に於ては二〇—二四歳及二五—二九歳が漸増し、一五—一九歳が漸減して漸次晩婚へ移動しつつあるに對し、朝鮮に於ては内地人は二〇—二四歳に密集せんとし、朝鮮人は夫れより一階級低く、一五—一九歳に集中せんとする傾向がある。

内地人

昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	朝鮮人	總數	未一五歳	一五—一九歳	二〇—二四歳	二五—二九歳	三〇—三四歳	三五—三九歳	四〇—四九歳	五〇—五九歳	六〇歳以上
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.1	19.3	24.4	25.1	4.1	1.3	1.0	0.2	
9.8	0.0	0.0	0.4	0.7	0.7	9.8	19.3	16.6	5.8	17.6	4.2	1.4	1.1	0.3	
67.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	67.0	15.9	13.1	6.2	15.0	3.6	0.9	1.1	0.2	
17.0	62.8	64.3	62.7	62.8	62.8	17.0	18.9	3.9	1.0	0.9	1.0	0.9	1.1	0.0	
37.7	22.8	24.3	21.7	22.8	22.8	37.7	25.1	3.0	3.0	3.4	4.1	4.1	5.0	6.0	
1.4	3.0	3.4	3.0	3.0	3.0	1.4	3.0	3.4	3.9	4.4	4.1	4.1	4.9	5.0	
0.6	3.5	3.9	3.5	3.5	3.5	0.6	3.5	3.9	4.4	4.9	4.9	4.9	5.9	6.0	
0.4	4.0	4.3	4.0	4.0	4.0	0.4	4.0	4.3	4.8	5.3	5.0	5.0	5.9	6.0	
0.1	5.0	5.3	5.0	5.0	5.0	0.1	5.0	5.3	5.8	6.3	6.0	6.0	6.9	7.0	
0.0	6.0	6.3	6.0	6.0	6.0	0.0	6.0	6.3	6.8	7.3	7.0	7.0	7.9	8.0	
0.0	7.0	7.3	7.0	7.0	7.0	0.0	7.0	7.3	7.8	8.3	8.0	8.0	8.9	9.0	
0.0	8.0	8.3	8.0	8.0	8.0	0.0	8.0	8.3	8.8	9.3	9.0	9.0	9.9	10.0	
0.0	9.0	9.3	9.0	9.0	9.0	0.0	9.0	9.3	9.8	10.3	10.0	10.0	10.9	11.0	
0.0	10.0	10.3	10.0	10.0	10.0	0.0	10.0	10.3	10.8	11.3	11.0	11.0	11.9	12.0	
0.0	11.0	11.3	11.0	11.0	11.0	0.0	11.0	11.3	11.8	12.3	12.0	12.0	12.9	13.0	
0.0	12.0	12.3	12.0	12.0	12.0	0.0	12.0	12.3	12.8	13.3	13.0	13.0	13.9	14.0	
0.0	13.0	13.3	13.0	13.0	13.0	0.0	13.0	13.3	13.8	14.3	14.0	14.0	14.9	15.0	
0.0	14.0	14.3	14.0	14.0	14.0	0.0	14.0	14.3	14.8	15.3	15.0	15.0	15.9	16.0	
0.0	15.0	15.3	15.0	15.0	15.0	0.0	15.0	15.3	15.8	16.3	16.0	16.0	16.9	17.0	
0.0	16.0	16.3	16.0	16.0	16.0	0.0	16.0	16.3	16.8	17.3	17.0	17.0	17.9	18.0	
0.0	17.0	17.3	17.0	17.0	17.0	0.0	17.0	17.3	17.8	18.3	18.0	18.0	18.9	19.0	
0.0	18.0	18.3	18.0	18.0	18.0	0.0	18.0	18.3	18.8	19.3	19.0	19.0	19.9	20.0	
0.0	19.0	19.3	19.0	19.0	19.0	0.0	19.0	19.3	19.8	20.3	20.0	20.0	20.9	21.0	
0.0	20.0	20.3	20.0	20.0	20.0	0.0	20.0	20.3	20.8	21.3	21.0	21.0	21.9	22.0	
0.0	21.0	21.3	21.0	21.0	21.0	0.0	21.0	21.3	21.8	22.3	22.0	22.0	22.9	23.0	
0.0	22.0	22.3	22.0	22.0	22.0	0.0	22.0	22.3	22.8	23.3	23.0	23.0	23.9	24.0	
0.0	23.0	23.3	23.0	23.0	23.0	0.0	23.0	23.3	23.8	24.3	24.0	24.0	24.9	25.0	
0.0	24.0	24.3	24.0	24.0	24.0	0.0	24.0	24.3	24.8	25.3	25.0	25.0	25.9	26.0	
0.0	25.0	25.3	25.0	25.0	25.0	0.0	25.0	25.3	25.8	26.3	26.0	26.0	26.9	27.0	
0.0	26.0	26.3	26.0	26.0	26.0	0.0	26.0	26.3	26.8	27.3	27.0	27.0	27.9	28.0	
0.0	27.0	27.3	27.0	27.0	27.0	0.0	27.0	27.3	27.8	28.3	28.0	28.0	28.9	29.0	
0.0	28.0	28.3	28.0	28.0	28.0	0.0	28.0	28.3	28.8	29.3	29.0	29.0	29.9	30.0	
0.0	29.0	29.3	29.0	29.0	29.0	0.0	29.0	29.3	29.8	30.3	30.0	30.0	30.9	31.0	
0.0	30.0	30.3	30.0	30.0	30.0	0.0	30.0	30.3	30.8	31.3	31.0	31.0	31.9	32.0	
0.0	31.0	31.3	31.0	31.0	31.0	0.0	31.0	31.3	31.8	32.3	32.0	32.0	32.9	33.0	
0.0	32.0	32.3	32.0	32.0	32.0	0.0	32.0	32.3	32.8	33.3	33.0	33.0	33.9	34.0	
0.0	33.0	33.3	33.0	33.0	33.0	0.0	33.0	33.3	33.8	34.3	34.0	34.0	34.9	35.0	
0.0	34.0	34.3	34.0	34.0	34.0	0.0	34.0	34.3	34.8	35.3	35.0	35.0	35.9	36.0	
0.0	35.0	35.3	35.0	35.0	35.0	0.0	35.0	35.3	35.8	36.3	36.0	36.0	36.9	37.0	
0.0	36.0	36.3	36.0	36.0	36.0	0.0	36.0	36.3	36.8	37.3	37.0	37.0	37.9	38.0	
0.0	37.0	37.3	37.0	37.0	37.0	0.0	37.0	37.3	37.8	38.3	38.0	38.0	38.9	39.0	
0.0	38.0	38.3	38.0	38.0	38.0	0.0	38.0	38.3	38.8	39.3	39.0	39.0	39.9	40.0	
0.0	39.0	39.3	39.0	39.0	39.0	0.0	39.0	39.3	39.8	40.3	40.0	40.0	40.9	41.0	
0.0	40.0	40.3	40.0	40.0	40.0	0.0	40.0	40.3	40.8	41.3	41.0	41.0	41.9	42.0	
0.0	41.0	41.3	41.0	41.0	41.0	0.0	41.0	41.3	41.8	42.3	42.0	42.0	42.9	43.0	
0.0	42.0	42.3	42.0	42.0	42.0	0.0	42.0	42.3	42.8	43.3	43.0	43.0	43.9	44.0	
0.0	43.0	43.3	43.0	43.0	43.0	0.0	43.0	43.3	43.8	44.3	44.0	44.0	44.9	45.0	
0.0	44.0	44.3	44.0	44.0	44.0	0.0	44.0	44.3	44.8	45.3	45.0	45.0	45.9	46.0	
0.0	45.0	45.3	45.0	45.0	45.0	0.0	45.0	45.3	45.8	46.3	46.0	46.0	46.9	47.0	
0.0	46.0	46.3	46.0	46.0	46.0	0.0	46.0	46.3	46.8	47.3	47.0	47.0	47.9	48.0	
0.0	47.0	47.3	47.0	47.0	47.0	0.0	47.0	47.3	47.8	48.3	48.0	48.0	48.9	49.0	
0.0	48.0	48.3	48.0	48.0	48.0	0.0	48.0	48.3	48.8	49.3	49.0	49.0	49.9	50.0	
0.0	49.0	49.3	49.0	49.0	49.0	0.0	49.0	49.3	49.8	50.3	50.0	50.0	50.9	51.0	
0.0	50.0	50.3	50.0	50.0	50.0	0.0	50.0	50.3	50.8	51.3	51.0	51.0	51.9	52.0	
0.0	51.0	51.3	51.0	51.0	51.0	0.0	51.0	51.3	51.8	52.3	52.0	52.0	52.9	53.0	
0.0	52.0	52.3	52.0	52.0	52.0	0.0	52.0	52.3	52.8	53.3	53.0	53.0	53.9	54.0	
0.0	53.0	53.3	53.0	53.0	53.0	0.0	53.0	53.3	53.8	54.3	54.0	54.0	54.9	55.0	
0.0	54.0	54.3	54.0	54.0	54.0	0.0	54.0	54.3	54.8	55.3	55.0	55.0	55.9	56.0	
0.0	55.0	55.3	55.0	55.0	55.0	0.0	55.0	55.3	55.8	56.3	56.0	56.0	56.9	57.0	
0.0	56.0	56.3	56.0	56.0	56.0	0.0	56.0	56.3	56.8	57.3	57.0	57.0	57.9	58.0	
0.0	57.0	57.3	57.0	57.0	57.0	0.0	57.0	57.3	57.8	58.3	58.0	58.0	58.9	59.0	
0.0	58.0	58.3	58.0	58.0	58.0	0.0	58.0	58.3	58.8	59.3	59.0	59.0	59.9	60.0	
0.0	59.0	59.3	59.0	59.0	59.0	0.0	59.0	59.3	59.8	60.3	60.0	60.0	60.9	61.0	
0.0	60.0	60.3	60.0	60.0	60.0	0.0	60.0	60.3	60.8	61.3	61.0	61.0	61.9	62.0	
0.0	61.0	61.3	61.0	61.0	61.0	0.0	61.0	61.3	61.8	62.3	62.0	62.0	62.9	63.0	
0.0	62.0	62.3	62.0	62.0	62.0	0.0	62.0	62.3	62.8	63.3	63.0	63.0	63.9	64.0	
0.0	63.0	63.3	63.0	63.0	63.0	0.0	63.0	63.3	63.8	64.3	64.0	64.0	64.9	65.0	
0.0	64.0	64.3	64.0	64.0	64.0	0.0	64.0	64.3	64.8	65.3	65.0	65.0	65.9	66.0	
0.0	65.0	65.3	65.0	65.0	65.0	0.0	65.0	65.3	65.8	66.3	66.0	66.0	66.9	67.0	
0.0															

同	八年	100.0	九.九	六.八	一五.八	三.六	一.二	〇.六	〇.四	〇.一	〇.〇
同	九年	100.0	八.九	七.〇	一五.二	三.一	一.一	〇.五	〇.四	〇.一	〇.〇
同	十年	100.0	八.八	七.二	一四.〇	三.〇	一.〇	〇.五	〇.四	〇.一	〇.〇
同	十一年	100.0	八.四	七.三	一四.〇	二.九	一.〇	〇.五	〇.四	〇.二	〇.〇

内地

昭	六年	100.0	未一五 滿	一五.一	二〇.一	二九.五	三〇.一	三五.一	四〇.一	五〇.一	六〇.歲 上
和	七年	100.0	〇.〇	一三.九	一五.九	一五.四	五.三	二.五	二.四	一.〇	〇.二
同	八年	100.0	〇.〇	一七.九	五四.三	一六.三	五.五	二.五	二.三	一.〇	〇.二
同	九年	100.0	〇.〇	一六.六	五四.三	一七.一	五.六	二.七	二.五	一.〇	〇.二
同	十年	100.0	〇.〇	一五.二	五四.七	一八.一	五.五	二.七	二.五	一.一	〇.二
同	十一年	100.0	〇.〇	一四.二	五四.九	一九.〇	五.四	二.七	二.四	一.〇	〇.三

更に夫妻相互の年齢を組合せて観ると、内地人は夫の二一
 五―二九歳と妻の二〇―二四歳との婚姻最も多く總数の四割
 三分を占め、夫妻共に二〇―二四歳及夫の三〇―三四歳と妻
 の二〇―二四歳の九分之二に亞ぎ、朝鮮人は夫の二〇―二四歳
 と妻の一五―一九歳の二割八分最も多く、夫の一七―一九歳
 と妻の一五―一九歳の二割六分及夫の一七歳未滿と妻の一五
 ―一九歳の八分が之に亞いで多い。

内地人

妻の年齢	夫の年齢	總數	未一七 滿	一七 歳	二〇 歳	二五 歳	三〇 歳	三五 歳	四〇 歳	五〇 歳	六〇 歳 上
總數	總數	二、四〇七	二	二二	三三	一、四一七	四二六	一四	七	七	六
一五歳未滿	一八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一五―一九歳	三八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二〇―二四歳	一、五二二	八	八	二四	一、〇三二	三二八	三六	二	一	一	一

道	總數		夫		妻	
	實數	婚姻者百に付	實數	婚姻者百に付	實數	婚姻者百に付
全 鮮	三、〇六	九・七	一三、六五〇	一一・〇	一〇、四一一	八・四
京畿道	一、四七〇	六・二	六九二	五・八	七七八	六・五
忠清北道	一、〇四九	一・九	一、〇八八	二・〇	九三三	一・八
忠清南道	一、七〇九	一・六	九三〇	二・六	七九三	一・六
全羅北道	八九六	五・四	四三三	五・一	四七四	五・八
全羅南道	九五六	四・八	五五四	五・六	四〇四	四・一

次に昭和十一年に於ける法定年齢未滿の者の總數に對する割合を道別に觀ると、忠北の一割九分を最高とし、平南の一割八分及平北の一割三分之に亞ぎ、其他忠南・咸南・江原・黄海も全鮮平均以上を示してゐる、之に反して低いのは全南の四分八厘を首め、慶南及全北の五分で、其他京畿・慶北・咸北は何れも全鮮平均以下を示してゐる。

昭和七年	三、〇四五	一一・一	一八、四七〇	一四・四	一二、五七五	九・八
同 八年	二、七五五	一一・〇	一七、四四一	一四・〇	一二、三三〇	九・九
同 九年	三、五八六	一〇・九	一五、二七三	一二・八	一〇、五三三	八・九
同 十年	二、四七五	一〇・一	一四、〇四一	一一・六	一〇、七一一	八・八
同 十一年	二、四〇六	九・七	一三、六五〇	一一・〇	一〇、四一一	八・四

第二 離 婚

一 總數 朝鮮に於て昭和十一年に行はれた離婚は内地人一〇〇件、朝鮮人五、二七八件、外國人一件、計五、三七九件で一日平均一五件に當り、人口千人に付〇・二四の割合である。

之を前年に比較すると實數に於ては五六件を増加したが割合に於ては増減はない。尙婚姻千に付四二・六で前年に比し〇・五を増加してゐる。

最近五年間に於ける人口千人に對する離婚の割合を觀ると漸次減少してゐる。

慶尙北道	二、一三一	七・七	一、八六六	一〇・〇	七四五	五・四
慶尙南道	一、一九五	五・〇	六三三	五・二	五八二	四・九
黄海道	二、三六六	一〇・七	一、七〇四	一一・四	一、〇一一	九・一
平安南道	二、九九九	八・〇	一、七三三	二・五	一、二六六	一四・六
平安北道	三、〇〇二	二・九	一、八四八	一七・四	一、一五四	一〇・九
江原道	二、三九九	一〇・九	一、八八三	一一・六	一、一一六	一〇・一
咸鏡南道	二、二〇九	一一・〇	一、三三六	一一・一	八九三	八・九
咸鏡北道	六五八	八・二	三六三	九・〇	二九五	七・三

道	總數		離 婚		人口千に付
	實數	婚姻者百に付	實數	婚姻者百に付	
昭和七年	六、七三三	一・六三	六、五四八	一	〇・三三

同 八年 五、七三 一五五 五、七七 一 〇・六二
 同 九年 五、一七 八五 五、〇〇 二 〇・三四
 同 十年 五、三三 九六 五、三六 一 〇・三四
 同 十一年 五、三九 一〇〇 五、七八 一 〇・三四

二 道別 昭和十一年に於ける離婚を道別に觀ると最も多いのが慶南の六三八件で、全南の六二八件、黄海の五二〇件、京畿の四八五件之に亞ぎ、最も少いのは咸北の七七件で、忠北の二五一件及忠南の二九七件が之に亞いでゐる、尙人口千人に對する離婚の割合を觀ると最高は黄海の 〇・三二で、平北及江原の 〇・三〇之に亞ぎ、最低は咸北の 〇・〇九で慶北の 〇・一八が之に亞いでゐる。

各道の離婚率を前年に比較すると増加したものの六箇道、減少したものの六箇道、變動ないもの一箇道で増加の最も著しいのは全南の 〇・〇五、減少の最も著しいのは忠北の 〇・〇七である。

	實數			人口千に付	
	内地人	朝鮮人	外國人	昭和十一年	昭和十年 (比較増)
全 鮮	五、三七九	一〇〇	五、二七六	〇・四四	〇・四〇
京畿道	四八五	三三	四七三	〇・三三	△〇・〇一
忠清北道	二五一	一一	二五二	〇・二七	△〇・〇四

忠清南道	二九七	二	二九五	〇・一〇	〇・三三	△〇・〇一
全羅北道	三三八	五	三三三	〇・二二	〇・三三	△〇・〇一
全羅南道	六二六	四	六三三	〇・二六	〇・二二	〇・〇五
慶尙北道	四〇八	七	四一四	〇・二六	〇・二八	〇・〇〇
慶尙南道	六三六	五	五七九	〇・二九	〇・二六	〇・〇三
黄海道	五三〇	一	五〇〇	〇・三三	〇・三七	△〇・〇五
平安南道	三六五	一	三六四	〇・七	〇・元	△〇・〇三
平安北道	四八三	二	四八	〇・三	〇・元	〇・〇一
江原道	四三二	一	四三二	〇・三	〇・元	〇・〇一
咸鏡南道	三六七	六	三六一	〇・四	〇・二	〇・〇三
咸鏡北道	七	一	七六	〇・九	〇・〇	〇・〇一

三 年齢別 昭和十一年に於ける離婚の年齢階級百分比例を先づ夫に就て觀ると内地人は二五—二九歳のもの最も多く三五%を占め、三〇—三四歳の二八%、二〇—二四歳の一九%之に亞ぎ、朝鮮人は二〇—二四歳の二七・二%最も多く、二五—二九歳の二五・七%、三〇—三四歳の一四・七%が之に亞いでゐる。之を婚姻の場合と比較して觀ると内鮮人共婚姻の多い歳は離婚も亦多くなつてゐる。

	内地人		朝鮮人	
	實數	百分比	實數	百分比
總數	一〇〇	一〇〇・〇	五、二七六	一〇〇・〇
一七歳未満	—	—	一〇三	二・〇

一七一—一九歳 一 一・〇 四七一 八・九
 二〇—二四歳 一九 一・〇 一、四三七 二七・二
 二五—二九歳 三五 三・〇 一、三五六 二五・七
 三〇—三四歳 六六 二・〇 七七五 一四・七
 三五—三九歳 九〇 三・〇 五二一 九・七
 四〇—四九歳 四〇 一・〇 四三〇 八・〇
 五〇—五九歳 一 一 一五一 二・九
 六〇歳以上 二 二・〇 五四 一・〇

次に妻に就て観ると内地人は二五—二九歳最も多く、總數の四五・〇%を占め、二〇—二四歳の二八・〇%、三〇—三四歳の一四・〇%之に亞ぎ、朝鮮人は二〇—二四歳の三一・三%最も多く、一五—一九歳の二五・一%、二五—二九歳の二〇・一%が之に亞いでゐる。之を婚姻の場合と比較して観ると、内鮮人共に離婚の多い年齢は婚姻の多い年齢より一階級上位になつて居る。

内地人	内地人		朝鮮人	
	實數	百分比	實數	百分比
總數	100	100.0	5,776	100.0
夫の年齢				
妻の年齢				
總數	100		1	
未滿			1	
一七歳			1	
一七—二〇歳			1	
二〇—二四歳			1	
二四—二九歳			1	
二九—三〇歳			1	
三〇—三四歳			1	
三四—三九歳			1	
三九—四〇歳			1	
四〇—四九歳			1	
四九—五〇歳			1	
五〇—五九歳			1	
六〇歳以上			1	

一五歳未滿 一 一・〇 一六五 三・一
 一五—一九歳 一 一・〇 一、三七七 二五・一
 二〇—二四歳 三六 三・〇 一、六五四 三三・三
 二五—二九歳 四五 四・五 一、〇六三 二〇・一
 三〇—三四歳 一四 一・四 一、四〇〇 二〇・六
 三五—三九歳 六 六・〇 二五四 四・八
 四〇—四九歳 四 四・〇 一七五 三・三
 五〇—五九歳 一 一 六三 一・三
 六〇歳以上 一 一・〇 九 〇・四

更に夫妻相互の年齢を組合せて観ると内地人は夫妻共に二五—二九歳のもの最も多く、總數の一割八分を占め、夫の三〇—三四歳と妻の二五—二九歳の一割五分及夫の二五—二九歳と妻の二〇—二四歳の一割二分之に亞ぎ、朝鮮人は夫妻共に二〇—二四歳の一割三分最も多く、夫の二〇—二四歳と妻の一五—一九歳の一割一分及夫の二五—二九歳と妻の二〇—二四歳の一割が之に亞いでゐる。

二五—一	三〇—	三五—	四〇—	五〇—	六〇—
二九歳	三四歳	三九歳	四九歳	五九歳	以上
三五	三六	三九	六	一	二

第三 配・偶・數

一 總數 昭和十一年末に於ける配偶數は内地人一二七、五七〇組、朝鮮人四、六七四、五四六組、外國人八、三八六組、計四、八一〇、五〇二組で、人口千人に付有配偶者は四三六二人に當る。之を前年末に比較すると實數に於ては 一一、七七二組を増加したが人口千人に對する有配偶者の割合は二人を減少した。

有配偶者の割合を最近五箇年間に就て觀ると概して漸減の傾向がある。

年	實 數			人口千人に付有配偶者
	内地人	朝鮮人	外國人	
昭和七年	四、六三六、五九六	一一、四〇〇	四、五九、六七七	四三〇
同 八年	四、六三三、六六七	一一、三九元	四、五四四、六三三	四四九
同 九年	四、六二八、八三五	一一、三九元	四、五九九、九〇四	四四四
同 十年	四、七九八、七三〇	一一、三二八	四、六八八、九三二	四四九
同 十一年	四、八七〇、五〇二	一一、三七五、七〇	四、六四四、五四六	四三六

二 道別 昭和十一年末に於ける人口千人に對する有配偶者の割合を道別に觀ると、最高は忠北の四六〇人で、江原の四五八人が之に亞ぎ、最低は慶南の四一一人で、全南の四二二人が之に亞いでゐる。

各道の有配偶者の割合を前年末に比較すると忠南・全北の二人及慶北・咸南の一人増加したものと及全南・黃海の増減無しを除き他の各道は何れも減少してゐる。

實 數

道	總 數		人口千人に對する有配偶者數	
	内地人	朝鮮人 外國人		
全 鮮	四、八七〇、五〇二	一一、三七五、七〇	四、六四四、五四六	四三六
京畿道	五三、九六六	三、〇九二	四八、八五八	四三〇
忠清北道	三〇八、七三二	一、八五六	三〇六、八七七	四三六
忠清南道	三三七、四四九	五、五四七	三三二、九〇二	四三〇
全羅北道	三三九、八〇六	七、七二六	三三二、〇八〇	四三〇
全羅南道	五〇九、九六五	九、四三七	五〇〇、五二八	四三〇
慶尙北道	五三三、五九〇	一〇、八九四	五二二、六九六	四三〇
慶尙南道	四五一、二五	一〇、九〇〇	四四〇、三五五	四三〇
黃海道	三二七、八三八	四、四九三	三二三、三九五	四三〇
平安南道	三二七、三二	七、六七三	三一九、六四九	四三〇
平安北道	三五四、九五九	四、八四六	三四〇、一一三	四三〇
江原道	三五〇、六〇	三、一三六	三四七、四六四	四三〇
咸鏡南道	三四七、五四四	一〇、三五九	三四六、一九〇	四三〇
咸鏡北道	一七四、二九九	九、五三九	一六四、七六〇	四三〇

第四 内地人と朝鮮人との配偶數

一 總數 朝鮮に於ける昭和十一年末現在の内地人と朝鮮人との配偶數は一、二二二組で、此の中四〇組は同年中に婚姻したものである。配偶の種類別は「内地人で朝鮮婦人を妻とするもの」六二五組、「朝鮮人で内地婦人を妻とするもの」四三〇組、「朝鮮人で内地人の家に入婿したもの」四七組、「内地人で朝鮮人の家に入婿したもの」一九組である。最近五年間の

趨勢を観ると概して増加の傾向を示してゐる。

年	總數	内地人 朝鮮婦人 を妻とす るもの	朝鮮人 内地婦人 を妻とす るもの	朝鮮人 内地人の 家に入婚 したもの	内地人 朝鮮人の 家に入婚 したもの
昭和七年	九五四	五三三	三六四	四	九
同八年	一、〇三九	五八九	三七七	四	一五
同九年	一、〇七九	六〇三	三六五	四	七
同十年	一、〇三八	六二二	三九一	四	六
同十一年	一、一三二	六五五	四〇〇	四	九
全 鮮	一、一三二	六五五	四〇〇	四	九
京畿道	一、一三二	六五五	四〇〇	四	九
忠清北道	× 二〇	× 一八	× 二二	× 一	× 一
忠清南道	× 二〇	× 一八	× 二二	× 一	× 一
全羅北道	× 七九	× 六七	× 四一	× 二	× 一
全羅南道	× 七九	× 六七	× 四一	× 二	× 一
慶尙北道	× 九二	× 八〇	× 五二	× 二	× 一
慶尙南道	× 九二	× 八〇	× 五二	× 二	× 一

二 道別 昭和十一年末に於ける内地人と朝鮮人との配偶數を道別に觀ると京畿道の二〇四組最も多く、慶尙南道の一四五組、全羅南道の九八組等之に亞ぎ、忠清北道の二〇組が最も少い。

道	總數	内地人 朝鮮婦人 を妻とす るもの	朝鮮人 内地婦人 を妻とす るもの	朝鮮人 内地人の 家に入婚 したもの	内地人 朝鮮人の 家に入婚 したもの
黄 海 道	× 六二	× 四二	× 二〇	× 一	× 一
平 安 南 道	× 五〇	× 三三	× 一七	× 一	× 一
平 安 北 道	× 七〇	× 六六	× 四	× 一	× 一
江 原 道	七〇	三七	三三	× 一	× 一
咸 鏡 南 道	× 八二	× 五九	× 二三	× 一	× 一
咸 鏡 北 道	六九	四六	二三	× 一	× 一

三 職業別 昭和十一年末に於ける内地人と朝鮮人との配偶數を職業別に觀ると、商業及交通業の三三五組最も多く、公務及自由業の二八二組と工業の二一四組が之に亞いで多い。

業 種	總數	内地人 朝鮮婦人 を妻とす るもの	朝鮮人 内地婦人 を妻とす るもの	朝鮮人 内地人の 家に入婚 したもの	内地人 朝鮮人の 家に入婚 したもの
總 數	一、一三二	六五五	四〇〇	四	九
農 林 及 牧 畜 業	× 四〇	× 二二	× 一八	× 一	× 一
漁 業 及 製 鹽 業	× 三三	× 二二	× 一〇	× 一	× 一
工 業	× 二四	× 一五	× 〇九	× 一	× 一
商 業 及 交 通 業	× 三三	× 二二	× 一〇	× 一	× 一
公 務 及 自 由 業	× 一〇	× 〇九	× 〇一	× 一	× 一
其 他 の 有 業 者	× 七九	× 五二	× 二七	× 一	× 一
無 職 及 職 業 を 申 告 せ ざ る 者	× 三三	× 二二	× 一〇	× 一	× 一

(×印は昭和十一年に婚姻せるもので内書である)

統計事務に對する慶北清道郡の施設

地方委員 許

洽

統計事務の重要なことは今更論議の餘地もなく一般に於て充分認識して居ることと思ふ、殊更今次の北支事變等に依り層一層之が重要性を加へつゝあることも現實である。而して之等重大なる基礎統計作成指導の使命を荷ふ郡として如何にして正確敏速に其の責務を全うすべきやは日夜焦慮しつゝあることである。加之環境は決して理想を顯現すべきとは凡そ縁遠き立場にあるのであつて數年來農村振興運動等郡面事務の幅輦激増は決して統計數字の正否に付詳細に検討すべき餘裕はあり得ないのである。がさりとて斯く重大なる統計を輕視し粗雑に取扱ふことは統計事務關係者として良心的に許さないのである。此の難局の打開は唯一の方法として先づ趣味を持ち能率増進を計るの外對處するの途はないのである。

次は統計に對する趣味の一挿話である。一月中旬頃嚴寒の夜午前二時頃或る面事務所に燈火が耿々とし若い面職員は人口統計の集計檢算に孜々として餘念がない。彼の説に依れば「人口統計程面白いことはない、出生・死亡・職業等種々の現象を列記してある小票に依り集計する内に、出生となれば何んだか自分の家族が出生した様に非常に嬉

しいが、死亡になると反對に悲しい氣分がするので一人の出生も死亡も實に疎に出来ない、進んで總計と月別とに依り比較對照する等利用すれば益々面白いので夢中になり集計檢算に従事し時間の経過と氣候の嚴寒を忘れることが往々にある」とのことである。實に斯く趣味を持たなければ完全無缺なる統計は到底望めないものである。人口統計計りでなく凡ての統計は利用如何に依つては趣味と實益が伴はないのではない筈である。次は本郡統計事務に對する施設の概要一・二である。之れは事新しいことでもなく他の郡に於ても既に相當實行せられてゐることと思ふ故何にも參考になることゝは思はないが、數字計算に依り頭惱混亂の際一讀せらるゝ時は一種の笑ひ材料として或は他山之石となることもあるかと思ふ。

一 面に於ける統計材料の蒐集方法の統一

統計は一表なりとも材料がなかるべからずとの方針にて必ず材料を蒐集することにして居る。材料は左の區分に依り作成して居る。

(1) 實地調査に依り材料を蒐集し得る場合

報告例第 何々表	何々郡市 (實地調査の場合)
報告例第 號	何々
件名	何々
(1) 實地調査の方法及日時	
(2) 實地調査せし計數	

(2) 直接産物に依り材料を算定する報告

報告例第268號 邑面基本財産及町洞里財産現在表

(1) 調査材料	
面基本財産臺帳(三月末日現在)ニ依ル	
(2) 調査事項	
(イ) 番面積 150坪 時價1,500圓一年間小作料收入見込	50圓
(ロ) 田面積2,000坪 時價 400圓	20圓
(ハ) 現金1,000圓	預金利率 50圓

(3) 報告例第226號 肥料消(組合ノ分)費高表

(1) 調査 金融組合ニ照會シ別紙回答ノ通り	(個人ノ分)
(2) 調査 別紙實地調査書ノ通り	

(4) 机上産物に依り材料を作成する場合

報告例第221號 工産表

草鞋ノ生産

(1) 机上産物ニ依ル事由

家内工業トシテノ自家用草鞋ノ生産量ノ調査ニ製造ナル生産者自ラ其ノ年産量ヲ確知シ得ザルニ因ル

(2) 計數ノ算出基礎

(5) 生産統計材料算定方法

報告例第312號 麥作付反別及收穫高表 昭和 年 何面

(1) 作付反別

平出部(何洞何洞ノ一部)町反畝(内災害地区除)	外ノ町反畝ヲ含ム
中央部(何洞何洞ノ一部)町反畝	同
繁谷部(何洞何洞ノ一部)町反畝	同
計	町反畝()

(2) 收穫高

反當收量

平出部 $\left(\begin{matrix} \text{上} \\ \text{中} \\ \text{下} \end{matrix} \right) \times \left(\frac{\text{3坪ニ對スル坪}}{\text{別收量} \times 100} \right) \times (\text{作付反別一畝坪面積}) = \text{總收量}$

上 石 斗 升

反當收量

$$\left(\frac{\text{3年=對スル坪}}{\text{刈收量} \times 100} \right) \times (\text{作付反別 畦畔面積}) = \text{總收量}$$

反當收量

$$\left(\frac{\text{3年=對スル坪}}{\text{刈收量} \times 100} \right) \times (\text{作付反別 畦畔面積}) = \text{總收量}$$

中央部	上	上
中	同	石
下	同	斗
計	同	升
総谷部	中	上
下	同	石
計	同	斗
計	同	升

(3) 反當收量高

總收量高 + 作付反別 (畦畔ヲ除外セサルモノ) = 反當收量高

麥刈成績表 (昭和 年分) 何面

區	分	刈者姓名	坪刈年	乾葉前	同上	乾葉後	減少量	坪刈者
		氏名	月 日	刈收量	刈收量	刈收量	刈收量	氏名
平田部	上							
	中							
中央部	上							
	中							
	下							

総谷部	上						
	中						
	下						

前記各項記載例に依り材料を蒐集することとした、而して面に於ける統計材料は蒐集困難なる現狀に鑑み年二回以上各面の擔任職員をして統計材料を郡に持参せしめ交互検査を施行し相互競争せしめたる結果頃者に至りては其の成績相當見ゆるべきものあるに至つた。

二 郡面に於ける統計報告の期限勵行の施設

統計報告の期限勵行は殊に必要である、本郡は郡及各方面に左の方法に依る「カード」式統計報告整理表を作成整理せしめたる結果その効果顯著である。

(1) 総士縣官廳用表(原カマーニ採取)

統計報告整理表

報告事項	報告例第	號	報告年月日	
			昭和 年 月 日	昭和 年 月 日
根基令達			昭和 年 月 日	昭和 年 月 日
報告期限			昭和 年 月 日	昭和 年 月 日
報告先	慶尚北道知事		昭和 年 月 日	昭和 年 月 日
係別			昭和 年 月 日	昭和 年 月 日
備考				

(イ) 本票は両面同様印刷するものとす
 本票及同原簿(次ノ様式参照)は統計主任に於て豫め夫々當該

欄に記入整理し月別に區分保存す

(ハ) 翌月中に報告すべきものは前月末迄統計主任に於て本票を各
擔任係主務者に配付し本票原簿は統計主任に於て保存す

(ニ) 各係主務者に於て本票の配付を受けたるときは机上に夫々保
存し毎日目に觸れるやうにし報告期限に付常に留意すること

(ホ) 報告済のときは本票報告済年月日欄に報告年月日を記入認印
の上統計主任に回付す

(ト) 統計主任本票の回付を受けたるときは次の本票原簿と一括し
て保存す

本票は一枚にて十年間使用し得べきものなり
統計報告整理票原簿(カード式紙刷り)

統計報告整理票原簿 青 道 郡

報告事項	報告例第	號	摘 要
根基令達			
報告期限	月	日	
報告先	慶尚北道知事		
係 別			

(1) 本簿は片面刷とす (2) 本簿は根基令達の改廢の都度補
正使用し永久使用し得べきものなり

三 檢算及審査の勵行

統計は檢査及審査を要すること緊要なるに鑑み之が勵行を期せむか
爲左のゴム印を面に備置せしめ統計表を郡に提出するときは各自責
任印を押さしめたる處之亦効果的なることと認む。

四 統計講習會の開催

毎年一回必ず開催することにして居る。本年の分は去る七月二十七
日より二日間郡内名利雲門寺大鐘閣に於て開催し主として勸業關係
統計材料蒐集方法に付實務を修習せしめた。

五 他係との連絡協調

統計事務の刷新改善と成績擧揚は統計主務者一人の努力にては如何
ともならぬのである。即ち全部の關係者が一致協力しなければ効果
は期待されないものであるから之が連絡協調に最も留意し左の各項を
實行しつゝある。

- 1 道より送付せられた統計報告成績表は必ず關係者に回覽し成績
優秀なる係には謝意を表し反對なる係には内容に依りては其の事
務の一部を援助し成績の挽回を計らしめて居る。
- 2 面に送る成績表も必ず關係者全部に回覽せしめて居る。
- 3 重要統計を作成したるときは謄寫し各係に一部宛配付してゐる。

六 統計圖表の作製制用

統計圖表は毎年面及郡の各係は二枚以上を七月中に提出し八月中旬郡
に揭示し審査したる上順位を定め各面に巡回供覽せしめて居る。
叙上の外統計文書箱の設置と利用統計報告用紙類の保存並實地調査
方法に付實行して居る事例もあるが他日に譲ることとする。

區	分	責 任 者	印
製	表		
檢	算		
統計主任内容審査			

人口調査小票記載要領

文書課統計係

○住居及世帯

- 一、報告例の現住戸口表、職業別表、内地人本籍別表に於ける「多數集合する場屋」とは多數人が寢食する目的の爲に設備せられたる建造物を謂ふ。
- 二、報告例に於ける準世帯とは
(イ) 家計を共にせざる者の集團たること
(ロ) 多數人が寢食する目的の爲に設備せられたる建造物に寢食し居る集團たること
例へば病院、合宿所等の如く多數人が寢食する目的の爲に設備せられたる建造物に寢食し家計を共にせざる者の集團を謂ふ。
- 三、病院、合宿所等の如き家計を共にせざる者の集合する場屋の一部に管理者、事務員、門衛等の普通世帯あるときは之を準世帯に混同せざるべし。
- 四、旅館、下宿屋等に在ると否とに拘らず間借自炊を爲す者は一個の普通世帯とするべし。
- 五、素人下宿に在る下宿人は同居人とするべし。

六、起臥飲食の設備なき舟筏には世帯を認めざるべし。

七、一區劃内に在る寺刹の住居、世帯は住持を世帯主に、住持以外の者を同居人と看做し記載すること、但し僧侶に於て別に世帯を有するときは各其世帯に付調査すること

八、數人が一家を構え、各自費用を支出し炊事は共同にするも別に家計を樹つる者或は雇人をして賄を爲さしめ其の費用のみを各自負擔するが如きもの等は各別個の普通世帯とすること。

九、學校の寄宿舎に於ける寄宿生が年末に尙寄宿舎に留り居るときは寄宿舎を準世帯とし、家庭に歸省し居るときは其の屬する家庭の世帯に現住せる者と看做し記載すること。

一〇、入院患者又は其の家族にして附添等を爲すが如き者は病院を準世帯にするものの中に含めず自己の世帯に於て記載すること。

一一、旅館、下宿屋等に於ける營業の主人及其の家族、雇人等の集りは一の普通世帯と

し、下宿人等の集りは一の準世帯とするべし。

○職業

一、主業者とは一戸に於ける生活の主となるべき職業（報告例職業別表に於ける職業七分類の各業）に従事する者を謂ふ。

二、商店、會社等に通勤する者の職業は通勤先の職業に依り分類すること。

三、準世帯の職業は準世帯の屬する普通世帯の職業の行の「其の他の業務を有する者」及「無業者」の各相當欄に掲記すること、即ち準世帯の職業は其の準世帯の屬する普通世帯と同一ならしむること。

四、家庭の婦女子が家庭の炊事裁縫に従事するは職業と認められざるを以て無業者とすること。

五、區長の職を有するのみにて他の職業なき者の職業は公務及自由業とすること。

六、小作料のみに依り生活する者の職業は無職とすること。

七、農業上の日傭労働者（農業戸口表に於ける專業被傭者）は農林牧畜業とすること。

八、理髮師、髮結、美容師、藝妓、旅館、料理店の女中給仕人等の職業は商業及交通業とすること。

九、音楽家、舞踊家、畫家、彫塑家、俳優、私立探偵、武道指南、觀相家等の職業は公

務及自由業とすること。

一〇、蒲鉾製造、製氷業の職業は工業とすること。

一一、天然水販賣、看行商人の職業は商業及交通業とすること。

○ 婚姻及離婚

一、婚姻及離婚は調査する年の一月一日より十二月末日迄に行はれたる組数を記載すること。

二、年齢は満年を以て記載すること。

三、内地人、朝鮮人、外國人相互間の法律上の婚姻は其の入籍の如何に依り區分すること、例へば朝鮮人男にして内地人女を妻とし入籍せる場合は内地人女を朝鮮人小票に記載するが如し。

四、内地人、朝鮮人、外國人相互間の内縁關係は女を男の籍に入りたるものと看做し男の小票に記載すること、例へば朝鮮人男と内地人女との内縁關係は内地人女を朝鮮人小票に記載するが如し。

五、内地人男と内縁關係に在る朝鮮人、外國人女の本籍は男の本籍と同一ならしむること。

上海地名の讀み方

上海に於ける地名の讀み方にはいろいろあつて、不便な向きもあるでせう。左に普通に使はれてゐる讀み方を記してみます。片假名は支那讀みで、平假名は日本讀みです。

江鎮	平涼	百老	其美	寶山	馬玉山	天通	克明	嘉興	麥拿	黃浦	靶子	開北	文路	洋徑	閩行	同濟	黃浦	北河	乍浦	白保	
陰江	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	
キヤンイン	チンキヤン	ピンリヤン	ブロードウェイ	キピロ	ほうざんろ	ばぎよくざんろ	てんつうあん	コウミンロ	カシンロ	マゲノリヤ	ワンプタンロ	ボウツロ	ザホク	ブンロ	ヤンキンバンロ	ミンハンロ	ドンチロ	こうほこう	きたかなんろ	チャツプロ	パツボラロ

丁興	徐家	楊樹	吳淞	施高	軍工	青雲	十三	橫濱	虹橋	北四	引翔	鳴綠	虹橋	海寧	赫司	狄思	虬江	大馬	寶樂	龍華	西華	江灣	滬杭	下南	
里路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路	路路
ていこうり	じよかわいろ	ヤンジツプ	ウースンロ	スコットロ	ぐんこうろ	せいうんろ	セロツプ	さんざり	ワンバンヂヤホ	きたしせんろ	インジヤンコン	スカツチロ	ホンヂヤヲ	ハイニンロ	ハスケルロ	デキスウエロ	キウカンロ	ダマロ	ダラツクロ	ロンホア	シワドロ	キヤンワンロ	ここうよう	ナンジヤン	

(京日、八、二六)

話の塵

大義生

在留支那人

事變の初め頃は支那を喰つて了ふとヘンな理屈をつけて、支那料理を注文した人もあつたが、追々と注文しなくなり、まして宴會などはバツタリ絶えてしまひ、此の頃では支那料理店は殆ど閉店して歸國したらしい。

二十年來賣り込んだ或支那料理屋も、とうとう故國に引揚げることもなつたので、古くから御得意の誰彼を一夕招待してお手のものゝ支那料理で盛んな留別の宴を開いた。その席上人のよい主人は「永年日本の皆さんに御ヒイキを頂きましたが、此の頃の營業不振で、とてもやつて行けませんので、お別れする事となりました」と涙ながらの挨拶に、並み見る來客も憐れを催し一同申合せて餞別金

一封を贈る事とした。ところがその支那人は殊勝にもそれをそつくり國防獻金にと、其の筋に差出したと云ふ。

我が國の對支方針は抗日軍閥の掃蕩と赤化思潮の東漸防止とにあつて、支那民衆を敵とするものではない事を、彼等在留支那人に一層徹底せしめたものである。

紅雀

「オクサン、ヤサイイリマセンカ」と毎朝やつて來る小鳥好きの支那人が、玄關の紅雀の籠に菜ツ葉をさし入れたりしてゐるが、その若い支那人もいつしか來なくなつた或日、二羽の内の一羽が籠から逃げてしまつた。そしてその翌朝、メツタに泣かぬ籠の鳥がけたましく美聲を張りあげてゐるので、フトみると昨日逃げた紅雀が籠の近くに歸つて來てゐる。それから毎朝近くの樊忠壇の方からとんで來て夕方まで、家の前庭や近所の屋根あたりに遊んでゐるが、仲々捕へることは出來ぬ。凡そ二週間を経て涼しくなつた數日前のこと、俄に燃えたつやうな眞紅に近い羽根になり、姿も大きくなつて矢張り鳥籠の近くにやつて來た。

はじめは全然別の鳥かと思つたが、矢張り

逃げた鳥で、きれいになつたのは秋に近づき自然の保護色に變つたのであつた。こんなにきれいになつたので子供達は益欲しがり、とうとうトリモチで捕へて了つた。

揮發油で羽根や足にくつついたトリモチをとつてやり、彼女のあこがれの籠に入れてやると、初めの間はバタ／＼してゐたが、暫らくすると、彼氏と仲よく並んで押しつ押しされつ見ちやゐられぬむつまじさである。どんなに窮屈でも貧しくとも、矢張り好いた同志にこした事はないと見える。

千人針

せまい京城本町を俵の横乗りですまして通る藝者衆も、粹人にはともあれ、吾々の眼には無教養を裝身具と化粧品でカモフラージュしたものとしか見えぬし、三越前で車を乗りすてゝ、本ブラにお出かけの令夫人や令嬢は、高見の花で親しみのうすい存在でしかない。と云つてハイヒール、引き眉、頬紅の職業婦人にもあまり好意は持てぬ。

かうした氣むづかしいオヤヂ階級の眼にも、今度の事變で世の御婦人なるものゝ、眞に美しい姿を街頭に見る事が出來たと云ふのは、例の千人針である。通りがよりの見知ら

ぬ婦人が老も若きも進んで一針々々と皇軍の必勝を念じつゝ、縫うていく姿は、何と云ふ涙ぐましくも麗しい情景であらう。之こそ眞に舉國一致非常時體制の生んだ美しい婦人のポーズであらねばならぬ。

婦人の美は人形の美であつてはならぬ。潔い精神の輝きをつゝむ肉體の美であらねばならぬ。崇高な婦徳をつゝむ明朗で健康な婦人こそ、現下日本の最も必要とするところである。今回選ばれて軍部に御奉公するの光榮を荷つた娘に對し、筆者の與へた言葉である。

生命保險

此の夏は異常な炎暑が続いた爲か、二人の親しい友人がいづれも腦溢血で急逝した。大朝の岡部記者のやうに、非戦闘員ながら天晴れ敵彈にあたつて死ぬのなら本望だが、働き盛りの者がアツと云ふ間に死んで行くのは惜みても餘りがある。

死は誰にでも必然的に來る嚴然たる事實であるが、それは又、偶然來るものでもある。死んだ友人は共に後顧の憂ひなく、先づ安心

して眠つたと思ふが、それにしても此の人達は生命保險には加入してゐなかつたらしい。

世間には生命保險の組織なり、意義なり、價值なりを充分研究してゐない人が多いやうである。保險智識の未熟な、利己主義の勸誘員のうるさいためでもあるが、優秀な勸誘員になると、保險思想の普及には努めるが、強いて契約を勧めるものではない。著名な會社の一流勸誘員から一度は保險の話を開いておくものである。

今回の事變に際し、生命保險協會は、在支將兵の契約者の爲に、保險料拂込みを六ヶ月間猶豫する事に協定してゐる。之を見ても、保險は悠久なる國家的經濟組織の上に立つ相互扶助機構で文化人の必然利用すべきもの、殊に無産俸給生活者には強制加入せしめて然るべきであらう。

京仁一體説

京畿道産業調査委員會の第一回委員會が、九月十八日道廳會議室で開かれた。委員は京仁に於ける産業經濟界のお歴々で、京仁運河

や仁川の潮力發電や京仁一體説等さすがに卓見續出非常な緊張振りを示した。

實のところ、京仁運河や仁川の潮力發電等の説は、殆ど始政以來の懸案であり、世間では夢物語りと思つてゐる。併しかの朝鮮海峽の海底トンネルは、國防上ぜひ必要とされ、目下工事中の關門海峽のトンネルが成功すれば、たとへ幾億の巨費を投じてでも着工されるものと見られてゐる位で、京仁運河位は愈やるとなればさまで難事ではなからうと思はれる。

續つて京仁一帯の地に、朝鮮のあらゆる經濟文化の力を集中して一大都市を形成する事が、果して有利であるか否かは各方面より見て早急に斷定しがたいとされてゐる。

近代國家の緊要とするのは小數の大都市よりも、むしろ多數の特色を帯びた小都市である。大都市の發達が附近農村の疲弊を語るものである事は、例へば京畿道から京仁地方を除いて、他道と比較して見ると、色々の點で京畿道の遜色を見出すのでわかる。

更に一朝有勢なる空襲を受くる場合に想到

すれば、一區域に國力を傾注して經濟的文化的施設を集中しておく事は、あまりにも智惠のない事のやうでもある。

滿洲國の曆

滿洲國から「庚德五年時憲書」と云ふ赤表裝の冊子が発行された。滿洲國の來年の曆である。

日本では來年の曆は十一月一日に初めて發表される掟で、それ迄は正しい來年の曆は知る方法がない。之が爲出版を急いで、ずい分出たらめな曆が流布され勝ちで、著名な新聞社の年鑑などにも、往々誤りが見出される。

滿洲國が此の九月上旬に、夙くも來年の新曆發表の英斷に出たことは、我が國に於ける著述又は出版に従ふ者の爲にも多大の便宜を寄與するものである。

滿洲國の編曆事務は、筆者の畏友芝野芳太郎君が専ら擔當してゐる。君は現天文台長で元仁川の觀測所技師であつた關口理學博士の仁川時代の門下生で、本府技師を退いてから久しく故郷に歸臥してゐたが、滿洲國の懇請

により、先年最後の御奉公に新京へ赴任した人である。先般筆者への消息に「滿洲國の曆には一秒の百分の一も誤算のないやう毎日齋戒沐浴して數字と戦つてゐる」とあつた。

滿洲國に生きる

あたら特殊の技能を持ちながら、早く社會の第一線から退けられたり、又は極めて薄い待遇に甘んじてゐる人材が甚だ多い。前記芝野芳太郎君もその一人であつたが、元京畿道囑託曹元煥君の如きもその一人と云へやう。

君は筆に口に縦横の才を有し、よく時勢を達觀して朝鮮民衆の指導者として、寶石的存在であつたが、京城にゐてはあまり光らなかつた。時に筆者等と所謂シヨクタク會を開いてウツ勃たる氣魄を發散せしめるに過ぎぬ彼氏であつた。

然るに今や彼は滿洲國に於ける朝鮮人二百万を代表する代議員となり、先日、皇帝陛下に賜謁を賜ひ、又張國務總理の招宴にも列席する等、實に飛躍的出世をしてゐる。

有爲の材を抱きながら、社會的に不遇な人

は吾々の知る範圍に於ても相當ある。日本の底力の強さは茲にあると見るのも一面の理であらうが今次事變の終局に於て、北支の新文化建設の爲に、かうした人材の需要も期待されねばならぬ。

宣化堂は何所へ行く

宣化堂とは昔觀察使の政務をとつた觀察道廳舎の事である。此の建物は各道とも概ね農務課室に充てたもので、京畿道の農務課室にも二、三年前までは、宣化堂の篇額が掲げてあつた。併し、京畿道のこの建物は宣化堂ではなく政本堂で、領議政即ち今の總理大臣の勤務した役所であつた。京畿道の宣化堂は併合前、觀察道所在地水原にあつたもので、水原の前には今の赤十字病院構内にある看護婦寄宿舎がそれであつた事があると云ふ。

かうした古い由緒のある京畿道廳の農務課建物も、來年度には取除けられて、新様式の廳舎が建てられる由である。宣化堂は遂に何所へ行くか。

第二回統計功績者及統計優良邑面表彰

朝鮮統計協會

十月一日朝鮮統計協會の創立記念日の佳節を下して、我が朝鮮統計協會はその記念事業として第二回統計功績者及統計優良邑面の表彰を行つたが、この表彰の光榮を荷うたものは次の六氏及び七面である。

統計功績者

京畿道龍仁郡遠三面書記	尹 英 燮
忠清北道沃川郡安南面長	閔 丙 友
忠清南道扶餘郡恩山面書記	川 口 新 造
全羅南道順天郡順天邑書記	朴 漢 郁
慶尙南道統營郡沙等面書記	李 性 基
平安北道雲山郡委延面書記	崔 在 憲
統計優良邑面	
全羅北道南原郡	雲 峰 面

慶尙北道榮州郡 安定面
 黃海道股票郡 一道面
 平安南道陽德郡 大倫面
 江原道平康郡 木田面
 咸鏡南道利原郡 利原面
 咸鏡北道城津郡 鶴西面

而して右の表彰を受けたる統計功績者及び統計優良邑面の統計事務に關する事績その他を觀るに、其處には、統計に對する強い自覺と周到綿密なる注意と、不撓不屈の絶えざる努力とが如實に感ぜられ、われ／＼統計事務に従事する者として、洵に感激措く能はざるものがある。因つて次に、これ等統計功績者及び統計優良邑面に就いて、其の功績の概要を誌し、會員相互鞭撻の資に供したいと思ふ。

京畿道龍仁郡遠三面

書記尹英燮

大正七月七月龍仁郡水餘面書記を拜命、その後同十二年八月この面の統計主任となり、昭和八年四月同郡遠三面書記に轉任して統計主任を拜命、引續き今日に至つてゐるが、前後を通算すれば滿十四箇年間統計事務に従事してゐる。

現在は統計に關する事項を始めとして、圖書及文書保管、事業經營、會議、土木、勤儉貯蓄、農村振興、他の主管に關せざる事項等を擔任してゐるが、上席書記として、常に獻身的努力を拂ひ、克く同僚と協力して事務の刷新向上を圖り、且つ面民のよき相談役となり、て親切丁寧を旨とし之が指導誘掖に萬全を期し、殊に統計事務に對しては十四年に互る經驗手腕を以て事務を處理し、最近に於ては一年間を通じ提出期日を遅延せることなく不備の爲書類の照覆を受けたことなどは更になく、其の勤務狀況は極めて優秀である。

其の統計事務に關する事績の概要を觀るに、統計報告期限の恪守には特に留意し、完

壁を期して調製したる統計と雖も報告期限を遅延するときは、其の價值が著しく減殺されるので之が嚴守については最善をつくしてゐる。統計例規の加除訂正も適確に行はれ、簿冊も整然として遺憾なきものである。

忠清北道沃川郡安南面

面長 閔丙友

明治三十八年三月漢文私塾に入り大正二年之を修了し、同年二月より大正五年一月に至る三箇年間普通學校六年の課程を自習した。大正十四年五月沃川郡北面書記に採用され、財務事務を擔任し、昭和元年十二月同面會計員となり、昭和七年四月勸業事務を擔任し、同年統計事務を擔任し、九年四月庶務、社會、教化事務と共に統計事務を擔任し、昭和十二年一月沃川郡沃川面書記に轉じ庶務及統計事務を擔任し、十二年六月沃川郡安南面長となつた。統計事務に従事したのは前記の昭和七年四月より十二年六月迄五年五箇月である。

既往面書記在職中統計事務に盡せる功績は少くなかつたのであるが、面長就任後に於ても

よく部下職員を指導し、統計報告が從來免角遅延し勝ちであつたのを、期限内に報告せしめつゝある等統計の改善に實績を擧げつゝあるのである。

即ち茲に其の事績の概要を記せば、報告期限の恪守については、統計報告整理簿を設け毎月各表に互り其月中に於ける提出期限を調査し、各擔任職員に通知すると共に期限内に重ねて期限を告知し、以て期限内提出を勵行したる結果、現在では殆んど遅延するものなきに至つたのである。

各種統計の正鵠を期せんがために、平素職員に對し材料の蒐集につき注意を怠らず、別に規定されるもの以外の統計については屢々職員に研究考案を爲さしめ統計表の完備を圖つてゐる。

統計に關する例規、官報道報等に依り關聯する簿冊の整理を遂げしめ常に製表に錯誤なきを期してゐる。

製表の提出に際しては前月との比較等により檢討を試み製表の内容を一々檢算の上提出しつゝあり、面長就任以來符號返戻を受けたことがない。

尙ほ昭和九年二月には忠清北道より、昭和

十一年二月には沃川郡行政研究会より優良面吏員として表彰せられてゐる。

忠清南道扶餘郡恩山面

書記 川口新造

大正十一年四月恩山面に奉職すると共に統計事務を擔任し、今日に至るまで十五年五箇月間本事務に終始してゐる。庶務、土木、教育、警備、救恤慈善等の事務と共に統計事務を擔當してゐる。

事績の概要を觀るに、統計に關する法規の研鑽に努め常に過誤なきを期して居り、例規簿冊等の整備整頓につとめてゐる。報告期限を嚴守することに留意實行し、資料の蒐集、製表にも周到なる注意を拂ひ、各係吏員間の聯絡を密にし統計の正確と活用につき格段の努力を續けてゐる。

また本人は上席書記としてよく面長を輔佐し、統計事務のみならず他の一般事務についても熱誠これに當り、朝鮮語に通じ面民指導

に親切丁寧で一般の信望が厚いのである。

全羅南道順天郡順天邑

書記 朴漢郁

大正元年十一月面書記を拜命すると共に統計主任を命ぜられ、統計事務に従事せる年數は二十四年間である。

統計事務の外土木、教育、衛生事務を擔任し、克く上司の意圖を體し、恪勤精勵、一意専心奉公の誠を致してゐる。

奉職以來統計事務の整理刷新と統計の正確を期することに専念し、常に統計の研究を怠らず、資料蒐集に關しては、工夫を凝らし、其の正確を期し、又報告期限の勵行につとめるは勿論、統計に關する例規、簿冊類の整理は常に勵行し、殊に大正九年臨時戸口調査に、又前後三回に互る國勢調査に當りては何れも主務者として盡粹し、其の成績實に顯著なるものがあつたのである。

統計事務の向上刷新を圖るべく年二回以上

邑職員の協議打合會を開き、統計資料の蒐集諸表の作製につき常に研究を遂げ、之が質疑應答をなし、調査製表の迅速正確を期してゐる。

大正十五年十月には全羅南道知事より面統計事務功績者表彰規程により表彰されてゐる。また是より先、昭和十年よりは長年勤績し成績顯著なるを以て年功手當月四圓を給せられてゐる。

慶尙南道統營郡沙等面

書記 李性基

大正十五年四月統營公立水産學校を卒業し、昭和二年二月沙等面書記に任命せられ、同五年九月同面統計事務を擔任して以來今日に至る。

現在、土木、社會事業、地方改良、法規例規の整理、教育社會宗教の一般事務と共に統計事務を擔任してゐる。本人は身體強健であつて、良く煩瑣なる事務に堪へ、日常法規の研究につとめ、自己擔任事務の遂行に當りて

は常に一定の計畫を樹立し、敏速且つ正確に處理する。其の他面事務の内外を問はず且く面長を輔佐し職員間の連絡協調をはかり、事務の刷新改善につとめ審與するところが多い。

本人は統計の重要性をよく了解し、常に之が刷新改善に努力した結果、其の成績の見るべきものが多いが、今其の概要を觀するに、統計例規の整理は勿論、統計表又は統計關係書類の編纂整理に不斷の注意をはらひ、常に整然と完備してゐる。

正確なる統計資料を敏速に蒐集するため統計知識を一般に普及して調査に便ならしめ、常に面内出張に際しては手帳を携行し、統計資料たるべき事項は細大漏さず記載し置き、後日の參考に資し、尙資料の蒐集に當りては實地調査を旨とし、關係職員と連絡を保ち、人口統計、畜産統計の小票調査、及び農作物收穫高の坪刈等は一定の計畫をたて調査區域を決定して調査方法に付充分打合をなし、資料調査の完璧を基し、特に昭和十一年末に於

ては水産調査小票、耕地面積調査票を案出して人口調査と共に戸別に調査したる結果産業統計に裨益するところが多く、能率増進上にも大に効果があつた。

資料調査の結果に依り得たる材料は誤調脫漏なきかを綿密に審査し、各里洞別に分類集計したる後更に各里洞間の比較集計は経路又は誤算の有無を檢算する等細心の注意を拂ひ精密に製表してゐる。

報告期限の勵行方に關して特に留意し、統計報告整理簿を備付け、毎月末に前月分の報告済否を點檢すると共に次月分の資料調査及報告期限に付注意し、尙係別に統計一覽表を作成備付けしめ、報告期限に遅延なき様常に注意を促し、自他共に報告期限恪守につとめたる結果、郡内成績一二等を争ふに至つた。其の他統計知識の普及を圖る爲、人口及び産業統計を一般面民に示し、面勢を周知せしめ、尙農事統計は製表後之を印刷して各部落に配付し統計活用に努めてゐるのである。

平安北道雲山郡委延面

書 記 崔 在 憲

大正三年四月以後、憲兵補助員、私立學校教員、平安北道巡查、雲山郡北鎮面書記を経て昭和五年十月委延面書記を拜命し、同時に面統計主任となり今日に至るまで六年十箇月間統計事務に従事してゐる。

現在農村振興、教育、土木、衛生等に關する事務をも擔當し、事務の處理に就いては恪勤精勵、事務簡捷を旨とし、事務の刷新を期しつゝある。

昭和五年十月統計主任に任ぜらるるや、統計事務の重要性を自覺し、統計資料の蒐集其の他單位調査に就いては、綿密精確なる資料を蒐集するやう調査員に周密なる統計知識を授けると共に講習會及び實地調査等に際しては自ら一々指導し、正確なる調査を遂げ統計資料蒐集の完璧を期しつゝある。報告期限の如きも、郡内第一位の成績であつて、統計製表にあつても、又各係に一任することな自ら

克く検討し、異式の有無、脱漏、重複、其の他誤謬なきを期してゐるので附箋返戻されたことなく成績は良好である。

全羅北道南原郡 雲 峰 面

本面は智異山脈中の高原地帯であつて海拔四百六十六米。周圍山をめぐらし中に平坦地を形成してゐる。東に流るる洛東江の上原たる支流は面内を抱流して耕地面積千八百四十八町歩を霑ほし、水利の便よく地味は肥沃とはいへないが農耕に適し、光安線二等道路が東西に走り自動車を通じ交通便利である。

面長、朴重模。統計主任、面書記申南淑。

統計事務に關する本面の事績の概要を誌する、統計資料蒐集、整理、製表等に就ては面職員は毎月提出すべき統計に對し其の月の朔日に資料蒐集に關し打合をなし、用務の如何を問はず部落に出張する場合は調査事項に付實地調査を爲し、或は部落民より聴取りたる事項を夫々擔任者に廻付し、正確なる統計製表に萬全を期しつつある。

統計の報告期限恪守方に就ては統計主任の下に統計報告済否一覽簿を備付け置き毎月二回以上各々の製表擔任者に回覽を爲し、期限の嚴守と共に製表上の注意を喚起せしめ、相當期限前に提出するを以て督促を受けるが如きことは殆んどないのである。

統計に關する例規簿冊等の完備整頓は常に本府官報、道報の統計に關する事項を熟覽し郡より報告別冊に對する改正異動等に就き通牒ある都度之が訂正補正を爲すと共に是等の關係書類は報告例別冊に後綴して書類を完備してゐるので、提出したる諸表にして不備の爲照覆を受けたることは殆んどないのである。

面長以下各職員は統計に理解深く一人も洩れなく朝鮮統計協會に加入し、統計時報を購讀し、統計に關する事務の研鑽を怠らず、之が進展向上に工夫を凝らし、其成績は他面の模範とするに足るものがある。

面職員が部落民の集合の場所に臨むときは統計に關する知識を簡單ながら説明し、其の

趣旨普及にとめてゐる。尙ほ部落民各人に對し直接實地調査に際しては何等の疑惑を生ぜざるやうに理解を求め親切丁寧を旨としてゐる。

慶尙北道榮州郡 安 定 面

本面はもと生峴面、龍山面及び東村面を合併し大正三年行政區劃の變更により安定面となり現在に至つてゐる。榮州郡の西方に位し、東は丹山面の南端及び榮州面、南は長壽面、西は豊基面の南端及び鳳峴面、北は豊基面の東端及び順興面に境してゐる。面の中央には平野開け、南及び北は山岳を繞らし山麓地方は概して肥沃なるも灌溉用水不足し旱害を蒙ることがある。平坦部たる東、西部、及び中央一帯は地味肥沃であり、小白山に源を發する川が平野の中央を貫き流れてゐる。

面長、安瑤鎬。統計主務者、面書記安承厚。

面長以下、各職員和衷協力し、殊に統計資料蒐集方に關しては常に其の實地調査に重點を置き、必ず豫め其の研究方法を研究勘案し

蒐集の完備に全力を注ぎつゝあるを以て其の内容も正確であつて未だ返戻照會等を受けたることなく其の報告は極めて良好である。

尙報告期限の勵行方につき統計報告済否一覽簿、統計黑板等を利用して督勵は勿論、各職員自覺して期限恪守につとめてゐるので報告期を遷延したることがない。其の他統計例規或は統計書類の整理は不斷の努力により常に整然として利用檢出に甚だ便利である。

黃海道殷栗郡 一道 面

本面は東は長連面、西は北部面、東南は信川郡用珍面、西南は殷栗面、北は二道面に接し、面内一體に山野多く耕地面積は其の二割二分、即ち一千五十六町歩である。本面はもと二道坊と稱してゐたが併合當時一道面と改稱せられたのである。

面長は金元燮。統計主務者、面書記金載植。統計資料の蒐集に就いては、面職員よく協調連絡し、單位調査の徹底且つ正確を期するは勿論、統計報告済否一覽簿を備付け、統計

主務者に於て其の整理を嚴密にし面長亦之が査閲を嚴にし以て報告期間の嚴守につとめた結果期限内に遅れる如きことは殆んどない。統計に關する例規簿冊等の整理は常に細心の注意を拂ひ以て努めて統計事務の刷新向上に努めつゝあり、實に他面の模範とするものがある。

面長金元燮は大正八年以來實に十九年職務に勉勵し、面民より信頼且つ敬慕されること厚く、尙部下職員を統率するに寛嚴宜しきを制し、以て一般面事務の刷新向上に寄與せる功績が顯著なるものあり、既往に於て次の通り表彰を受けたことがある。即ち昭和六年二月には道より面長精勵により、昭和十年には平壤稅務監督局より納稅功勞者として、同年十月には總督府より多年職務に精勵、優良面長として銀杯一個を表彰せられてゐるのである。

平安南道陽德郡 大倫 面

本面は郡の東端に位し東西三里二十四町、

南北四里三十一町、東は咸南德源、文川の二郡に接し、西は東陽面、黃海道谷山郡下圖面南は谷山郡伊寧面に界し、北は東陽面、咸南高原郡山谷面に隣してゐる。面積は十一方里八三二であつて地勢は概ね山岳に富み耕地僅に全面積の約一割に達せざる狀況であつて南部に霧織山、北部に頭流山があり、河流其の間を縫ひ、大同江上流となる。戸數八百六十一戸、人口四千九百五十一人。面内の主要産業は農業の外畜産、養蠶であつて、殊に農産物の大宗たる大豆、小麥、粟は品質優良であり特産物として年産三萬餘圓の煙草がある。

面長、朴陽臣。統計主務者、面書記朴榮百。統計事務は他の一般事務に比し動もすれば等閑に附し易き傾あるも面に於て作成せられたる統計は全鮮の行政經濟上の方針を決定する基礎資料となるものであるから、本面は夙に茲に鑑みるところあり、職員一致協力して事務の改善進歩を策したる結果、其の成績顯著である。其の概要を觀るに、統計資料の蒐集、整理製表に就いては、凡そ統計の數字の

正確を期するが爲めには最も正確なる基礎に
よらねばならないから、一般の通弊たる机上
達觀の如きは絶對に之をさげ實地に付單位調
査を爲し、之が實地調査の徹底を期すべく目
的區域等を斟酌し、職員をして適宜分擔せし
め、關係係員と連絡を密にし、以て調査の正
確と迅速とを企圖すると共に統計の目的を稽
へて資料の蒐集に格段の注意を拂ひ、目的物
の意義及び限界を明にして實際の調査に際し
遺漏なきやう細心の注意を加へてゐる。

蒐集せる資料の整理にあつては分類集計
の醜態遺算なきを期し、調査事項の内容を明
白に整理してゐる。

統計表作製の際には實査資料を基礎として
精確を期し、統計表の要求する意味を體得
し、様式を嚴密に研究し、殊に様式の注意事
項を精讀して完全なる製表を期し、尙其の出
所を明にすると共に統計材料を保存し、以て
後日の參考に資し得るやう措置してゐる。

次に統計に關する例規は別冊として編纂
し之が整理を充分になし、其他統計に關する
簿冊は別冊として整理し以て統計事務の正確

及び圓滑を圖つてゐる。

統計報告期限を恪守せんがため統計主務者
に於て統計報告處理簿を備付け、報告期限を
失せざるやう各係員を督勵せしめたる結果、
之が提出成績著しくあがり、既往五箇年間に
於て郡より督促を受けたる件數を調査するに
昭和七年六件、同八年四件、同九年四件、同
十年二件、同十一年二件といふ好成绩となつ
てゐる。

職員一致協力の努力は獨り統務事務のみに
限らず面治の全面に顯現するに至り、即ち内
外事務の改善のあと顯著なるものあり、殊に
徵稅事務は熱誠なる指導督勵により全郡第一
位の成績を擧げ勸業事務も亦徹底せる獎勵に
より相當の成績をあぐるに至つた。昭和七年
農村振興運動起るや、銳意當局の趣旨を體
し、矯風、教化、生活改善、産業開發に總努
力を加へ大に見るべきものがある。

江原道平康郡 木田面

平康郡の西隅に位し東は縣内面、西は伊川

郡龍浦面、南は西面、北は檢津面に隣接す
る。面積八方里、面内山岳峻險であつて交通
甚だ不便であるが風景に富むところが多い。

面長、權靈遠。統計主務者、面書記金光淳
本面は現面長の書記勤務時代より統計事務
の刷新向上、期限嚴守、計數適確、資料充實
に付特段の努力と細心の注意を以て事務に熱
心し、先づ統計に關する例規整理、蒐集資料
編纂、資料蒐集手簿備付(出張時に必ず携行
し資料を調査記入するもの)等統計事務の刷
新改善を爲しつゝあつた。大正十二年五月十
四日附官通牒第四十一號に依る統計報告濟否
一覽簿を作成、備付けることになつたから之
を勵行すると共に、統計事務研究會を組織
し、面職員全員に互り調査研究及び資料蒐集
上の聯絡協調をなし、面内各區内に統計調査
員を設置し特に重要な人口調査の正確を期
する爲、又は資料蒐集の徹底を期するための
各統計調査員の訓練、統計の意義、統計の必
要、統計材料の蒐集等に付座談會、講話會の
開催をなし専心統計事務の刷新向上を圖つた
結果大正十三年十月には面統計功績者表彰規

程に依り道知事より表彰せられたことがあ
る。爾來常に統計思想普及、統計報告濟否一
層準備付勵行、統計資料蒐集充實、計數適確
統計に關する例規の整備、統計原簿整理保存
を爲しつゝあるのである。

統計の使命に副ふ要件の一は前記の資料充
實にあるものと信ずるのであるが、現在の面
職員の數を以てしては到底萬全を期し難きと
ころがあるので、面内行政區域八區に就いて
其の區内に於ける最も有爲の中堅人物を選び
統計調査員を依囑して年二回以上の打合せを
爲し、又必要に應じては其の都度之れを開い
て部落の事情を正確に把握することに努めて
ゐる。現在調査員の數は八人である。

各調査員、區長、其他有識階級は勿論、一
般民衆に於ても統計思想の普及徹底は絶對に
必要である。統計が一般家庭の各種のものを
調査する關係上、面民に統計の理解なきとき
は何としても正確なる事實が得られないか
ら、統計本來の趣旨を徹底せしむるがため
に、先づ部落振興會を利用し、時々統計に關
する講話を爲し、面勢一斑其他重要統計を

印刷して各部落に配付し、統計により本面の
實情を知らしめ、主要農作物、人口分布等の
統計圖表を製し、事務所内に掲示して一般
面民に知らしめてゐる。人口調査に就いては
昭和七年度以降人口調査員を依囑して人口統
計の正確を期してゐるが、現在調査員は二十
二人である。

咸鏡南道利原郡 利 原 面

利原郡の西北部を占め、南は南面と相對し
南大川を隔て、地味肥沃なる平野を擁し、西
は嶽嶺山脈を以て北青郡と隣し、東南は僅か
ながらも日本海と接觸して東面に連り、面積
十二方里、人口九千八百九十九人。耕地面積
は三千二百四十九町で、水稻年産六千七百四
十一石、粟一萬一千二百二十六石、大豆五千
六十三石、馬鈴薯七百八萬貫であり、養蠶も
行はれてゐる。

面長、申臺職。統計主任、面書記金泰國。
事績の概要を觀るに、單位調査に關しては
各里に統計調査員を設置し、人口小票調査の

外農産、畜産物等主要生産統計の資料は毎年
嚴密なる單位調査を行ひ計數の正確を期しつ
ゝある。

後に述べるが如く調査員が設置されてゐる
が、調査員を調査時期に先ち面事務所に招集
の上調査方法其他調査に必要なる事項の打合
を爲し以て調査の完璧を期しつゝある。

統計の整備及び報告期限の勵行に關して
は面長以下面職員は統計の重要性及び之が使
命をよく理解し、製表に當りては周到なる準
備と綿密なる注意を拂ひ内容の整備を圖り且
つ全職員協力の下に報告期限の勵行につとめ
統計に關する成績は郡内首位を占めて他面に
範を示し、各面も之に追隨し従つて郡の成績
も向上の一途を辿り數年前迄成績良好ならざ
りし同郡は昭和十、十一兩年度に於ては道内
二府十六郡中第二位の好成績を示すに至つた
のである。

統計の利用に就いては統計圖表を作成し、
面事務所に掲示して來客及び職員の便覽に供
し、且毎年主要なる統計を印刷して各方面に
配付し、以て統計思想の涵養統計智識の普及

に努めてゐる。

統計調査員は全部で二十七人あり、行政區劃たる里を單位として一調査區としてゐるが面積廣大にして調査事項の複雑なる里は數區に分割して設定してゐる。調査員は主として區長であるが、克く統計の重要性を理解し、單位調査に際しては誠心誠意調査の周密徹底を期しつゝある。無報酬であるが、調査事務打合せの際には面に於て晝食を給してゐる。

咸鏡北道咸津郡 鶴 西 面

本面は北は咸南端川郡北斗日面に境し、南は鶴中面、西は鶴上面に接し、東は吉州郡徳山面に境してゐる。四方に山岳重疊し中央に稍々平野があり平地は概して肥沃であるが山間地帯であり、總耕地面積の約四割を占める火田は土地肥瘠である。寒暑の差甚だしく雨雪多く冷害は相當に大である。

面長、李龍哲。統計主務者、面書記韓球東。資料の蒐集に就いては單位調査の正確、資料蒐集の迅速を期してゐる。即ち人口統計に

あつては統計調査小票規程の定むる所に従ひ統計小票を備へ、各擔任調査員を指定して實地に就き正確に單位調査をなし、其の他の統計にあつても實地調査の勵行につとめ帳簿臺帳によるべきものは夫々關係簿冊の整理を正確にして資料を蒐集してゐる。

かくして、調査蒐集したる資料は検査を嚴にし、且彼此關係ある統計資料は何れも對照をなし、連絡統一を爲し以て内容の正確を期してゐる。

統計表の作成に就いては報告例の様式及び注意書を熟讀し報告様式單位又は調査現在時の表示等に留意して製表し、而も製表後は統計主務者、面長の検査を嚴にしてゐるので形式内容共に杜撰の點がないのである。

報告期限の恪守に就いては、先づ統計報告濟否一覽簿を作成備付け、統計主務者に於て其の整理を嚴にし、各係員に報告期限の催告及び督促を怠らず、而も面長に於て常に報告濟否の査閲をなし、以て報告の迅速を期してゐる。また毎月翌月分の報告事項其他を各職員の見易き場合に掲記し、相當期限内に資料

の調査蒐集に着手せしめ、常に報告期限に留意してゐる。右の如くして報告期限恪守に努力し來つた結果、殆んど統計事項にして督促を受けたることがないのである。

報告例別冊、統計例規は改廢の都度時を移さず加除整理をなし、報告上些少の過誤なきを期してゐる。

統計調査員に就きて述ぶるに、人口統計に就いては統計小票規程の定むるところにより其の都度調査員を指定して各擔當區に於て單位調査を實施してゐる。調査員には主として面職員區長をして之に當らしめて居り、實地調査は勿論、異動調査に到るまで専ら調査の正確を期し、各戸を巡回して實地に調査してゐる。調査員は無給である。

一般統計に就いては別に統計調査員を設けず、面職員其の擔任事務の如何を問はず良く連絡を保ち、部落出張の際には常に各種統計資料の調査蒐集を爲し、又は各洞區長をして其の洞内に於ける資料の調査報告をなさしめ、右に依つて製表するやうにしてゐる。

昭和十一年末

耕地面積

【總督官房文書課調査】

昭和十一年末現在に於ける總耕地面積（火田を除く）は四、五〇三、八五四町で、此の内番は一、七一八、四八六町三段、田は二、七八五、三六七町七段である。

番田別の比較を道別に觀ると、田に比し畚の比較的多い道は京畿、忠南、全北、慶南の四箇道、畚田略等しき道は忠北、全南、慶北の三箇道、其の他の各道は田に比し畚が少く、就中咸北の如きは田九一・三%に對し畚は八・七%に過ぎない。

尙前掲畚面積中昭和十一年中に二毛作を爲したる面積は四五二、三三〇町八段（二六・三%）で一毛作の面積は一、二六六、一五五町五段（七三・七%）となる。之を道別に觀ると、二毛作を爲したるものでは慶南の五八・四%が最高で全南の五三・一%、慶北の四九・

七%、全北の四〇・五%が之に亞いで多い。耕地面積を道別に觀ると、黄海の五五九、〇九三町七段（二二・四%）が最多で全南、平北、咸南の四〇萬町臺が之に亞ぎ、三〇萬町臺は京畿、慶北、平南、江原の各道、二〇萬町臺は忠南、全北、慶南、咸北の各道で、忠北の一五八、六九一町が最も少い。全鮮總面積に對する耕地面積の割合は二割二厘であるが、道の總面積に對する耕地面積の割合は黄海の三割三分一厘が最も高率を示

耕地面積表

道名	畚		計	田	合計	火田面積
	一毛作	二毛作				
京畿	二〇五、四六六町	四、七三三町	二〇九、七九九町	一八二、四九三町	三九一、五八九町	一、〇〇五町
忠北	五、五六一	一九、八六八	七三、四七七	八六、二二三	一五八、六二〇	二、四七六
忠南	一三、三〇四	三三、五七七	一六五、八九一	八三、二二三	二四九、八〇四	七七・六
全北	一〇三、七〇三	七〇、六一五	一七四、三九六	六八、〇三三	二四二、四〇〇	九五・五
全南	一〇一、八三二	二四、四三七	二二五、七八〇	二四、七五五	四〇〇、五三六	四四・四
慶北	九八、九二六	九七、八三三	一九六、八四七	一八三、〇五七	三七九、八三四	四、一五〇
慶南	七五、七四一	二〇五、四九三	一八〇、六六六	九六、九三三	二七九、六三九	—
黄海	一四四、四九三	一、三五四	一四五、八四七	四二三、三四九	五五九、〇三三	三〇、五七〇
平南	八六、〇〇二	二四三〇	八六、三四五	三三三、六七六	三九九、八三〇	六七、五四五
平北	九五、七三五	八〇〇	九五、八三五	三二七、七四二	四二二、五五七	一三三、三七〇
江原	八七、八五五	二、六九五	九〇、五五二	二五四、五三〇	三四五、〇六一	七六、一七九

し、之に亞くは全南の三割七厘、京畿の三割四厘、忠南の三割五厘、全北の二割八分二厘等である。

耕地面積を自作、小作別に觀ると、自作地は一、九一八、六九六町一段（四一・六%）、小作地は二、五八五、一五七町九段（五七・四%）で江原、咸南、咸北の三箇道のみは小作地に比し自作地が多いが、其の他の各道は何れも自作地より小作地が多いのである。

成南	六三、九六・二	七五四・五	六四、六〇・七	三六六、三七五・五	四三、〇四六・二	一五、一八三・二
成北	一九、六四六・七	—	一九、六四六・七	二〇五、〇四三・九	三四、九〇・六	一六、八八四・七
總計	一、二六六、一五五・五	四五三、三〇・八	一、七二八、四六・三	二、七八五、三六七・七	四〇五、〇八四・〇	四三七、七〇・四
前年に比し増(△減)	△一、六四九・六	一六、八五六・八	一五、二〇七・二	△一、五三三・八	三、六三三・四	一九、九五八・二

自作小作別耕地面積表

道名	番		田		合 計	
	自作	小作	自作	小作	自作	小作
京畿	五三、六五三・五 _町	一五六、〇六六・四 _町	五七、一六・六 _町	一二五、二七四・四 _町	一〇〇、八五一・一 _町	二八、三四八・八 _町
忠北	二三、六〇八・八	四八、八八・九	二九、九三・二	五六、三七・一	五三、五三五・〇	一〇五、一五六・〇
忠南	三九、〇五九・三	二六、八三・八	二八、七八二・四	五四、四九九・九	六七、八四・七	一八一、三三・七
全北	三三、六三・七	一四〇、七八二・五	二〇、二四・〇	四七、八四二・八	五三、八五四・七	一八八、六五・三
全南	六九、五九〇・九	一四六、一八九・八	二九、五三・〇	八五、三四四・四	一九九、一一九・九	三三、四四二・二
慶北	八二、三八五・五	一四、五九・二	八六、三四六・〇	九六、八二・七	一六八、五三・五	二一、三三・九
慶南	五九、〇四・一	一一、一六・〇	四、六六・六	五五、二九四・二	一〇、一六七・七	一七六、四五・二
黃海	四一、〇三四・〇	一〇四、八三六	一五三、八九二・九	二五九、三五三・二	一九四、九六六・九	三六四、一六・八
平南	三一、三八五・三	五四、八六一・一	一四三、六三三・〇	一六九、九七七・六	一七五、〇〇・三	三三四、八三・七
平北	二九、三七九	六六、〇三六	一一〇、八六七・六	一九六、八五六・六	一五〇、五九五・五	二六二、九〇・二
江原	三九、二三四	五、四三・六	一四、四三・五	一一三、〇九三・六	一八〇、五五八・九	一六四、五三・二
咸南	三三、七二・四	三一、八九八・三	二五九、〇八・三	一〇七、二九四・二	二九一、八三三・七	一三九、一九・五
咸北	一一、六四・八	七、〇四・九	一五八、二六・四	四六、七七五・五	一七〇、八七三・二	五三、八七・四
總計	五四七、九二六・一	一、七〇、五三三・七	一、七七〇、七三・五	一、四一四、六四二・二	一、九八、六六六・一	二、五八五、一五・九
前年に比し増(△減)	四三三・二	一四七、九三三・九	△一、一五四・四	一六七・七	△一、二一七・二	一四、八〇・六

昭和十一年

米生産價額

【農林局調査】

昭和十一年に於ける米生産價額を調査するに、收穫高は水稻一千九百十七萬四千二百八十六石、陸稻二十三萬六千四百七十七石、合計一千九百四十一萬七百六十三石で、其の生産價額は水稻五億三千四百三十九萬四千三百五圓、陸稻六百四十一萬六千六百四十三圓、合計五億四千四十五萬九百四十八圓である。之を前年に比するに收穫高に於ては水稻百五十六萬二千四百八十八石(八分九厘)増加してゐるが、陸稻は三萬六千三百二十四石(一割三分三厘)減少し、合計百五十二萬六千九百四十四石の増加である。價額に於ては水稻は五千五百五十萬四千七百八十一圓(一割七厘)の著しき増加を示し、陸稻は價額騰貴せるも收穫高減少せるにより二十六萬六千二百七十五圓(四分)減じ、合計五千二百二十三萬八千五百六圓(一割五厘)増加してゐる。

水 稻 收 穫 高 價 額
 昭和七年 一六〇、八二一、三九三、三〇四、五〇〇、四〇一、
 昭和八年 一七、九四三、三七七、三三九、七七一、
 昭和九年 一六、四七一、一〇四、四一〇、一四四、五六一、
 昭和十年 一七、六二一、八六六、四八二、八八九、五〇四、
 昭和十一年 一八、一七四、二六六、五三四、三三四、〇五五、
 之を道別に観るに水稻に於ては慶尙北道の二百四十萬八千四百四十一石、六千五百九十九萬二千七百八十一圓最も多く、全羅南道の二百三十一萬八千九百九石、六千五百七十二萬一千六十六圓之に亞ぎ、忠清南道の二百十八萬五千七百七十石、六千二百四十八萬二千五百五十三圓、慶尙南道の二百萬六千三十一石五千五百九十九萬五千六百六十六圓等の順序となつてゐる。陸稻に於ては平安南道の六萬七千三十五石、百七十八萬二千二十三圓最も多く、黃海道の三萬九千九百三十五石、九十四萬七千七百七十八圓之に亞ぎ、全羅南道の三萬三千四百六十八石、八十九萬一千二百八十圓、京畿道の二萬五千五百一十一石、六十六萬七千二百七十二圓等の順序であり、合計に

道	水 稻		陸 稻		合 計	
	收 穫 高	價 額	收 穫 高	價 額	收 穫 高	價 額
京畿	一、九八一、三元	五三、八七七、七六	二五、五一	六、七二、七三	二、〇〇六、七四〇	五九、四八五、〇五八
忠清北	一、七七一、六三三	二二、七六、四四五	六、三三八	一、七三、〇三三	一、七三、〇三三	七三、〇三三
忠清南	二、一八五、一七〇	六二、四八三、五三三	一三、六九六	一、七〇、〇三三	二、一八五、一七〇	六二、四八三、五三三
全北	一、七四一、五二二	四八、七三四、五〇〇	一三、〇八八	三、四〇、九三三	一、七四一、五二二	四八、七三四、五〇〇
全南	二、三三八、九〇九	六五、七二二、〇六六	三三、四六八	八、九一、二六〇	二、三三八、九〇九	六五、七二二、〇六六
慶尙北	二、四〇〇、四四四	六五、九五二、七一一	五、七九八	一、〇一八、〇三三	二、四〇〇、四四四	六五、九五二、七一一
慶尙南	二、〇〇〇、〇三三	五五、九九五、六六六	一一、〇三三	二、六六八、九〇九	二、〇〇〇、〇三三	五五、九九五、六六六
黃海道	一、五〇四、九九	四〇、九六六、七七七	三九、九三三	九、四七、七七七	一、五〇四、九九	四〇、九六六、七七七
平南	八、六九一、四八八	二四、三二七、三三三	九、〇三三	二、六六八、九〇九	八、六九一、四八八	二四、三二七、三三三
平北	一、五八八、〇三三	四二、一一〇、七五九	六、七〇三	一、七三、〇三三	一、五八八、〇三三	四二、一一〇、七五九
江原	九三三、四一	二六、四三三、八九三	二、六八三	六、七〇、〇三三	九三三、四一	二六、四三三、八九三
咸南	七〇〇、九〇	一九、九五四、〇八	七、一五八	一〇一、一〇一	七〇〇、九〇	一九、九五四、〇八
咸北	三〇〇、八二二	六、二七三、三九九	四	九三	三〇〇、八二二	六、二七三、三九九
總計	一九、一七四、二六六、五五〇、三九四、〇五五	三三六、四七七	六、〇五六、六四三	一九、四〇〇、七三三、五四〇、九四八		

於ては收穫高は慶尙北道の二百四十一萬四千二百三十九圓最も多く、全羅南道の二百三十

五萬二千三百七十七石之に亞ぎ、忠清南道の二百十九萬八千八百六十六石、慶尙南道の二百一萬八千五百二十二石、京畿道の二百萬六千七百四十石等の順序となつて居り、價額に於ては全羅南道の六千六百六十一萬二千三百四十六圓最も多く慶尙北道の六千六百九萬一千九百八圓之に亞ぎ、忠清南道の六千二百八十三萬八千五百八十八圓、慶尙南道の五千六百二十六萬二千五百五十六圓、京畿道の五千四百四十八萬五千五十八圓等の順序である。

昭和十二年

米第一回豫想收穫高

【農林局調査】

本年の稲作は用水潤澤にして天候適順なりし爲一般に順調なる生育を遂げ、八月十五日現在に於て概して良好なる状況にあつたが其の後も天候順調なりし爲出穂結實共に佳良にして旱水害、病蟲害等の被害も亦尠かりし結果大豊作を豫想せられる。

今調査の成績を見るに作付反別に於ては水稻百六十萬五千八百四十一町九反歩、陸稻三萬四千三百十三町九反歩、合計百六十四萬五千五百五十八反歩にして、前年に比し水稻三萬七千六百七十四町一反歩(二分四厘)の増、陸稻一千四百四十七町一反歩(三分五厘)の増、合計三萬八千八百二十一町二反歩(二分四厘)の増加を示し、收穫高に於ては水稻二千四百四十二萬七千二百三石、陸稻三十二萬四千八百三十九石、合計二千四百七十五萬二千四十二石にして前年實收高に比し水稻五百二十五萬二千九百七十七石(二割七分四厘)の増、陸稻八萬八千三百六十二石(三割七分四厘)の増、合

計五百三十四萬一千二百七十九石(二割七分五厘)の増加を豫想せられる。

尙參考の爲本年の豫想高を大豊作であつた昭和五年の實收高二千四百十三萬三千二百二十八石(舊調査の數字一千九百十八萬六百七十

七石に其の二割五分八厘二毛を加算せるものと比較すれば六十一萬八千九百四十四石(二分五厘)の増加となる。

次に米作付反別及收穫高累年對照表並地方別前年比較表を示せば左の如くである。

米作付反別及豫想收穫高累年對照表 (△減)

年次	作付反別			計	收穫高		
	水稻	陸稻	計		水稻	陸稻	計
昭和七年	一、六〇五、八〇〇・一町	三、七〇、六八八町	一、六四三、四八九〇町	一、六、〇〇一、二二五石	二、六四、五六六石	一、六、三四五、八五五石	
昭和八年	一、六五九、四三二・一町	三、八〇、五二八町	一、六九七、四三九〇町	一、七、九五四、二五七石	二、五八、四四三石	一、八、一九二、七〇〇石	
昭和九年	一、六七四、三五四・一町	三、七、五五七・一町	一、七二一、九九九・一町	一、六、四七、一〇四石	二、四六、一三四石	一、八、一七七、三三〇石	
昭和十年	一、六六八、二九八・一町	三、六、四九二・四町	一、六九四、五三九・三町	一、七、六二、八六八石	二、七二、一八〇石	一、七、八八四、六八九石	
昭和十一年	一、六〇五、八四二・九町	三、四、三三九町	一、六四〇、一八五・八町	一、九、一七四、三六六石	二、三六、四七七石	一、九、四四〇、七六三石	
昭和十二年豫想	三、七、六七四・一町	一、一、四七・一町	三、八、八三二・二町	五、一五三、九二七石	八、八、三三二石	五、三四一、七九七石	
昭和十一年實收	〇・二、二四町	〇・〇、五五町	〇・二、四四町	二、七、七四石	三、七、四四石	二、七、七五石	

備考 一 昭和十一年以降の作付反別は畦畔面積を除き實際作付せる面積とす
二 昭和十一年以降の收穫高は新調査方法によるものとす

米作付反別及豫想收穫高前年比較表

(其の一豫想收穫高、石)

年次	水稻	陸稻	計
昭和十二年豫想	二、九七、五三三石	一、四〇、〇八一石	四、三七、五四四石
昭和十一年實收	二、〇〇、七九〇石	七、二二、〇一一石	二、九二、〇一〇石
比較増減(△減)	九七、七四三石	六七、八三二石	一、六五、五七五石

忠清南道 二、六四三、八七一
 全羅北道 二、五九一、九六六
 全羅南道 二、六二二、六六八
 慶尙北道 二、七〇〇、五七〇
 慶尙南道 二、六〇五、〇二七
 黃海道 二、一九一、五七三
 平安南道 一、四五五、五七八
 平安北道 一、五六六、六六九
 咸鏡南道 一、九五五、九七九
 咸鏡北道 一、九五五、六〇〇
 合計 二四、七五二、〇四一

同

前 (其の二作付反別、町)

忠清南道 二、一九八、八六六
 全羅北道 一、七三六、一〇〇
 全羅南道 二、三三二、三七七
 慶尙北道 二、四一四、二三元
 慶尙南道 二、〇一八、〇五二
 黃海道 一、五七四、一三四
 平安南道 九三六、七三三
 平安北道 一、五二七、〇〇四
 咸鏡南道 九三四、九二四
 咸鏡北道 七〇七、三四八
 合計 一九、四一〇、七六三

四四四、〇〇五
 八五五、八八六
 二〇〇、二九一
 三七六、三三一
 五八六、九六五
 六二七、四三九
 五二一、七九五
 三九一、六六五
 二六八、五五五
 一八八、八二二
 一四一、七三九
 五、三四四、一七九

京畿北道 一、九七〇、六四八
 忠清北道 六七、九九七、六
 忠清南道 一〇、四八五、一
 全羅北道 一七〇、六二八
 全羅南道 一、九八、八二七
 慶尙北道 一八、三四三、三
 慶尙南道 一〇七、三三三、一
 黃海道 一四四、〇一、五
 平安南道 一八、七六八
 平安北道 九五、六五九
 咸鏡南道 八三、八七二
 咸鏡北道 六三、一〇六、七
 合計 一、六四一、五五八

昭和十二年

昭和十一年

比較増減(△減)

京畿北道 一八五、九四・三
 忠清北道 六八、二四・二
 忠清南道 一六〇、〇〇六・七
 全羅北道 一四〇、〇三三・六
 全羅南道 二〇一、二二二・八
 慶尙北道 一八六、八九九・五
 慶尙南道 一七三、四一六・〇
 黃海道 一三三、二六・〇
 平安南道 七八、三九七
 平安北道 九三、九二・〇
 咸鏡南道 八三、五九七・五
 咸鏡北道 五九、七四・六
 合計 一、六〇一、三四・六

二、一〇六・六
 △二六・六
 △二六・六
 四七・四
 五九・三
 △二、〇〇・一
 △四、五六・二
 △一、五八三・九
 一八、八〇・五
 一〇、三七・一
 一、二四・九
 一、二七・七
 三、五〇・一
 一七五・五
 三、八三・三

昭和十一年

雜穀生産價額

【農林局調査】

昭和十一年に於ける雜穀の生産價額を調査するに、收穫高は粟五百六萬五千九十六石、稗四十九萬四千四百七十六石、黍七萬四千八十四石、蜀黍五十六萬四千五百石、玉蜀黍八十五萬四千八百三十六石、燕麥五十一萬四千九百四十六石、蕎麥五十四萬八千二百十石、合計八百十一萬五千七百五十三石であつて、其の價額は粟六千九百九十六萬八千九百九十六圓、稗四百二十六萬八千五百八圓、黍九十三萬七千六百圓、蜀黍六百二十九萬二百五十一圓、玉蜀黍八百六十六萬五千五百九十六圓、燕麥三百三十一萬百六十四圓、蕎麥五百六十三萬三千三百四十二圓、合計九千九百六萬五千八百六十三圓である。

之を前年に比すれば收穫高に於ては蕎麥七萬八千五百二十四石(一割二分五厘)減少の外粟二十一萬四千三百四十九石(四分二厘)、稗三萬五千二百二十八石(七分六厘)、黍二千七百七石(三分八厘)、蜀黍六千七百九十三石(一分二厘)玉蜀黍十三萬九千五百五十六石(一割九分

五厘)燕麥九萬六千四百二十六石(二割三分)を増加し、合計四十萬六千四百二十五石(五分三厘)増加した。價額に於ては蕎麥五十一萬一千六百五圓(八分三厘)減少せる外、粟三百九十八萬五千二百二十六圓(六分九厘)、稗六十二萬二千九百九十四圓(一割七分一厘)、黍七萬三千五百八十七圓(八分五厘)、蜀黍七千二百五十九圓(一厘)、玉蜀黍百二十九萬三千二百七十一圓(一割七分五厘)、燕麥七十一萬八千七百十九圓(二割七分七厘)増加し、合計六百十八萬九千四百五十一圓(七分三厘)の増加である。

最近五箇年間の比較を觀ると次の如くである。

	收穫高	價額
昭和七年	九、〇〇七、五〇八石	六、四三六、三八八圓
昭和八年	八、〇七六、四八三	五、五五九、三三〇
昭和九年	六、一八八、四九七	六、五八八、三三八
昭和十年	七、七〇九、三三八	八、四八六、四二二
昭和十一年	八、一一五、七五三	九、一〇〇、五八三
前年に比し増	四、六、四三五	六、一、九、四五一
同上歩合	〇、〇七三	〇、〇七三

更に本年分を道別に觀ると、收穫高に於ては平安北道の百六十三萬一千百三十四石最も

多く、平安南道の百五十二萬七千六百六十三石之に距ぎ、咸鏡南道の百四十一萬五千八百十三石、黃海道の百四十萬一千三百五十七石等の順序であるが、價額に於ては平安南道の一千七百四十七萬八千四百八十三圓最も多く平安北道の一千七百四十萬四千六百九十六圓之に距ぎ、黃海道の一、千五百四十一萬二千八百六十五圓、咸鏡南道の一千四百六十二萬一千九百八十九圓等の順序となつて居る。

	收穫高	價額
京畿	三、七、二、四六石	三、五四九、三三二圓
忠北	二、四、〇、〇三	一、五〇八、七七七
忠南	四、〇、五三	六、五八、八元
全北	八、〇、〇二	六、八、九七五
全南	三、五、五〇	三、一〇〇、四八
慶北	三、四、八、一一	三、〇三三、三九
慶南	一、九、一、七	二、三、五〇、〇〇
黃海	一、四、〇、三、七	一、五、四二、八六五
平南	一、五、七、六三	一、七、四七、八四三
平北	一、六、三、三、四	一、七、四〇、六六
江原	五、七、六、四	五、四三、五五
咸南	一、四、五、八三	一、四、六三、九九
咸北	六、四、四三	八、〇、四、五九六
計	八、一、五、七、三三	九、一、〇、六、五、八三

昭和十一年

大豆生産價額

【農林局調査】

昭和十一年に於ける豆類の生産價額を調査するに、收穫高は大豆三百七十八萬四千二百十五石、小豆七十五萬九千九十二石、綠豆十五萬五千三百八十九石、落花生五萬二千三百二十二石、菜豆二萬五千五百十八石、豌豆二萬四千三百三十八石、其の他の豆類一萬八千二百四十二石、合計四百七十六萬八千九百十六石であつて其の價額は大豆六千二百八十七萬三千二百八十圓、小豆千五百萬九百七十七圓、綠豆二百二十一萬六千七百二十四圓、落花生四十一萬一千七百三十五圓、菜豆三十八萬五百二十二圓、豌豆三十六萬九千五百七十九圓、其の他の豆類二十三萬六千三百三十二圓、合計八百四十八萬八千九百三十九圓である。之を前年に比すれば收穫高に於ては菜豆千二百九十石(五分三厘)の増加を除き、大豆五十九萬一千六十三石(一割三分五厘)、小豆十七萬五千三十七石(一割八分七厘)、綠豆二萬八千三百八十一石(二割一分二厘)、落花生七千六百二十二石(一割二分七厘)、豌豆二千五百五十八石

(八分二厘)、其の他の豆類四千八百九十八石(二割一分二厘)を夫々減少し、合計八十萬七千八百四十九石(一割四分五厘)減少してゐる。價額に於ては減收並に價額低下により落花生七萬一千四百十二圓(一割四分八厘)、價格騰貴せるも著しき減收により綠豆六萬七千九十六圓(二分九厘)を減少せる外減收なるも價格昂騰せる爲大豆二百六十三萬四千七十二圓(四分四厘)、小豆六十八萬九千四百十三圓(四分八厘)、豌豆四萬一千九百六十一圓(一割二分八厘)、其の他の豆類一萬三千七百十七圓(五分五厘)を増加し、増收並に價格騰貴により菜豆七萬六百十三圓(二割一分八厘)を増加して合計四百二十八萬三千五百六十四圓(五分五厘)の増加を示してゐる。
最近五箇年間の豆類收穫高と價額とを見る
と次の如くである。

年	收穫高 石	價 額
昭和七年	五,五二五,〇三五	五九,五五五,六一八
昭和八年	五,七〇七,一三四	五八,〇〇七,四四九
昭和九年	四,九二九,八三三	五九,三三五,八二二
昭和十年	五,五七六,七六五	七八,二五五,七五五
昭和十一年	四,七六六,九六六	八二,四八八,九六九
前年に比し	△ 八〇七,八四九	四,二八三,五五〇

尙十一年に於ける道別のそれらを示すと次の如くである。

年	總計	京畿	忠南	忠北	全南	全北	慶南	慶北	黄南	平南	平北	江原	咸南	咸北
昭和十一年	四,七六六,九六六	八七,七三三,八八〇	一〇〇,七〇〇	二四,八九九	一七二,九〇〇	一三九,三三七	四三三,四八七	一三三,五七〇	六三三,五五一	五二四,五一	五七四,七〇八	三六一,六一	四六六,六六六	四六九,〇五六
價額	八二,四八八,九六九	一〇,七三三,八八〇	三,五四四,九九	四,九三三,九二六	三,三三三,四三七	二,六六八,二三八	六,九七〇,三三八	二,三三三,八七九	一〇,〇一〇,二六六	八,六八八,二九二	八,〇四七,四四五	六,〇五五,五五〇	六,八八八,四七	七,九七六,六五

昭和十一年 棉生産價額

昭和十一年に於ける棉生産價額を調査する

【農林局調査】

年	陸地棉		在來棉		合計
	收穫高 斤	價額	收穫高 斤	價額	
昭和七年	一一,九一九,一六四	一五,二六九,七〇〇	四三,三六八,五九三	五,一〇〇,〇六四	一五四,七三七,七〇七
昭和八年	二四,三三三,四七八	一四,四七七,五三三	四五,一〇三,〇九六	五,三九九,九四五	一五九,四一五,五七四
昭和九年	一一〇,七三七,八八九	二〇,五五七,六七五	三四,二六八,一八五	五,一〇六,四八	一五五,〇三五,〇七四
昭和十年	一六九,九四八,八八	二九,二九五,九四四	四三,八〇〇,四九九	七,一八九,七〇	二二七,四八八,九六六
昭和十一年	八九,三九二,四七四	一五,〇四三,五九九	四七,九八二,七三八	七,四五三,五五〇	一二七,七五五,二二二
前年に比し	△ 八〇七,八四九	四,二八三,五五〇	△ 七,一八九,七〇	△ 一,七三六,一六六	△ 一〇,八二〇,〇七四

に收穫高は陸地棉八千九百三十九萬二千四百七十四斤、在來棉四千七百九十八萬二千七百三十八斤、合計一億三千七百三十七萬五千二百十二斤で、その價額は陸地棉千五百四萬二千五百十九圓、在來棉七百四十五萬三千五百五十四圓、合計二千二百四十九萬六千七百三十三圓である。之を前年に比すれば收穫高にありては陸地棉八千五百五萬六千三百四十四斤(四割七分四厘)の減、在來棉四百十八萬二千五百八十九斤(九分五厘)の増收であつて、合計七千六百三十七萬三千七百五十五斤(三割五分七厘)の減收である。價額に於ては陸地棉千四百八萬三千三百七十五圓(四割八分四厘)の減、在來棉二十六萬三千八百四圓(三分七厘)の増、合計千三百八十一萬九千五百七十一圓(三割八分一厘)の減少である。

之を道別に觀るに陸地棉にありては全羅南道の二千四百二萬九千九百五十五斤、四百五萬二千八百八十二圓最も多く、慶尙北道の一千四百六十六萬七千三十三斤、二百四十五萬一千二百十五圓之に亞ぎ、慶尙南道の一千百六十六萬三千八百八十三斤、百九十七萬六千九百五十三圓、忠清南道の一千四十六萬一千九百五十九斤、百七十四萬五千七百六十八圓、全羅北道の一千七十七萬六千七百七十七斤、百六十九萬六千二百一圓等の順序となつて居り、在來棉にありては平安南道の二千三百十四萬四千五十斤、三百五十九萬一千七百七十二圓最も多く、黃海道の一、千六百五十六萬一千二百五十六斤、二百五十三萬九千七百六十二圓之に亞ぎ、平安北道の五百七十一萬九千三百九十八斤、九十四萬一千八百五十一圓、江原道の百四十六萬六千八百四十八斤、二十萬九百四十圓等の順序であり、合計にありては全羅南道の二千四百二萬九千九百五十五斤、四百五萬二千八百八十二圓最も多く、平安南道の二千三百十四萬四千五十斤、三百五十九萬一千七百七十二圓之れに亞ぎ、黃海道の一、千七百一十一萬五千九百九十六斤、二百六十三萬五千三百七十二圓、慶尙北道の一千四百六十六萬七千三十三斤、二百四十五萬一千二百十五圓

圓、慶尙南道の一千百六十六萬三千八百八十三斤、百九十七萬六千九百五十三圓等の順序となつて居る。

道	種	陸地棉		在來棉		合計	
		收穫高	價額	收穫高	價額	收穫高	價額
京畿	北	六、八三、四三五	一、四九、〇二一	一、〇七六、三七七	七、九二二、六三三	一、三三六、三三九	一、三三六、三三九
忠清	北	九、五三、九八七	一、六三八、六六八	—	九、五三三、九八七	一、六三八、六六八	一、六三八、六六八
忠清	南	一〇、四六一、九五九	一、七四五、七六八	—	一〇、四六一、九五九	一、七四五、七六八	一、七四五、七六八
全羅	北	一〇、一七六、七七七	一、六九六、一〇一	—	一〇、一七六、七七七	一、六九六、一〇一	一、六九六、一〇一
全羅	南	三、四〇、九一五	四、〇五二、八八二	—	三、四〇、九一五	四、〇五二、八八二	四、〇五二、八八二
慶尙	北	一、四、六七〇、三三三	二、四五二、二五五	—	一、四、六七〇、三三三	二、四五二、二五五	二、四五二、二五五
慶尙	南	二、六三三、八八三	一、九七六、九三三	—	二、六三三、八八三	一、九七六、九三三	一、九七六、九三三
黃海	南	五、五三、九四〇	九、五、六〇〇	一、六、五六一、二五五	二、五九、七三三	二、六三三、八八三	二、六三三、八八三
平安	北	一〇、三六〇	—	三、一、四四、〇五〇	三、一、四四、〇五〇	三、一、四四、〇五〇	三、一、四四、〇五〇
平安	南	—	一、八四九	五、七一九、三九八	五、七一九、三九八	五、七一九、三九八	五、七一九、三九八
江原	原	一、四二八、一九五	—	三、四、三六三	—	一、四二八、一九五	—
咸鏡	南	—	—	一、四六六、八四八	—	一、四六六、八四八	—
咸鏡	北	—	—	一、四、九五九	—	一、四、九五九	—
總計		六、八三、四三四	一、五〇、四三、五二九	四、七、九八二、七三六	七、四五三、五五四	一、三三六、三三九	一、三三六、三三九

昭和十一年

蔬菜生産價額

【農林局調査】

昭和十一年に於ける、蔬菜の生産價額を調査するに、收穫高に於ては蘿蔔一億四千二百

二十一萬四千九百七貫、白菜一億三十二萬八百一十二貫、甘藍二百五萬四千五百四十二貫、葱六百五十一萬八千四百五十五貫、茄子四百九十六萬七千八百二十八貫、胡瓜千九百七十七萬六千二百九貫、南瓜千三百三十六萬五千八百八十六貫、甜瓜三千二百五十五萬六千三百二十八貫、西瓜七百七十萬百六十七貫、大蒜千一百十萬一千三百一貫、蕃椒千二百七萬三千七

百四十七貫、芹二百八十三萬三千六百七十九貫、コンニャク芋千三百六十六貫であつて、其の價額は蘿蔔千三百八十八萬七千一百八圓、白菜千三百八十四萬四千八百七十一圓、甘藍三十五萬三千三百三十圓、葱百六十六萬四千八十圓、茄子九十四萬二千六百三十二圓、胡瓜二百六十五萬三千九百七十一圓、南瓜百二十八萬六千四百四十四圓、甜瓜四百九十八萬八千三百三十五圓、西瓜百四十三萬三千六百九十九圓、大蒜六百三十八萬一千八百六圓、蕃椒千百九十九萬五千四百三十六圓、芹五十四萬四千三百六十三圓、コンニャク芋四百二十七圓、合計五千九百七十七萬五千九百三十二圓である。

此の價額を前年に比すれば減收により減少せるものは南瓜二萬二千二百十九圓（一分七厘）甜瓜二十二萬九百九十八圓（四分六厘）西瓜五萬四千六百十五圓（三分七厘）、大蒜二萬五千三百三十四圓（四厘）、コンニャク芋五百八十圓（五割七分六厘）であつて、減收せるも價格騰貴により増加せるものは蘿蔔十五萬八千六百八十一圓（一分二厘）、白菜百十七萬七千五百一圓（九分三厘）、茄子四萬五千六百一十一圓（五分一厘）、芹一萬六千五百四十四圓（三分）であり、増收により價額の増加せるもの

は甘藍二萬八千六百七十九圓（八分八厘）、葱二十七萬五千二百二十九圓（一割九分八厘）、胡瓜十三萬八千二圓（五分五厘）、蕃椒八十四萬二千三百三十圓（八分一厘）で差引合計に於ては二百八十萬二千四百二十二圓（五分）の増加を見たのである。

茲に蔬菜生産價額の道別を記して見よう。

京畿	一〇、四八五、四五一	黃海	四、七七八、五九九
忠北	二、六九九、九八三	平南	四、三九七、四九六
忠南	七、五九九、二六七	平北	四、六二二、五三六
全北	五、三三八、三四七	江原	三、四九八、三三七
全南	四、四八八、五三八	咸南	三、七四九、〇六七
慶北	三、〇三三、三七九	咸北	二、一八七、一三五
慶南	二、九六八、一八四	總計	五、一七五、九三三

昭和十一年

桑苗生産價額

【農林局調査】

昭和十一年に於ける桑苗生産價額を調査するに、生産高は接木苗二千九百七十萬本、栽植用實生苗四百五十四萬六千本、砧木用實生苗四千七百七十萬一千本、其の他の桑苗十九萬本、合計七千六百十三萬七千本で其の價額は

接木苗五十一萬一千九百七十圓、栽植用實生苗三萬二千八百八十六圓、砧木用實生苗十萬三千七百六十六圓、其の他の桑苗千九百八十一圓、合計六十四萬九千八百四十圓である。

之を前年に比すれば生産高に於ては接木苗五百三十萬九千本（一割五分三厘）、栽植用實生苗二百四十六萬一千本（三割五分一厘）、砧木用實生苗二千三百三十三萬七千本（三割三分八厘）、其の他の桑苗十二萬八千本（四割三厘）を夫々減少し、合計二千九百二十八萬五千本（二割七分八厘）減少してゐる。價額に於ては生産高減少と、價格低下により接木苗十萬七千三百二十九圓（一割七分三厘）、栽植用實生苗二萬五百八十九圓（三割九分）を減少し、價格騰貴せるも生産高の著しき減少により砧木用實生苗二萬七千七百六十圓（二割一分一厘）減じ、其の他の桑苗は生産高減少せるも非常なる價格昂騰により千百七十圓（十割四分三厘）を増加し、合計に於て十五萬四千五百八圓（一割九分二厘）の減少を示してゐる。

最近五年間に於ける生産高及び價額は次の如くである。

昭和七年	生産高	價額
	千本	圓
	九七、〇四五	八、三三、七五

昭和八年 一〇一、八三三 七六三、八四七
 昭和九年 九七、一六九 八五九、三〇二
 昭和十年 一〇五、四三三 八〇四、三〇八
 昭和十一年 七六、一七七 六四九、八四〇
 尙十一年に於ける道別のそれ等を示すと次の通りである。

道別	生産高	價額
京畿	五、六三四	七四、七三三
忠北	三、一一一	三三、七五〇
忠南	七、八二一	五七、〇六六
全北	七、四七七	四三、九四四
全南	一〇、四三三	七二、三三三
慶北	一四、九三三	一三四、二九九
慶南	六、三三三	四五、二二二
黄海	二、九四一	二九、〇九一
平南	一、九〇一	一八、四八〇
平北	五、七元	五九、七六九
江原	五、六〇八	四五、六七八
咸南	三、四七七	三一、一四三
咸北	八四	四、六二二
總計	七六、一七七	六四九、八四〇
前年に比	二九、二八五	一五四、五八〇
減		

昭和十一年 甘藷及馬鈴薯生産價額

【農林局調査】

昭和十一年に於ける甘藷及び馬鈴薯の生産

高を調査するに、收穫高は甘藷五千三百一十一萬七千五百二十一貫、馬鈴薯一億九千四百八十四萬七千四百七貫で、其の價額は甘藷八百二十四萬九千五百三十八圓、馬鈴薯二千三百七十八萬五千八百八十九圓である。

之を前年に比すれば收穫高は甘藷三百四十 二萬五千五百二十一貫（六分一厘）減し、馬鈴薯三千四百二十八萬三千八百三十四貫（二割一分四厘）を増加し、價額に於ては甘藷二十一萬四千六百八十四圓（二分五厘）減少し、馬鈴薯は三百九十三萬七千六百七十六圓（一割九分八厘）を増加してゐる。

道別	甘藷		馬鈴薯	
	收穫高	價額	收穫高	價額
昭和七年	三、五六六、〇〇〇	五、九七、五三四	一八三、九〇一、三〇〇	一五、八六、五三四
昭和八年	四、二五、九三三	五、七〇、七三三	一九九、七三、四四四	一三、六、六八八
昭和九年	四、三三七、七五五	六、一九、九二〇	二一三、六九三、二二八	一九、〇七九、九三三
昭和十年	五、六、五四〇、四三三	八、四六四、二三三	一九〇、五六三、二三三	一九、八四七、五三三
昭和十一年	五、三、一七、五二二	八、三、四九、五三六	一九四、八四七、〇四七	三三、七八五、一八九
前年に比し	△三、四四五、五二二	△三、四、六八四	三、四、二六三、八四四	三、九七七、六七六
増(△減)				三、七三三、九九三

尙ほ昭和十一年に於ける道別を示すと次の通りである。

道別	甘藷		馬鈴薯	
	收穫高	價額	收穫高	價額
京畿	四、一三七、九五〇	七五八、一一二	七、一九九、五五一	一、〇、四九八、三三五
忠北	四、五三、四九四	一三三、四三六	三、〇三三、九五六	五六五、四三三
忠南	二、九四八、八四四	七五八、五三四	二、七七七、八八三	六五〇、九六九
全北	一、七六、八四九	四七五、六九九	二、〇〇九、五四一	四三三、〇三三
全南	一九、三三三、〇九一	二、六七、九五五	一、三、四、九二八	二、四、一八九
慶北	一、三二一、五五〇	三〇九、五三〇	四、五九四、〇一九	七六六、四九三

昭和十一年

肥料共同購入実績

【農林局調査】

昭和十一年中に於ける道、郡農會の肥料共同購入斡旋高は數量四千七百萬貫、金額一千八百萬圓であつて、之を前年に比すれば數量に於て三割四分五厘、金額に於て五割七分三厘の増加である。之が内容に就いて觀るに配合肥料(主として朝鮮農會配合に依るもの)は數量二十三割、金額三十一割の増加であつて斯かる激増を示したのは系統農會に於て單肥を避け合理的且つ經濟的配合肥料の普及に努め一般農家亦之に追従したるに因るものであつて眞に喜ばべき現象である。配合肥料に次

慶南	五、四〇、八七三	七三、八六九	一、七九八、五六九	一九、一三五
黄海	八、三〇、八三三	一、一〇〇、〇四三	二、七五六、八五五	四〇、〇三九
平南	六、一八、一五三	七四、六七九	一〇、二八三、五七六	一、二四七、二〇四
平北	二、六六、九五五	四四、五七〇	一、二七〇、一〇〇	一、五七七、六〇四
江原	四七、七〇〇	二七、五三九	二六、五三八、九三三	二、七四〇、〇七五
咸南	一、一八、一〇〇	三三、二六六	九七、七〇八、九〇八	一〇、六六一、八七九
咸北	四〇〇	九二	三三、三三四、六六六	三、一〇六、三三三
總計	五三、一七、五三二	八、二四九、五三八	一九四、八四七、〇四七	三三、七五二、一八九

ぎ石灰窒素は數量五割七分、金額六割五分の増加を示し、漸く本肥料の本質を體得せる結果と認められる。其の他の單肥は前年に比し、著しき減少を示し、就中大豆油粕類の如きは數量に於て約九割、硫安は約三割、過燐酸は約四割四分(十五度に換算)、硫酸加里七割六

肥料共同購入前年對照表

種別	昭和十一年		昭和十年		増減歩合(△は減)
	數量	金額	數量	金額	
大豆油粕類	三、七〇、〇三三	一、一〇三、一八二	三、九一九、五三三	九、〇〇六	△
硫安	三、八四三、九四三	八、八〇九、八三九	九、八八八、八二二	八、九六六	△
石灰窒素	二、三〇六、五〇一	七、五八、九六九	二、四四八、一九五	二、九四四	△
總計	三、三〇六、五〇一	一、四六四、八三三	三、三〇六、五〇一	六、五七五	△

分、硫燐安一割五分、其の他の化成肥料は七割を各減少し、僅に硫安價格暴騰のため之が代用として使用せる硝石に於て數量金額共に激増を示せる状態である。

次に之が購入資金に就いて觀るに肥料低利資金を使用せるものは約一千七百萬圓であつて共同購入斡旋額一千八百萬圓の約九割に當り前年の夫れに比し一割の増加を示し、尙十一年中に於ける肥料低利資金斡旋總額(約二千萬圓)に對する割合は約八割五分に當つてゐる。斡旋手數料收入は總額十七萬圓餘であつて前年の八萬圓に比し約二十割の増加であつて之が費途は肥料の各種施設奨勵費及び斡旋費に充當してゐる。

品名	數量	金額
過磷酸石灰	一、九八、二三	一五度
硫酸加里	九、九〇、〇七	一九及九・五度
(鹽化加里を含む)	三〇度及三・九度	
硫 燐 安	五三三、二六	九六、九〇八
其他の肥料	四九、九〇〇	一、一六八、八五四
化成肥料	一六六、八六九	六六、一九〇
配合肥料	二九三、三五、二八	三六、六〇〇
其他	一、八四八、四九八	一六六、八六九
合計	四七、四六、九二九	一八七、七二一、三九六

昭和十一年末

畜 牛

【總督官房文書課調査】

昭和十一年末現在に於ける牛の飼養戸數は一、三三三、一九三戸、飼養頭數は一、七〇二、九七九頭で前年末に比し戸數に於て一七、三四二戸を、頭數に於て二、三、五〇九頭を何れも増加した。畜牛の種類別は朝鮮種が大部分を占め一、七〇〇、七九八頭(九九・九%)を外

道 名	畜牛頭數	増減率
京 畿	三、九七、三五三	△三・三六
北 陸	六、六、二〇〇	—
東 海	一、六四〇、九五五	△三・九七
近 畿	九、五、六四三	△四・一九
關 東	四、四、四六六	△七・七六
山 陽	二〇〇、八四八	△七・五
山 陰	一、三、七三三	△一・〇〇
四 國	六、六、七三三	△〇・〇七
香 川	一、〇七六、三〇〇	△七・五
愛 媛	三、七、五〇〇	△五・五
高 知	八、八、五二一	△三・三
徳 島	二、八、六、九四九	△三・〇
松 山	九、七、五六五	△四・四
愛 知	二、七、四、九六五	△四・八
岐 阜	三、六、一〇一、一九九	△三・五
静 岡	一、一、八、九一九	△五・三
山 梨	一、一、八、九一九	△三・五

國種は僅に二、一八一頭(〇・一%)に過ぎない。尙之等外國種は主として乳用牛に使用されてゐる。

畜牛頭數を道別に觀ると慶北の一、九六、一三〇頭(總頭數の一・五%)最も多く、之に亞ぐは江原の一、九〇、三六三頭、平北の一、八八、一〇〇頭、咸南の一、六八、二二一頭、慶南の一

畜 牛 増 減 表

道 名	年末現在頭數	生 産	斃 死	屠 殺
京 畿	六、四四九	九、四〇七	七、九七〇	一三、九六六
北 陸	六、六、七九	七、九七〇	七、八	五〇、五六六

六一、二三五頭等で十萬頭以上の道は前記の外京畿・全南・黃海・平南の各道で、全北の五四、二六〇頭が最も少い。畜牛の普及狀況を觀ると全鮮農家百戸當の畜牛飼養戸數は四四・二月で前年に比し〇・七戸を増加してゐる。道別の割合は咸北の六・二五戸が最も高率で之に亞ぐは黃海・平北・江原・咸南の五〇戸臺、京畿・忠北・慶北・慶南・平南の四〇戸臺、全南・全北の二〇戸臺である。尙農家百戸當の畜牛頭數は全鮮平均五・七頭で之を道別に觀ると咸北の一〇九頭が最も高率を示し咸南の八八・六頭平北の八八・四頭、江原の七六・八頭、平南の六二・五頭が順次に亞ぎ其の他は京畿・慶北・慶南・黃海の五〇頭臺、忠北の四九・七頭、全南・忠南の三〇頭臺で全北の二・七頭が最少である。

昭和十一年中の移動狀態は生産頭數三六三、八六九頭、屠殺頭數二、七二、五四一頭、斃死頭數二六、五四三頭で前年末現在滿二年以上の牝百頭當の生産率は四八・二頭、年末現在總頭數百頭當の屠殺率は一六頭、斃死率は一・六頭となる。

八〇頭が最少である。昭和十一年中の移動状況は生産頭数四、〇〇二頭、斃死頭数二、四二八頭、屠殺頭数九三四頭であるが年末現在(明二歳以上)の牝百頭當の生産率は一六・八頭、年末現在總頭數百頭當の斃死率は四・七頭、屠殺率は一・八頭となる。

道名	牝	牡	計	飼養戸數
京畿	二五五	一、六五八	一、九一三	一、七九
忠北	一四三	一、七	一、〇	二七三
忠南	三六	二九七	五五	五八
全北	五三	一、八八八	二、四二	二、七三
全南	三、四一	二、三九	二、四〇	二、九八
慶北	一、〇九	九一	二、〇〇	二、〇八一
慶南	四四	二六七	六八	六〇九
黄海	二、四七〇	二、一八四	四、六五四	四、四八八
平南	二、三二	二、四九	四、七〇	四、五九一
平北	一、七〇	二、〇八一	三、七七一	三、五〇八
江原	四七	七四六	一、二二三	七五二
咸南	一、〇〇	一、五六一	二、七六一	二、〇三
咸北	一、一八七	七三三	一、九二〇	一、六四三
總計	三三、三六	二六、三三	五九、六九	五七、〇〇四
年末現在	三三、五八〇	二七、〇三	六〇、六一	三六、一三三
前年に比	△三三	△七九六	△一、〇四	△七一
増(△減)				

昭和十一年末

驢・騾・山羊及緬羊

【總督官房文書課調査】

昭和十一年末現在に於ける驢・騾・山羊を調査すると

一 驢の飼養戸數三、八八五戸、飼養頭數三、九九七頭にして之を前年末に比較すれば戸數に於て三三二戸、頭數に於て三七二頭を何れも減少した。道別の分布状態を観ると驢は主として北鮮及西鮮の各道に多く、咸北の一、二、四九頭が最も多く、平北の一、二〇九頭、平南の五五六頭、黄海の四九八頭等之に亞が多い。

二 騾の飼養戸數は九六八戸、飼養頭數は一、〇六五頭で前年末に比較して戸數に於て一五六戸(一割四分)頭數に於て二〇四頭(一割六分)を各減少した。

騾は主として西鮮地方に於て多く飼養され平北の三一四頭(二九・四%)が最も多く黄海の三〇四頭(二八・五%)、平南の二二二頭(一一・四%)が之に亞ぎ以上の三ヶ道が總頭數の六九・三%を占めて居る。

三 山羊は飼養戸數二五、七二二戸、飼養頭

數三九、五三四頭にして前年に比較すれば戸數に於て三、二八〇戸(一割五分)頭數に於て五、三九頭(一割五分)を何れも増加した。山羊は主として南鮮に於て飼養され慶南の一三、七二八頭が最も多く慶北の九、八九一頭、全北の四、八七五頭、全南の四、二九五頭が之に亞ぎ以上の四ヶ道で總頭數の八二・八%を占めて居る。

四 緬羊の飼養戸數は六九〇戸、飼養頭數は二、一四三頭で前年末に比し戸數に於て二五七戸、頭數に於て二、七五五頭を何れも増加した。緬羊の飼養は咸北の七、八八頭、咸南の一、四〇八頭、黄海の七七七頭、平南の七二九頭等多き方にして以上の四ヶ道で總頭數の八八・三%を占めて居る。

因に昭和十一年中に於ける動態は生産三、七二四頭、斃死二、四五三頭、屠殺一、〇六二頭である。

尙右家畜の最近の趨勢を観るに驢・騾は逐年減少の一途を辿り、山羊及緬羊は一時減退の傾向にあつたが近時増加に轉じ特に緬羊の増加率は他の家畜に比し最も顯著である。

道別	驢	騾	山羊
京畿	三元	九頭	一一二
忠北	二元	七頭	一、七八

忠南	三〇	一六	一、四二五
全北	三三	五	四、八七五
全南	三三	三	四、二九五
慶北	四三	一三	九、八九二
慶南	二〇	二二	一三、七三六
黄海	四七	二九	三、三五
平南	五一	二六	一、二八
平北	一、七五	二四五	一四一
江原	二〇六	一〇三	四一
咸南	八六	三元	三〇七
咸北	一、二〇六	一一	一〇三
總計	三、八八五	九六六	三、五三四
前年に比し増(△減)	△三三三	△一五六	
飼養戸數	三、八八五	九六六	二五、七三二

昭和十一年末

養豚

【總督官房文書課調査】

昭和十一年末現在に於ける養豚状況を調査するに、飼養戸數は一、二三六、九四六戸、飼養頭數は一、五七三、五九〇頭で之を前年末に比較すれば飼養戸數に於いて二六、五四七戸(二分四厘)を、飼養頭數に於いて四二、八一八

頭(二分七厘)を減少してゐる。

養豚の種類別はパークシャー種及其の雜種九〇九、〇六五頭(五七・八%)、朝鮮種五八一、二八〇頭(三六・九%)、支那種及其の雜種七四、九〇八頭(四・八%)、ヨークシャー種及其の雜種五、九七七頭(〇・四%)、其の他二、三六〇頭(〇・二%)、其の他二、三六〇頭(〇・一%)である。

而して前掲の内朝鮮種を在來種とし朝鮮種以外を改良種として其の割合を観ると在來種は三六・九%、改良種は六三・一%となるが、之を昭和二年(十年前)に於ける割合たる在來種六八・八%、改良種三一・二%に比すれば全く反對の現象を示してゐる。又昭和二年を一〇〇とした指數は昭和十一年に於ては一二六を示し其の増加率は他の家畜に比し急速である。

養豚頭數を道別に觀れば全南の二四三、一三一頭が最多で、黄海の一六八、九九三頭、平北の一五九、〇七五頭、全北の一三四、六八七頭、慶南の一二八、二八四頭等之に亞ぎ以上の外十萬頭以上は慶北・咸南・咸北の各道、十萬頭未滿は京畿・忠南・江原・忠北・平南の各道である。

全鮮農家百戸當の豚飼養戸數は三七・一戸

であるが、道別の割合は咸北の七八・九戸が最も高率を示し、黄海・平北は五〇戸臺、全北・全南は四〇戸臺、忠北・忠南・平南・咸南は三〇戸臺、京畿・慶北・慶南・江原は二〇戸臺である。

又農家百戸當の飼養頭數は全鮮平均五一・四頭となるが、道別の割合は咸北の一三二・七頭を最高に、平北の七四・八頭が之に亞ぎ、其の他全南・黄海は六〇頭臺、忠北・全北・咸南は五〇頭臺、忠南・慶南・平南は四〇頭臺、京畿・慶北・江原は三〇頭臺で以上を綜合するに大體に於て北鮮及西鮮は高率を示してゐる。尙昭和十一年中の養豚の動態は生産一、二一五、四九〇頭、斃死一四二、二三九頭、屠殺八七五、七一四頭である。

京畿	飼養戸數	頭數
忠北	六四、四〇四	八四、〇五三
忠南	五七、二六六	七三、九〇〇
全北	七八、〇二七	九〇、八五一
全南	一〇三、六九三	一四、六六七
慶北	一八六、〇五七	二四三、三一一
慶南	七二、三三五	一一五、八三五
慶南	七三、四二六	一一八、三六四
黄海	一三三、〇五三	一六八、九九三
平南	五六、九一〇	七、九二二

平 北	111,001	159,095
江 原	65,000	77,127
咸 南	73,975	111,133
咸 北	62,199	104,549
總 計	1,136,946	1,573,500
前年に比し増(△減)	16,547	△ 43,818

昭和十一年

林 産 額

【農林局調査】

昭和十一年の林産總額は一億一千八百六萬圓であつて其の主なる種別産額は左の通りである。

用材	二百二十七萬立方米	一千八百九十四萬圓
薪	二十四萬束	三十一萬圓
竹材	十四億六千九百二十三萬貫	二千八百七十五萬圓
枝葉	十六億三千六百二萬貫	二千四百六十三萬圓
其他の林産燃料		十九萬四千八百六十一萬貫

綠肥	一億一千八百六十一萬圓
堆肥原料	十一億七千一百九十三萬貫
飼料	五億二百九萬貫
木炭	二千五百四十九萬貫
種實	二十萬石
其他	一億一千八百六萬圓
計	三百三十九萬圓

即ち林産物の大半は燃料であつて、林産總額の六十一%を占め、用材は十六%、綠肥及堆肥原料は十一%、其他十二%である。

此の林産總額を前年に比すれば四百六萬圓の増加を示し、其の主なるものは用材八十萬圓、薪二百三十四萬圓、堆肥原料百四十一萬圓、飼料百二十六萬圓、木炭六十二萬圓等であつて減少せるものは枝葉三百五十萬圓等である。之を道別に觀ると次の如く、忠南・慶北・平北・江原の五箇道に於て僅に減を示す外、他の八箇道は八千圓乃至八十五萬圓の増加を示してゐる。

京 畿	昭和十一年 千円	昭和十年 千円	増加額 (△減)
忠 北	9,266	8,623	千円 643
忠 南	2,046	1,951	千円 95
全 北	4,758	4,888	千円 △ 130
全 南	6,193	6,118	千円 75
全 北	13,788	11,940	千円 1,848
全 南	13,998	13,001	千円 997
慶 北	10,688	10,680	千円 8
慶 南	5,300	5,109	千円 191
黄 海	4,788	4,775	千円 13
平 南	14,377	14,377	千円 △ 0
平 北	11,244	11,857	千円 △ 573
江 原	3,700	12,133	千円 648
咸 南	9,998	9,010	千円 988
咸 北	1,865	1,405	千円 460
計	1,573,500	1,136,946	千円 436,554

次に既往五箇年の林産額に就て其の増減を比較すれば次の如く、昭和七年に比し六千三百萬圓の激増である。

昭和七年	五千五百七萬圓
昭和八年	九千四百三十三萬圓
昭和九年	一億六百三萬圓
昭和十年	一億一千四百萬圓
昭和十一年	一億一千八百六萬圓

而して本年林産額を國民有林別に觀ると、

民有林の林産額は總額の八十五%、九千八百九十萬圓に達する。此の約八十六%は燃料、緑肥及堆肥原料並に家畜飼料等營農用のものであつて、用材・木炭・種實・菌叢等金錢收入を主たる目的とするものは僅に十四%である。次に國有林の林産額は約一千九百十六萬圓であつて總額の十五%に當り、民有林の産額に比し著しく劣つてゐる。此の内七〇%は用材・木炭・種實・菌叢等、残りの三十%は燃料、緑肥及堆肥原料並に家畜飼料等であつて民有林に比し著しく其の内容を異にするのである。

昭和十一年

漁獲高

【殖産局調査】

昭和十一年に於ける漁獲高は數量一、六六八、二三八、七八七疋、價額七九、八七九、一三三圓にして、之を前年に比すれば、數量に於ては一六五、〇〇九、七〇二疋（一割一分）、價額に於ては一三、九一二、五二三圓（二割一分）の激増であつて、實に始政以來最高の記録を示してゐる。之は主として漁獲物中首位を占

むるマイワシの豐漁に因るものであつて、試みに前年と比較すれば、數量に於て一八七、三八〇、二九七疋（二割三分）、價額に於て一〇、一七二、二八九圓（六割一分）の著しき増加である。
先づ最近十箇年間の漁獲高を表示すると次の如くである。

最近十箇年漁獲高累年比較表

	數量	指數	價額	指數
	疋		千円	
昭和二年	八三、五〇	一〇〇	六四、〇七五	一〇〇
昭和三年	八四、四六	一〇一	六六、二四	一〇三
昭和四年	九四、八三	一〇九	六五、三六	一〇二
昭和五年	八六、六四	一〇四	五〇、二九	七六
昭和六年	一〇三、四〇	一二五	四六、五八	七三
昭和七年	一二六、一七	一四〇	四六、六三	七三
昭和八年	一〇〇、七三	一二三	五、七七八	八〇
昭和九年	一、三三、四八	一六七	五七、七七	九〇
昭和十年	一、〇三、三九	一二一	六五、六六	一〇三
昭和十一年	一、六六、三九	二〇〇	七九、八七	二二四

而して昭和十一年に於ける漁獲高を種類別に觀ると次の如くである。

海藻類	六六、六五、九三	三、〇四、二八
其他の水産動物	五九、一七〇、六四	四、八九、三六

合計

一、六六八、三三八、七七 七九、八七九、一三七
この産額の割合を觀ると魚類は最も多く總額の八割八分を占め、貝類は二分、海藻類は四分、其の他の水産動物六分である。

道別に觀ると咸北の一六、四五二、六一九圓（總額の二割）首位を占め、慶南の一三、一七三、九七一圓之に次ぎ、以下咸南・全南・江原・慶北の順であつて忠北の七、一七一圓が最低である。

次に重要水産物を掲ぐれば

マイワシ	二六、八二二、七五	總額の三割三分
メンタイ	五、七九、五九	七分
サバ	四、七〇、八二五	六分
グチ	四、七四、七六	五分九厘
ニシン	三、〇〇、〇七五	三分七厘
カタクチ	二、七五、四三	三分四厘
イワシ	二、二〇、三三	二分七厘
タチウオ	一、〇三、六七	二分二厘
アレイ	一、六六、三三	二分
カレイ	一、三六、三三	一分七厘
タラ	一、三五、〇九	一分七厘
タイ	一、三五、五六	一分六厘
サワラ	一、二五、三四	一分三厘
ニベ	一、〇七、一〇	一分三厘
ヒラメ	一、〇四、四三	一分三厘
エビ	二、五二、二七	三分一厘

等であつて、これらの主要地を観るに、マ
イワシ・メンタイ・ニシンは東海岸(咸南北・
江原・慶南北各道沿海)、ゲチ・エビ・サワラ
は西海岸(平南北・黄海・京畿・忠南・全南
北各道沿海)、サバ・カタクチイワシは南海岸
(全南・慶南各道沿海)、アジ・タイ・ニベ・
ヒラメは南西兩海岸(慶南・全南北・忠南・
黄海・平北各道沿海)、タチウオ・タラは東兩
南海岸(全南・慶南北各道沿海)、カレイは各
道沿海に於て漁獲してゐる。

昭和十一年末

地 税

【總督官房文書課調査】

面積 昭和十一年末現在に於ける全鮮の課
税地(大正三年制令第四號及地稅令第七條ノ
二の規定に依り地稅を徵收せざるものを含む)
は四百五十三萬千七百六十二町歩で朝鮮
總面積の約二割に當り、前年末に比較して一
萬九千八百六十八町歩(四厘)を減少して居る
が是は昭和十一年中に於ける荒地成の激増し
た結果である。

土地の種類別では田畠が多く其の合計は課
税地總面積の九六・二%に當つて居る。即ち
田の二百七十二萬八千七百町歩が最も多く總

面積の六〇・二%を占め、畚は百六十三萬三
千百町歩で三二・〇%に當つて居る。其の他
は埜の十三萬八千五百町歩、雜種地の三萬三
百町歩等である。道別の面積は黃海の五十六

萬六百町歩(一二・三%)が第一位で、全南
の四十三萬町歩、咸南及平北の各四十一萬町
歩、平南及京畿の各四十萬町歩等が多い方
である。

道	田		畚		埜		雜種地		其他		合 計
	町歩	千圓									
京畿	1,000,000	105,750	1,570,000	15,700	4,400,000	44,000	2,450,000	24,500	6,000,000	60,000	104,000,000
忠南	840,000	84,000	1,200,000	12,000	6,400,000	64,000	4,000,000	40,000	2,600,000	26,000	104,000,000
忠北	810,000	81,000	1,200,000	12,000	1,400,000	14,000	2,000,000	20,000	1,800,000	18,000	104,000,000
全南	660,000	66,000	1,200,000	12,000	9,900,000	99,000	9,900,000	99,000	1,000,000	10,000	104,000,000
全北	1,000,000	100,000	1,200,000	12,000	1,600,000	16,000	4,000,000	40,000	4,000,000	40,000	104,000,000
慶南	1,700,000	170,000	1,200,000	12,000	1,500,000	15,000	3,700,000	37,000	3,700,000	37,000	104,000,000
慶北	1,700,000	170,000	1,200,000	12,000	1,200,000	12,000	6,000,000	60,000	2,600,000	26,000	104,000,000
黃海	4,000,000	400,000	1,200,000	12,000	11,200,000	112,000	5,000,000	50,000	8,500,000	85,000	104,000,000
平南	3,300,000	330,000	1,200,000	12,000	9,000,000	90,000	4,300,000	43,000	1,000,000	10,000	104,000,000
平北	3,300,000	330,000	1,200,000	12,000	8,800,000	88,000	1,300,000	13,000	1,500,000	15,000	104,000,000
江原	2,400,000	240,000	1,200,000	12,000	8,400,000	84,000	2,700,000	27,000	3,400,000	34,000	104,000,000
咸南	1,500,000	150,000	1,200,000	12,000	5,500,000	55,000	3,700,000	37,000	2,500,000	25,000	104,000,000
咸北	1,500,000	150,000	1,200,000	12,000	3,700,000	37,000	1,600,000	16,000	2,500,000	25,000	104,000,000
總計	21,700,000	2,170,000	11,600,000	1,160,000	119,000,000	1,190,000	50,000,000	500,000	44,000,000	4,400,000	1,040,000,000
前年末に比 し増(△)減(○)	△ 1,612,000	△ 161,200	△ 3,772,000	△ 377,200	○ 1,557,000	○ 155,700	○ 7,300,000	○ 730,000	○ 2,400,000	○ 240,000	○ 24,000,000

地價 地價は九億三千四百十八萬三千七百
六十四圓(稅額千四百一萬二千七百五十六圓)
で、前年末に比較して五百二十萬九千四十七
圓(稅額七萬八千三百三十六圓)、割合にして五
厘を減少して居る。

地目別では畚が最も多く六億三千八百十二萬
二千圓で總地價の六四・六%を占め、田の二億
四千五百七十二萬八千圓(二六・三%)、埜の

八千三百一十一萬七千圓(八・九%)、雜種地の
百四十七萬九千圓等が順次之に亞いで居る。
道別に觀ると慶北一億三千八百八十四萬三千圓
(二四・一%)が首位を占め、之に亞いで居る
のは慶南、全南、京畿三道の各一億二千萬圓
内外、忠南の約一億圓、全北の九千萬圓、黃
海の八千萬圓等で咸北の一千万圓(一・一%)
は他道に比較して特に少い。

地 價

地 區	田	畑	雑種地	其他	合 計	稅 額
京畿	二五、三二、五六六	六四、九三、一八〇	二四、〇三、四三六	五、九〇、九	七、三三、〇三九	一、七七、七五三
忠北	一四、七四、三三四	三九、三六、九六六	二、七〇、一〇七	九、八、四	一、四三、五	七〇、七五三
忠南	一八、〇〇、〇〇〇	七六、〇四六、二二九	五、五〇、九三六	一、三、四	九、九、七三三	一、四九六、一五三
全北	一三、〇九、五、六六	七、五、四二、三五六	五、四四、四八四	五、九、七	三、三、二	九〇、一五九、四八七
全南	三三、八〇、七一一	八、七、〇四、四七三	七、五、六、九、九五	一、六、一、二、五	一、一〇、二、八、五、四、四〇四	一、七、八、一、九六
慶北	三、三、〇三、六元	九、〇、九三、九四九	八、五、七、六、九	四、五、七	二、二、〇、二、一、八、四、三、一〇一	一、九、七、六、四六六
慶南	三、三、四、三、二六	九、〇、〇四、六三三	一〇、九、五、八、七、二六	六、五、三、九	一、六、〇、五、八、一、二、四、〇、四、八、九、五	一、八、〇、〇、七、三、四
黄海	三、七、五、七、五六	三、五、五、〇、九、七、八	三、七、七、〇、四、六	一、〇、五、五、三	五、三、五	一、五、三、八、九、六
平南	一、九、三、八、一〇、六	一、四、五、五、一、二、八〇	四、三、六、四、五、七	七、四、八、九	六、九、九	五、四、五、三〇
平北	一、三、〇、〇、四、五	一、五、〇、九、四、五、八	二、〇、七、四、九	三、九、七、七、四	三、〇、三、五、七、一、四〇	四、五、三、八、五、七
江原	一〇、八、四、一、三、二	一、八、一、〇、三、三、六、八	二、三、三、六、四、八	一〇、一、九、〇	二、六、六	三、一、一、三、九、六
咸南	九、〇、〇、〇、〇	八、六、三、三、三	三、E〇〇、八、八、八	八、五、七、四	一、七、九	二、一、七、〇、三、九
咸北	六、六、四、七、九	二、〇、三、四、六、四	一、七、〇、二、三、三	七、五、〇	一、六、七	一、〇、一、〇、六、二、四
總計	二四、七、六、七、一、六三	八三、八、三、八、六一	八、二、七、〇、五、四	一、四、七、九、六、七、六	三、四、五、九、九、三、七、六、四	一、四、〇、二、七、五、六
前年に 比し増 (△減)	△二、七、九、七、一、△	△三、一、八、五、四〇	△三、〇、六、六、△	△二、七、七、七、七、△	△一、〇、六、六、△	△五、二、〇、九、〇、四、七

納税人員納税額別

地 區	一圓未満	一圓以上 五圓未満	五圓以上 二十圓未満	二十圓以上 百圓未満	百圓以上	合 計
内地人	二六、五、七、七	三、五、〇、三、一	二、一、〇、〇、二	一、三、九、〇、九	三、五、八、二	一〇、〇、九、六
朝鮮人	一、九〇、九、九、六	一、二、七、〇、五〇	四、三、六、七、七	七、五、一、四、三	九、一、九、九	三、六、六、〇、七、五
外國人	六、八、八	四、三、三	三、九、七	二、〇、五	六、一	一、七、三
總計	一、九、三、七、一、八、三、一	三、〇、六、五、七、四	四、三、一、三、三	九、一、三、六、六	一、三、八、四、二	三、七、七、七、〇、七、六

納税人員所有面積別

地 區	一段歩未満	一段歩以上 一町歩未満	一町歩以上 五町歩未満	五町歩以上 二十町歩未満	二十町歩以上 五十町歩未満	五十町歩以上	合 計
内地人	二、五、六、四、〇	三、八、六、七、三	二、七、三、三、三	一、〇、四、五、五	二、九、九、一、三、〇	一〇、六、二、九、六	二、五、六、四、〇
朝鮮人	六、六、六、七、一	一、九、三、七、四、七	九、三、〇、三、六	二、六、四、四、四	二、七、〇、一、九、五	三、六、九、〇、七、五	六、六、六、七、一
外國人	六、四、七	五、八、二	三、一〇	一、四、四	五、六	一、四、四	六、四、七
總計	六、四、七、五、八	一、九、六、六、八	九、四、九、六、九	四、七、〇、三	一、五、六、九、五	三、二、〇、三、七、七、〇、七、六	六、四、七、五、八

納税義務者 同年末の納税人員(大正三年
 制令第四號の規定に依り地稅を徴收せざるも
 のを含む)は三百七十七萬七千七十六人で前
 年末に比較し一萬四千八百二十五人の減少と
 なつて居る。
 而して納税人員の平均一人當の納税額は三
 圓七十錢一厘、所有面積は一町一段七畝歩で
 あるが、之を納税額別並所有面積別に觀ると
 次の如く前者に於ては一圓未満のものが最も
 多く五一・三%を占め、一圓以上五圓未満の
 三四・六%、五圓以上二十圓未満の一・四
 %が之に距ぎ、後者に於ては一段歩以上一町
 歩未満の五二・一が最も多く、一町歩以上五
 町歩未満の二五・一%一段歩未満の一八・四
 %が之に距いて居る。

切抜帖

支那主要都市の人口

上海	三、五五九	千人	青島	四七〇	千人
北京	一、五五九		成都	四九〇	
天津	一、二五三		濟南	四九〇	
廣州	一、二一八		蘇州	四三七	
南京	一、〇〇〇		福州	三六三	
漢口	七六九		惠州	三四〇	
杭州	五五三		開封	三七七	
重慶	四九六		武昌	三七七	
長沙	四八〇				

この人口の調査年次は西暦千九百三十五年、即ち我が昭和十年である。

(列國國勢要覽、昭十二)

内地に於ける出生率

内閣統計局調査の昭和十一年人口動態統計速報に依れば、同

年に於ける出生は二百十萬九千二百二十人(人口千に對する割合二九・九二)、死亡は百二十三萬三百九十七人(人口千に對する割合一七・五一)、出生より死亡を差引いた自然増加は八十七萬千五百二十三人(人口千に對する割合一・四〇)であつて、前年に比し出生の八萬八千七百六十一人の減少、死亡の六萬八千三百三十九人の増加の爲、結局自然増加は前年の百二萬八千六百二十三人に比し、十五萬七千百人の激減を示した。右の中特に注目すべきは出生率の低下であつて、日露戰爭直後の明治三十九年(人口千に付二八・九三)以來の低率なのである。

昭和十一年府縣別出生率

(速報)

府縣	人口千に	大正九年(第四次國勢調査)
付出生	出生	施行に比し
秋田	三六・八六	減退割合(十は地)
青森	三六・五一	
岩手	三六・〇七	
	一四・〇%	

富山	三五・一五	一六%
宮城	三五・〇四	一八%
山形	三四・八七	一七%
新潟	三四・八二	二二%
福島	三四・三二	一七%
北海道	三四・〇九	二〇%
栃木	三四・九六	一七%
埼玉	三四・九〇	一五%
岐阜	三四・五一	二〇%
徳島	三四・二五	一五%
茨城	三四・二二	一七%
静岡	三四・二一	一六%
宮崎	三四・九三	一〇%
群馬	三四・八七	一九%
石川	三四・六四	一八%
福井	三四・五八	二三%
千葉	三四・五三	一三%
山梨	三四・三九	一七%
三重	三四・三〇	一五%
愛媛	三四・〇八	一六%
佐賀	三四・九六	一六%
鹿児島	三四・六九	一〇%
香川	三四・六〇	二五%
長崎	三四・四三	七%
大分	三四・三六	一六%

愛知	三四・〇四	一九%
全 國	二九・九三	一七%
島根	二九・七七	一〇%
鳥取	二九・七三	一二%
長野	二九・七〇	一六%
熊本	二九・四五	一三%
滋賀	二九・六八	一九%
神奈川	二九・五九	一四%
福岡	二九・二六	一二%
岡山	二七・八五	一五%
奈良	二七・五九	二四%
廣島	二七・三七	二四%
和歌山	二六・八六	二三%
山口	二六・六六	一六%
兵庫	二六・五三	二二%
沖繩	二六・三二	二八%
東京	二五・九七	一三%
高知	二五・八六	二四%
京都	二四・八五	三三%
大阪	二三・一五	二四%

これらの地方の既往に於ける出生率の推移は如何様であつたらうか。今第一回國勢調査施行の年たる大正九年を基準にとつて、府縣別に此の年以後の出生

率の推移を辿つて見ると、出生率の漸減傾向は何れの府縣に於ても——沖繩は例外——看取し得る所であつて、單に其の遲速あるに過ぎないことを知るのである。低下速度の顯著な地方としては東北では青森、北陸では福井、近畿では大阪、奈良、和歌山、京都、兵庫等殆ど全域に亙り、中國では廣島、四國では高知、香川が目立つてゐる。又比較的低下の速度が緩慢で安定を得てゐるのは、東北では秋田、岩手、北陸では新潟、中國では鳥取、島根、岡山、九州では全縣が之に屬してゐるものと見られる。沖繩は極めて變則的であつて、其の趨向は他府縣と同列には論じ難い様である。右に依れば、元來高率の地方も大體一様に低下の傾向にあるのみでなく、近畿一圓の如き元々低率の地方にあつても、其の低下度の相當急勢のものあるは注目すべく、又九州一圓が比較的安

定を得てゐるのも興味を惹くのである。

(週報第三十九號より採算)

内地の米

第一回收穫豫想

農林省發表本年の米作付段別は三百二十一萬二千八十二町五段にしてこれを前年作付段別に比すれば八千五百八十四町六段(三厘)を増加せり、しかして九月二十日現在に於ける豫想收穫高は六千六百九十九萬二千七百十石にしてこれを前年實收穫高に比すれば三十一萬九千九百二十二石(五厘)を減少し前五箇年平均實收穫高に比すれば五百四十四萬六千三百五十七石(八分八厘)を増加せり蓋し本年の稻作は北海道、東北北陸および東山地方において苗代初期の氣温低く苗の成育幾分遅延したるものありしも一般には既に順調なる成育をとげたるのみならず移植もまた概ね適順に行はれたり、しか

して移植後は一部地方を除き一般に氣温高く日照多かりしたため分蘖、伸張ともに促進せられ八月十五日現在の水稻作況は「稍良」の狀況にありたり、その後天候依然として高温多照にして開花結實良好なるを得たるがたま(九月十一日の颱風は四國、中國、近畿などの地方に相當の被害を及ぼしたるものあり、また關東地方において陸稻に旱害の發生を見、結局前記の如き收穫豫想をなすに至れり、なほ參考のため最近五年間に於ける作付段別および實收穫高をあげれば左の如し。

年	付反別段 (單位町段)	實收高 (單位石)
昭和	三、五五、四六、三六〇、三六六、三六四	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇
八年	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇
九年	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇
十年	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇
十一年	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇
前五年	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇
年平均	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇
十二年	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇	三、一七、四八、三七〇、八〇九、九三〇

(第一回豫想收穫高)

十二年米第一回豫想收穫高(第三次最終公表の分)本年度米作付段別および九月二十日現在における豫想收穫高秋田ほか二十二府縣の分左の如し。

地方	豫想收穫高(石)	前年實收高(石)
東京	一九七〇△	五、〇三五
神奈川	四三、七四〇△	六、五六七
兵庫	一、八四、八五〇△	五、五七九
長崎	六九八、六〇〇	五、四三三
新潟	四、〇七、一〇〇	三、一五二
茨城	二、三四七、四四六△	二、一四〇〇△
奈良	七四九、三六〇	二、六一四
三重	一、四八三、五七〇△	二、〇三六
滋賀	一、五四五、〇〇〇△	一、六一三
福島	三、三三、四四六	一、一三〇、九二一
山形	三、三三、三九〇	九、一〇一
秋田	三、一七、四〇、九一〇	三、七、四三三
福井	一、〇二、二四三〇	三、〇〇〇
鳥取	六九八、一〇〇	三、八七〇
島根	一、〇九八、一〇〇△	三、一〇四
廣島	一、五九四、四一〇△	四、一〇九
徳島	五、八七三〇△	四、七三三

高知 六二、一五〇 △ 一三、〇〇三
 福岡 二、五八、五三〇 △ 四、四六六
 大分 一、三〇、六〇〇 △ 六、〇五八
 沖繩 九四、六〇〇 △ 三、九八八
 合計六、九二、七〇〇 △ 三三、四八八
 前回公表したる二十六府縣分
 三七、六〇〇、四五〇 △ 五、六〇三
 合計六、九二、七〇〇 △ 三三、四〇三
 備考 沖繩の分には第二期作の
 分を含まず。

(大朝、十、五)

内地の麥實收著増

(農林省發表)東北および新潟
 の各縣における本年麥作付段別
 およびその前年との比較は

大麥	六三、四九、四	三分減
裸麥	一、六七、八	八厘増
小麥	六、九四、八	一分三厘増
計	一、二、〇三、〇	九厘減

次に本年實收高およびその前
 年との比較は

本年實收	前年實收
實收高	高に比し
大麥 一、三二、三五四	三割九分三厘増

裸麥 三、五八、五割八分四厘増
 小麥 八七、二〇二 四割六分五厘増
 しかつてこれを前回發表した
 る三府三十五縣分と合計した
 る四十六府縣分について見るに
 大麥 六、八四、三三三 八分三厘増
 裸麥 五、八三、一六一 二分五厘増
 小麥 九、六九、七元一割二分八厘増

なほこれを前五箇年平均實收
 高に比すれば大麥一一〇、九二
 七石(一分六厘減)裸麥一三九、
 八六四(二分三厘減)小麥一、三
 九八、七六六(一割六分九厘増)
 備考 收穫期の關係上北海道は
 十月限報告の定とす。

(大朝、十、七)

農事講習所數

昭和十一年度末現在に於ける
 農事講習(傳)習所は蠶業に關す
 るもの二七、農事一般に關する
 もの一五、棉作に關するもの
 一、合計四三で前年度末に比し
 一を減少した。

府、道、邑及面の經營に係るも
 の二七、郡農會の經營に係るも
 の一〇、其の他の經營に係るも
 の六である。

以上を道別に觀ると成南の一
 三が最も多く、忠南の一三に
 亞ぎ、京畿、平北は各三、全
 南、慶北、慶南、黄海の各道は
 各二全北にはなく、其の他の各
 道は各一である。

昭和十一年度の入所應募者は
 一、七二一人で此の中一、〇四七
 人が入所した。卒業者は九八〇
 人で之を前年度に比較すると入
 所者で一九三人、卒業者で一三
 〇人を何れも増加した。

鷺・七面鳥

昭和十一年末現在に於ける
 鷺・七面鳥數を觀るに、鷺の飼
 養戸數は九千三百五十九戸、飼
 養羽數は三萬五千十一羽であつ
 て、此の内平北の一萬三千四十
 六羽が最も多く、平南の八千九
 百六十五羽これに亞ぎ、この二

道で總羽數の六二・八%を占め
 てゐる。

七面鳥の飼養戸數は二百八十
 四戸、飼養羽數は一千九十羽で
 あつて此の内京畿の三百六十三
 羽が最も多く、次ぎは慶南、黄
 海の各百六十八羽等である。

産金計畫

産金獎勵のため總督府鑛山課
 では本年度豫算により探鑛獎勵
 金二十萬圓をはじめ計四十九萬
 圓の補助金を産金業者に交付し
 たが、戦時經濟體制下における
 朝鮮の役割として總督府では産
 金一億圓計畫を擴大して明年よ
 り五年計畫産金二億七千萬圓の
 増産を行ふこととなつたので總
 督府では明年度より大々的産金
 獎勵を行ふこととなり明年度は
 このため約五百萬圓の獎勵金を
 交付すべく財務局に對して要求
 中である。獎勵金は従来の探鑛
 獎勵金、選鑛機、鑿岩機共同施
 設、各獎勵金をはじめ新に鑛山

道路開設、電力設備などにも振向けられる計畫である。

(大朝、十、十二)

康德三年

滿洲國鐵産額

十一日大阪市産業部入報、滿洲國産業部鐵工司ではかねて同國鐵産額の綜合調査に着手、このほど大同元年から昨年度に至る五ヶ年間の重要鐵産物十八種の生産數量を纏めたが生産額一千噸以下のものは除外し一千噸以上の十四種目につき昨年度産額の前年比を示せば次の如くである。なほ滿洲國の鐵産數量は一般に各地鐵山の稼行單位が低く近代鐵業として未完成のもの多く十分な營業記録を持たないものすら相當あるため國內總體の鐵業成績は従來は推定額によるほかなかつたが、今度はじめて實際の數字が發表されたわけである。

(單位金鐵は一千瓦、他は一十噸△減)。

康德三年度鐵産額
種類 産額 對前年比

滑石	七五	四
石炭	1,100	八五
硫化鐵鐵	三△	三
鐵	二、六五	1,107
銑	六四七	二五
苦土	三三	七五
金	三、四九	一、六一
銀	八五△	二七
石灰石	五〇六	一八〇
火粘土	一五四	一六
鉛鐵亞鉛鐵	一七	一五
磁土	三	一
粘土	七	一
硅石	一	一

この表によれば前年度に比し減少せるものは硫化鐵鐵および銀の二種で他は全部増加し滿洲國鐵業の躍進振りを如實に物語つてゐる、減少せるものうち硫化鐵鐵は大口消費者たる滿洲化學工業が昨年度來専ら日本の柵原鐵山から買鐵し、一方銀は

國內の需要減少を反映したものである、石炭は五ヶ年計畫着手前であるが、滿炭の開發事業進捗し前年に比し八十一萬噸の増加、鐵鐵はまた百廿萬噸余の激増である、しかしてこれらの數字は滿洲國産業開發計畫前年度のものであるから今後の滿洲鐵産の基本數字をなす重要性をもつてゐることに注意すべきである。

(大毎、十、十四)

賃銀

昭和十二年七月中九箇府、即ち京城、大田、木浦、大邱、釜山、平壤、新義州、元山及び清津に於ける労働者の賃銀を調査するに、

内地人は調査種目三〇種中前月に比し昂騰したもの一四種、低下したものの四種、保合のもの一二種で昭和十一年を基準とせる指數總平均は一〇四・五であることを前月に比すると保合を示してゐる。尙労働者別に前月

に比すると熟練労働者は〇・一を昂騰したが、不熟練労働者は〇・四の低下を示してゐる。

朝鮮人は調査種目三一種中前月に比し昂騰したもの二二種、低下したものの三種、保合のもの六種で指數總平均は一〇八・九である。之を前月に比すると二・三の昂騰を示してゐる。又労働者別に前月に比すると熟練労働者は一・四を、不熟練労働者は二・四を何れも昂騰してゐる。

滿洲國人及中華民國人は調査種目二七種中前月に比し昂騰したものの五種、低下したものの四種、保合のもの一八種で指數總平均は一〇一・五である。之を前月に比すると〇・四の昂騰を示してゐる。尙労働者別に前月に比すると熟練労働者は一・一の昂騰であるが、不熟練労働者は二・八の低下を示してゐる。

小賣物價

昭和十二年七月中、九ヶ府、

即ち京城、大田、木浦、大邱、釜山、平壤、新義州、元山、清津に於ける小賣物價を調査するに、調査品目九十四種中、前月に比し昂騰したものの二十九品、下落したものの二十一品、保合のもの四十四品で昭和十一年を基準とせる指數總平均は一〇・六五である。之を前月に比すると

○一の下落を示してゐる。尚品種別に前月に比すると穀類は二・三を、肉類は〇・四を、飲料及調味料は二・四を、衣料品及身廻品は〇・三を、燃料は二・八を雜品は〇・一をいづれも騰貴したが蔬菜及果實類は三・八を、魚類及海藻類は二・一を何れも下落してゐる。

對支投資額

誰もが解つてゐるやうで、存外解つてゐないのは、支那に對する各關係國の投資額である。各國の投資額を調べて見ると、各國の利害關係の濃度や輕重も

從つて解つて來るわけで、英國やソ聯が躍起になつて、支那支投に熱中する理由もはつきりすると思ふ。次に掲げる數字は一九三一年における列國の對支投資の全貌であるが、これはやゝ古いけれども現在までに於て最も信頼するに足るレーマー調査である。

單位百萬弗	百分比	
英國	一、八九二	三六・七
日本	一、二六九	三五・一
蘇國	二七三・二	八・四
米國	一六六・八	六・一
佛國	一五三・四	五・九
獨逸	八七・〇	二・七
白國	八九・〇	二・七
伊國	四六・四	一・四
和蘭	二八・七	〇・九

以上は政府借款を含む投資總額であるが、右の内日本の投資額中には、滿洲における投資があるからこれを控除すれば日本の分は著しく減ずるとは云へ、對支投資中日英兩國の投資が壓

倒的に多いことに變りはない。今直接事業投資の主なるものを見るに左の通りである。

單位百萬弗	百分比	
英國	九三・四	三六・〇
日本	九二・八	三六・〇
蘇國	二七三・二	一〇・八
米國	一五三・一	六・一
佛國	九五・〇	三・八
獨逸	七五・〇	三・〇
白國	四二・〇	一・六
和蘭	一〇・〇	〇・四
伊國	四・四	〇・二

右の内蘇國の投資は北滿鐵道賣却の結果、殆ど消滅してしまつたから、今日に於ては對支三大投資國といへば日英米の三國である。この三大投資國の地方的分布を見れば

英國	日本	米國	
上海	七三・四	二五・〇	九七・五
滿洲	一	五五・二	一
其他	三六・〇	一〇八・九	五三・七

右の内(其他)の分には香港が含まれてゐる。之によつて英國

の投資が上海方面に於て壓倒的に大であり、日本の投資が滿洲に於て大であることが解る。

(京日、十、十二)

生活改善十則

總督府では國民精神作興運動に際し左の如く「社會風潮一新生活改善十則」を制定、これを基礎に時艱克服に邁進することになつた。

- 一、時艱の克服、一致團結
- 二、不動の精神困苦に堪へよ
- 三、協力一致銃後の固め
- 四、働け身のため國のため
- 五、備へよ常にあらゆる力
- 六、陋習の打破、形よりは精神

- 七、工夫して物を活せ
 - 八、舶來品より國産品
 - 九、無駄を省いて國力を培へ
 - 十、戦に勝つも奢に敗けるな
- (京日十、七)



雜
筆

出張中の失敗

池 周 甲

(延 白 郡)

これは三年前にあつたことであるが、今に至るまで、私にとつては、なかなか忘れ得ない一つの失敗談である。延白郡に赴任して間もない時のことで、しかも郡廳の事務は始めての事だから、色々と勝手の違いが多かつた。この話は、滞納處分をするために田舎に出張して行つた時のことである。私が出

張命令を受けた時、同僚は初心者に對する滞納處分の心得といつたやうなものを一通り話して呉れた。オーケーといふ譯で、私はいとも朗らかに用務地に向つたのである。

——さて、いよいよ滞納者の門前に立つて見ると、少々足許に自信がないことを感ずる。その家は立派な構えであつた。見たところ、税金の拂へないやうな貧弱な家ではなささうである。氣後れがしてはいけないと氣付くと私は早速、氣界丹田に力を入れて、先づは勇敢に主人を呼んだのである。だが答がない。「こちらが金書方のお宅ですか。主人は居られませんか。」

と同行して来て呉れてゐた面財務書記も、大きな聲して呼んだが、何んの應へもない。何度も呼んでみると、やうやく奥の方から、物靜かな足音がして来て、支關の障子が半分ばかりスィツと開いた。

見ると意外や、この田舎にも、と思はれるやうな上品な、物やさしい、眉目麗しく、肌色白き十七、八の乙女である。顔一面におつとりした微笑さへ堪へてゐる。

「唯今、御用で外出して、不在で御座います

が」。といひながら、不安げな顔を伏せてゐる。

私は同僚から注意されてゐたことを、一つ思ひ出しながら、

「外出といへば何處に行かれたのでせうか。」と問ひ寄る私の聲は、意外に弾んでしまつてゐた。

「それは多分、病人がゐますので、お薬とり參つたのだと存じますが……」

「エー。實は私は郡から參りましたが、△△税が未だ納まつてゐないので、滞納處分に来ました。御病人も居られて本當にお氣の毒に思ひますがどなたか外の方が居られたら、その方をお呼び下さい。」

「あら、お父さんが何か悪いことでもなさつたのですか。」

彼女の言葉は明らかに狼狽し、唇は震へて帯びてゐた。

「いや、何かしなかつたといふ譯ではないんです。お金のことです。税金のことについて一寸御相談があるのです。」

これを聞くと、彼女は逃げるやうに奥にかくれて行つたが、何か奥の障子の蔭に立ちな

がら、外に居る私等の様子を氣遣つてゐるやうな氣配が感しられた。

私等は、これでは埒があかない、殊に第一線に出たばかりの、そして氣の弱い私には、この間の呼吸といふか、どうやつてよいか勝手に迷ふといふ調子であつた。

此の時同行の書記は奥に向つて、

「もし〜。税金を出さなければ、家財道具が差押になりますよ。早く貴女のお父さんをお呼びいらつしやい。」

と呼びかけると、

「あたし、そんなこと、知りませんわ」

といふ返事が来るだけである。色々と話しかけても、知りません、の一點張りに、二人共仕末がつかないである時、背後に人の入つて来る氣配がしたので、振返つて見ると、主人らしい。

「貴方が金さんですか。」

と、私はつひ出た詰問するやうな語で呼びかけると、さうだ、と答へる。

「何か御用でもあるんですか。」

と來たのである。

「御用も何も。△△税は一體どうなるのですか。」

か。四里も態々歩かされて。」

と、私が愚痴まじりの話をする、彼氏はしばらく考へるやうにして居たが、

「△△税は一週間に納めた筈ですがね。」

といふ話なのである。そこで念のため領收證を出さして見ると、あに圖らんや、既に督促料まで取つてゐるではないか。

此の時こそ、私の顔は燃えるやうだつた。

恥しいやら、腹が立つやら、無我夢中で其の家をとび出すと、漸くホツとした譯である。

それから既に足掛け三年の月日が流れた。

何かしてゐると時々フツと、あの時のことを思ひ出す。誠に恥かしい失敗談である。あの時ゐた娘も、最早何處かに嫁いで行つて、今はあの家にゐないのかも知れない。

豊山思ひ出草

金川三郎

このごろでは京城も大ぶん寒氣が迫つて來た。晝間はさほどでもないが、朝晩はそれはつきり感ぜられる。昨日など朝飯をたべて

ゐるとき火鉢があつた方がよい位で、役所に行く途中、敦化門のバス停留所ではもう車掌の詰所に火鉢が用意されてあつたやうである。今夜はあまり寒いといふ譯ではないが、試みに温泉を焚いたところが流石に氣持がよい。ゆつくりした氣分になつて好きなA氏の隨筆集を讀んでゐると、私はふと嘗て旅したことのある豊山の旅館を思出した。

私がこの宿に泊つたのは昭和七年の十月で確かその十八日の晩だつたと思ふ。役所の用で咸南と咸北とに出張することになり、多分十六日の夜汽車で京城を發つて、翌朝咸興に着き、ここに一泊して又その翌朝、即ち十八日の朝早くここを出て北青まで汽車で行き、少憩の後自動車に乗換へて、その日の夕方この豊山の宿に辿りついたのであつた。

北青から豊山に着くまでの道中の景観は實に素晴らしかつた。元來咸南山地帯の旅行は前々から是非一度實現したいと思つてゐたものである。甲山、三水、豊山等の諸地方を包括する蓋馬高原の名を想ひ浮べただけでも、私は胸のときめきを禁ずることが出来なかつた。五萬分一の地圖をあれこれと披いては、

この地方の生活、風俗その他を誌した書物と照し合せて、一度この地方を實際に見たいものだと限らない憧れを抱いてゐたのである。

北青からの自動車は道廳の職員が四五人と私とであつた。この前の日に私は道廳でS技師と同行する約束が出来てゐたが、S氏は山地の事務をやつてゐるこの方面には時折出張する用務があるので、この日のでたちも如何にも山のにほひのするやうな、かつちりしたしかもゆとりのある服装で来てゐた。外の人々は事務檢閲に行くところらしかつた。外の御客がゐなくて我々だけで纏つてゐるので、車はそこそこに停まる必要がなく、速さも速かつたので、始めから快適なドライブをするやうな氣持ちで、かなり得意であつた。

竹田里、獐興里あたりは南大川の流域で、土地もよく開けてゐる。道路はこの川を左に見つゝ進む。快い風に顔をなぶられながら沿道の風物を次々にやり過して行くのである。直洞まで来ると最早山地に入つたことを強く感ずる。これからが上りである。直洞から蓋馬高原の角稜の一點たる厚峙嶺に着くまでの上り道路の屈曲は正に天下の一偉觀であら

う。謂はば蛇行であるが、蛇行を通り越した位の屈曲ぶりである。明堂徳といふ部落の點在するあたりは既に一千米の高さになつてゐる。海拔千三百三十五米あるといふ厚峙嶺に辿りつくまでに、私は幾度もいま来た道を俯瞰して見て、その壯大なる景觀に驚嘆したことであらう。

厚峙嶺に上りきるとあたりの感じがからりと一轉する。何だか暗がりから急にあかるみに出たやうで、その爽快さといつたらない。道路が平坦になる。山のたたずまひがかはる。誠に雄大である。また山が焼かれて腰掛に出來るやうな大きな松の株が簇立してゐる箇所が諸處に見られる。S氏はこれが火田だといふ。また川原に鞍掛機が動いてゐるのが自動車進む毎にちよいちよい見える。沿道の部落の名前に把握(パベル)といふのがあるが、これはその少し先にある黄水院と共に、住時交通の要衝にあつてゐたことを示す名前である。黄水院はここから成興に通じてゐる道路があり三叉路になつてゐるが、これからは自動車が一層速くなり、特に豊山に近くなつてからは、道路がよくて眞直ぐで、それ

に盆地に向ふため多少下りにもなつてゐるので、其の快速ぶりといつたらなかつた。豊山の宿五館についたのは、一日を照りつづけた太陽が西の山に沈み、家々に今やつと灯がついたかと思はれる黄昏時であつた。

この豊山には内地式の宿が二軒あつて、自動車道を隔てて向ひ合はせてゐた。外の人々は他の宿に行き、S氏と私とがこの五館に泊つたのである。夕食はS氏と共にしたが、S氏は少しばかりの酌に快くなつて口が軽く何か野球が好きと見えて盛んにその話が出てゐたやうであつた。――部屋に歸ると私は勞れてもあつたし、それに眠くもあつたので、幼い時には未だ私の村では使はれてゐた懐しいランプが部屋に吊り下がつてゐたのを消して匆匆寝についた。

翌日も晴れた目であつた。この郡廳は宿の直ぐ後ろにあつた。そこで色々用を済ましてまた部落の生活の有様を見ることも必要であつたので、豊山から程近い雪鶴里？に行つて何かと見せて貰ひ、それから宿に歸ると暮れるには未だ早い。それではといふ譯で裏の方にある丘に上つて行つた。この丘は樹木とて

はなく、一面の草原で、ここに數十頭の緬羊が放たれてゐたのは、私の思ひもかけない欣びであつた。全くこのやうなんびりした緬羊の群を見たのは始めてであつただけに、私はつひ惹かれて其れをスケッチした。谷間を隔てて見るならかな山々のたたずまひは、此の草原の丘の緬羊の群に對して本當に恰好な背景をなしてゐた。殊に日の暮れる頃なので一體の零圍氣が殊の外に靜かで、別天地にある感をしみじみ味はつた。

夜は普通學校の校長をやつてゐるF氏が訪ねて來られたので、朝鮮の民家の圖を見ながら、この地方の人情風俗などについて盡きない話をきいたことを覚えてゐる。それがランブの薄暗い中で火鉢を圍んでの話なので、今考へて見ると感慨が深い。F氏が歸られてから私はその日のことに思ひひたりながら、手紙を二三通かいた。床に就いたのは大分更けてからであつたらう。――翌朝目をさますと雪が少し積つてゐた。もう今年になつてから二度目の雪だといふことであつた。十月のうちに降つた雪を見たといふことは私を何だか喜ばせた。尤も、富士山の頂上では、八月

の二日に雪が降つて來るのを見た經驗はあるが。

私はその日の朝甲山行ききの自動車に乗つた。北青から豊山までの自動車の快速を思ひこれから甲山、それから惠山鎮。そこは滿洲國の長白縣に相對し、鴨綠江の上流が見られるなど想像しながら自動車の出發を待つたが其の自動車は今迄のやうに貸切りではなく、他の客を待合はせねばならなかつたので、なかなか出ようとほせぬ。と見るとトランクを提げて送つて來て呉れてゐた十七八の宿の女中がまだ立つてゐる。歸るやうに言つたが歸らうとはせず、仕舞にはその弱々しい細いからだを家の土壁にもたせかけ、寒い中でとうとう自動車の出るまで見送つて呉れた。この娘はその二三日前に、大分縣のN市から親類を頼つて來たばかりだといふことであつたが急にかはつた環境とこの寒さに對してあのからだ果して耐へ得るだらうかと思はれ、私は何だかしみじみした氣持に襲はれたて仕方がなかつたことを覚えてゐる。

(昭和十二、十、十四)

祖國愛の叫び

安元 三郎

祖國日本の爲、東洋平和の爲、暴戾な支那膺懲の爲我が皇軍將士は日々惡戰苦闘を續け赫々たる武勳を立てるその背後に隠れたる幾多祖國愛のほとばしりは我國ならでは發見し得ない至誠盡忠の權化と云ふべきならずや。

寡兵以つてよく數倍の敵の軍を北に南に空に海に戰ひて大捷せざるはなし、何が故に皇國日本は強いか外國人の齊しく不思議がるのも尤もだと思はれる。云はずもがな祖國愛の致す所以である。つひ先ごろ病床に倒れし弟にも亦こうした祖國愛の熱情迸るものありしを見感激をく能はざるものあり。

諸君、嘗つて外國武官に對し「日本人は事國家の危急に關する時には決して死をも恐れない」と乃木將軍は云へり、決して我等國民が死に對して純感を意味するのではない、死の恐怖を知らざるは白痴であり暴虎馮河の勇に墮するものである、僕等日本人は死を超越

して熱愛すべきものを持つて居る、即ち武士道精神と祖國愛、民族愛の強化こそ死の恐怖を粉碎し克服するものである。

この燃ゆる如き祖國愛の堤一度び切り落されるや自己の生命を祖國愛の奔流にまろび行く一粒の粟にも足らぬものと覺悟する。だからこそ皇軍が蘆礫に這ひ上り敵陣に殺到し身に重傷を負ひ最後の息を引きとらんとする時「天皇陛下萬歳」と叫び乍らあの異國の曠野に果てる幾多將士あるを諸君は知つて居られるでせう。廟行鎮に於ける爆彈三勇士こそ我が國民ならでは行ふ事の出来ないものであり武勇盡忠の顯はれである。

斯くの如く強きは何が故だらう。一言にしていへば日本國民が畏くも三千年來の萬世一系の天皇を戴きて爲し來たれる生活様式と精神文化の賜であり外國の如き遊牧文化のそれと自ら選を異にするからである。大和民族は一定の土地にて田を耕し山を切り開き農耕をかてとなし假令半坪なりとそこに自分の家を建てる土地を持つ事を懂れ、定住する事を誇りとする。歐洲人の如く轉々と移住して行く事を意に介せざるのみならず興味すら抱ける

國民中にこうした精神を發見出来るであらうか。この民族精神こそ我が誇るべき祖國崇拜心、愛郷心を化育し來れるものである。

苟も國家存立を危くし國民文化を破壊せんとする外敵に對し我國民は石にカデリ着いても子孫傳來の國土を守らねばならぬ、子孫をして後顧の憂なからしめる爲には命を賭して之を打ちヒシがねばならぬ、この犠牲的精神を一丸とせるものこそ世界に比類なき偉大なる祖國愛と信じるのである。

この祖國愛の反映するところ世界にあまねく偉大なる日本の姿を知らしめてゐる。時は正に非常時である、この秋に當りて國難を雙肩に負へる國民は職業の如何を問はず時局を認識し皇國の爲祖國愛を傾倒し義勇奉公の覺悟を高唱して止まない。

× ×

以上は弟の遺した日記の一節である。弟の無二の友某氏の門出の前日訪つれあり死の宣告を受けたる愛弟へのせめてものこの世の情に面會を容れしに互にしばし感懐まれる沈黙の瞬間この世の最後の握手を交し乍ら震へて微かに叫ぶ聲「しつかりやつて來て呉

れ」と、もどかしげに三度の叫びを最後に無常の風は愛する弟を奪ひ去つて行つた。

友の晴れの門出に引かへ弟がこうして病の爲倒れ行く無念さを思ひやるに餘りあるものあり、しかも斯くして病に倒れるもその祖國を思ふ叫びこそ美はしくも悲しき情景ならすや。

朝鮮色ある姓氏

水 城 寅 雄

今日われわれの持つ姓氏について、朝鮮色ある姓氏を若干もとめて、多少その出自の間に小考を加へて見たい。

私は京城に來て既に七八年になるが、來た年から四五年間は京城中學の西の方にあるSといふ下宿屋で過した。この下宿の一室に百濟〇〇といふ人の標札がかかつてゐるのを見た。やはり京城府内の役所に勤めてゐる人とかいふことであつた。別にこの人と話したことは一度もなかつたが、百濟を名乗る人と相當知名の人も内地にゐる。また高麗といふ人も京城にゐて去年だつたか、その人から私は

電話を受けたことがある。其の人は埼玉縣入間郡(武蔵)の高麗村ですと、御自分で御話されるのを聞いた。

わが古代の日本民族のうち、頗る多数の歸化族がかぞへられることは既に多くの人の知るところであり、各種の文獻が證明してゐるところである。歸化族は當時の日本民族のある大なる部分を占めて各地方に蕃衍し、わが國文化の發達の上には、實に大きな足跡を殘してゐる。しかしてこの歸化族のうちにあつて、わが朝鮮半島から支海をわたり、内地に入つた數は、恐らくは、それ等歸化族總數の過半を占めるであらうと思ふ。

勿論、これら朝鮮より歸化した者の悉くが韓民族といふ譯ではなく、その中には漢族系統の者も多かつた。しかし、それらと雖も亦その多くは朝鮮半島に住み馴れた者が、種々の事情からわが國に歸化したものと見るべきであらうから、それらは立派に朝鮮人になり切つてゐたものもあらうし、或は半ば朝鮮化した漢民族であつた。

これらの朝鮮半島からわが國に歸化した者の多かつたことについて、最も單的にその一

斑を知らしめるものは、峨嵋天皇の弘仁年間に成つた新撰姓氏錄の記載である。これを一見しただけでもわれわれは、かれらの數の甚だ多かつたことを推測するに難くないのである。

驟つて現在の姓氏の方面を窺つて見ることにしよう。私は今、現在の姓氏の全般に互つて考察する閑暇を有せず、またそれだけの紙面を許されてゐないから、その極く一部分のものに就てである。荒木良造氏の「姓名の研究」(昭和四年京都、麻田文明堂發行)には、「明治以後の姓名の内、風變りなもの」がかなり蒐められてゐる。その中からわたくしは、朝鮮色ありと思はれる次のごとき姓氏を抽出して見た。居住地方とあるのは、上の姓氏を有する人の勤務地、或は住所のある場所を漠然と示したものと諒解せられたい。

姓	氏	居住地方
漢人	福岡市	
村主	宮城縣	
百濟	北海道	
新良貴	大阪市	
荒	東京市	

高麗 愛知縣
新羅 名古屋市
巨智部 東京市
いま右に掲げた姓氏の起りを考へて見る。
漢人 アヤヒトまたはアヤマドなど訓む。

大部分本系は支那であるらしいが、それが朝鮮半島を経住して來たものと思はれる。姓氏家系大辭典の著者、太田亮氏は、これは恐らく「漢が韓半島に置きたる郡縣中、比較的後世まで残りし帶方の遺民にして、古くは漢より殖民したる人々の後ならむ」といつてゐる。大和・河内・攝津・三河・近江・美濃・越前・播磨・備中・周防・阿波・讃岐等の諸國に擴がつてゐる。漢人中には、又百濟族もひたやうであつて姓氏錄、右京諸蕃の條にそれが見える。尤も川内漢人のごときは或は皇別であらう。

荒 安良と通じ用ひアラと訓む、アララ或はアラアラとも訓む。任那歸化族であらうといはれる。
村主 訓ムラヌシ、ムラシ、スグリ。元來原始的カバネの一種であつて、歸化人の稱するものであるが、これが氏になつた。姓氏錄

を見ると、この氏を稱するのは何れも百濟か漢かの人が祖先となつてゐる。大和・山城・攝津・和泉・伊勢・駿河・紀伊・讃岐・豊前・因幡・美作の諸國に此の氏が擴がつてゐる。

高麗 訓コマ、カウライ。また伯、巨萬とも作る。多く高句麗國人の裔である。また慶長頃に朝鮮から歸化して高麗を稱するものもある。これはカウライと呼ばれる。武藏・信濃に多くゐた。尤も高麗氏の中にも、藤原姓のものが武麗高麗郡に住し、その地名をとつて高麗といつたといふごときのものもある。

百濟 クダラ。百濟國人の後であつて、百濟國名を負うたものである。和泉・加賀・播磨・阿波・大和・河内・攝津・伊勢・近江・上野・筑後・常陸・美作等の諸國に散住してゐた。

新羅 シラギ、シンラ。新羅國の名を負うたものである。新羅國人の後が多いことと思はれるが、さうでないのがある。有名な新羅三郎義光のごときは、清和源氏の流れであり丹波にも源姓の新羅氏がある、これはこの國に志樂庄シラガがあり、志樂は新羅の轉訛であるか

ら、この地名から起つたものである。また藤原姓の者から出て新羅を稱したごときものもある。

新良貴 シラギで新羅に同じく國名を氏としたのである。この氏には新羅國人から出たと思はれるものと、又、俄に斷定の出來ないものがある。

巨智部 己智部に同じで、コチベと訓む。姓氏録には己智が「秦太子、胡亥コガイヌエの後なり」とあるから漢族系たる秦氏の族類と思はれるが、欽明紀に

百濟人已智部、投化す。倭國添上郡山村に置く。今の山村己智部の先なり。と見えるから、百濟を經住したものであることが知られる。

また「姓氏と地名との訓み方」を見ると「大伯」といふ氏が現在ある。伯は高麗に同じであつて、高麗國名を負うたものである。姓氏録にはこの氏が二氏あつて、何れも高麗國人の後である。山城にもあたらしくこの國に大伯郷があつた。

以上は、朝鮮色ある現存姓氏の片鱗であるが、これ等は前述したごとく、多くは朝鮮に

縁故ある姓氏である。しかしながら、これ等を以て悉く朝鮮系のものとして速断することには非常な危険がある。明かに文献が證明してゐるものもあり、然らざるものと雖も、朝鮮系とは言ひ切れない。何となれば、古代に於いて、朝鮮半島からわが内地に歸化した場合、かれ等の定住した土地には、百濟とか、高麗とか、新羅とか、半島にあつた國名をその土地の名につけたことが多いが、その地名が出來た後で、朝鮮系ならざる人がそこに遷り住んで、その地名をとつて己れの姓氏となした人々も多かつたと思はれるからである。

一方、以上掲げた以外に、姓氏を見ただけでは朝鮮色を全然有しないものの中に朝鮮系のあることは、今更説くまでもなく非常にあるのである。

扶餘行

磯部 桃果

忠南論山灌燭寺

秋の風岩村吹けば鶴一つ

帝釋堂の屋根にきて啼く

扶 餘

秋風は寂しく吹きぬ江の水と

塔とぼぶらと旅人我を

平 濟 塔

山の端に夕日沈めば平濟の

五重の塔はむらさきに立つ

白 馬 江

秋風や樓にのぼれば長江の

流はとほく夕雲に入る

落 花 巖

春風にさくら散る如いはほより

淵に入りけむ宮女しおもほゆ

更 闌 寺

そゝり立つ巖のかげの籠り寺

木魚のこゑも夕さりにけり

錦 江

大船に眞帆はりあげて秋風の

さわ／＼と吹く江を入れるかな

青空に晝の薄月ほのめきて

鳥打船のうかぶ大川

大船のもそろ／＼と漕き下る

午後四時頃をねたり帆陰に

大 田 驛

柿買はぬものは愚に見ゆるまで

汽車に乗る人皆柿を買ふ

(松の實より)

百濟故都だより

庄 司 香 月

(扶 餘)

葉かくれに時鳥啼く扶蘇の山

扶蘇山や夏草深し蟬時雨

千鳥啼く大錦江や夏出水

青すゝき錦城山の晝の月

あららぎや百濟城址の夏の雨

山桔梗百濟城址のかけ瓦

綿の花平濟塔の夏の月

あ き

ひ ろ し

明月や小枝の影のあり／＼と

明月や燈管の町をさえ／＼と

すゝきなどいけて待ちるる月の縁

秋櫻小雨にぬれて色映ゆる

萩一枝小雨の垣の外に垂る

魚跳ねて動く水面や池もみぢ

池の面を西より北へ秋時雨

黄葉まじる庭の茂りや縁日向

訪へば主は菊の自慢かな

垂れし隠に朝露光る稻田かな

統計日誌

○内閣統計講習會

例年内閣統計局主催の下に開催せられたる内閣統計講習會は、本年も七月十九日より八月七日迄二十日間、東京帝國大學を會場として其の第十九回を開催したが、其の講習科目及び講師は次の如くである。

一、統計學汎論

内閣統計局統計官 中川 友長

一、人口統計

内閣統計局統計官 森 數樹

一、勞働統計及生産費指數調査

内閣統計局書記官 水谷 良一

一、經濟統計

東京商科大学教授 藤本幸太郎

一、農林統計

農林省統計官 長畑 健二

一、商工統計

商工省統計官 川澄已知雄

一、數理統計

内閣統計局統計官子爵 齋藤 齊

一、統計實務

内閣統計局統計官 松田泰二郎

一、憲法及行政法

法制局參事官 入江 俊郎

一、經濟學

東京帝國大學教授 荒木光太郎

一、財政學

東京帝國大學教授 土方 成美

科 外

一、國防問題一般

情報委員會事務官 清水 盛明

一、最近に於ける國際事情

外務事務官 田代 重徳

此の講習終了者は三百八十九名であるが、右の内朝鮮關係のものは左の如くである。

總督官房文書課

總督官房文書課 廣波 繁

總督府殖産局鑛山課

總督府殖産局鑛山課 小山田里美

總督府農林局林政課

總督府農林局林政課 常岡 一幸

總督府農林局土地改良課

總督府農林局土地改良課 田中 忠政

遞信局庶務課

遞信局庶務課 李 昌 圭

遞信局保險監理課

遞信局保險監理課 山本彦三郎

專賣局庶務課

專賣局庶務課 狩野嘉重郎

專賣局庶務課

專賣局庶務課 平野 敏雄

全州地方專賣局

古賀 義勝

大邱地方專賣局 神谷 寬

京城府戶籍課 尹 相 稷

全羅南道知事官房 中西 諭

慶尚南道知事官房 小山 光遐

慶尚南道固城郡 河 道 律

平安北道知事官房 文 永 稠

原稿募集

次號締切
十一月十五日

論說・研究

統計に關する原稿に限る。一篇四千字内外とし、長くとも六千字程度を超えないやうに。

雜 筆

感想・隨筆・詩歌句其の他種類を問はず、又必しも統計に關することを必要としないが、なるべく一篇一千字内外に願ひたい。

通信・資料

特に地方委員の方にお願。地方統計界の行事・施設等並びに特殊統計調査の結果其の他興味と實益ある統計資料を願ひたい。

◇誌上掲載の分には薄謝を呈す。但し極く簡單なものはこの限りにあらず。

協會人事

幹事並二書記異動(八月二十二日附)

幹事ヲ解ク 幹事 松瀨約四郎
 同 同 林直續
 同 同 原正
 幹事ヲ囑託ス 書記 德田吉藏
 書記ヲ囑託ス 水田正義

地方委員(道府郡島)異動

一、一月 星州郡 命 郡屬 寺石亮三
 (慶北)
 三、三一 英陽郡 命 郡屬 李承魯
 (慶北)
 四、一五 城津郡 命 郡屬 金鳳善
 (慶北)
 四、一七 咸北郡 命 郡屬 鄭宗極
 (咸北)
 四、二八 大同郡 命 郡屬 禹夏變
 (平南)
 五、二二 金堤郡 命 郡屬 古川公爾
 (全北)
 六、八 扶安郡 命 郡屬 森川考真
 (全北)
 六、一一 慈城郡 命 郡屬 辛福春
 (平北)
 六、一一 泰川郡 命 郡屬 栗田久治
 (平北)
 六、一一 靈光郡 命 郡屬 植木昌禹
 (全南)
 六、一一 靈光郡 命 郡屬 伊藤鳳三郎

六、一九 黃海道 命 道屬 東常一
 六、二一 新興郡 命 郡屬 橫山尙實
 (咸南)
 六、二一 南原郡 命 郡屬 嚴柱完
 (全北)
 六、二一 津南浦郡 命 府屬 福永壽清
 (平南)
 六、二二 咸北郡 命 郡屬 片野章
 (平南)
 六、二二 鬱陵島 命 島屬 宮谷止
 (慶北)
 六、二二 慶州郡 命 郡屬 金藤貞仁
 (慶北)
 六、二五 青松郡 命 郡屬 姜鍾夏
 (慶北)
 六、三〇 順川郡 命 郡屬 前田吉三郎
 (平南)
 六、三〇 松禾郡 命 郡屬 柳淵章
 (黃海)
 七、一 慶山郡 命 郡屬 寺井健三
 (慶北)
 七、一 忠清道 命 道屬 岡野定吉
 七、三 南道 命 道屬 佐々木豐久
 七、三 扶餘郡 命 郡屬 鮮于錫圭
 (忠南)
 七、八 金浦郡 命 郡屬 卞喜本利德
 (京畿)
 七、一三 黃州郡 命 郡屬 李東寬
 (黃海)
 七、一四 義州郡 命 郡屬 西塚常雄
 (平北)
 七、二七 鐵山郡 命 郡屬 白石鳳涉
 (平北)

七、三一 長湍郡 命 郡屬 堤内千代吉
 (京畿)
 七、三一 加平郡 命 郡屬 檜垣惠三郎
 (京畿)
 七、三一 利川郡 命 郡屬 金井魯聖
 (京畿)
 八、三 公州郡 命 郡屬 野口孟性
 (忠南)
 八、六 牙山郡 命 郡屬 李鍾泳
 (忠南)
 八、一二 英陽郡 命 郡屬 吳翔性
 (慶北)
 八、一三 漆谷郡 命 郡屬 石田明善
 (慶北)
 八、一四 礪波郡 命 郡屬 武藤享二
 (慶北)
 八、一六 光山郡 命 郡屬 李正山
 (全南)
 七、三一 京畿道 命 道屬 松崎重雄
 八、一八 水原郡 命 郡屬 西井重雄
 (京畿)
 八、二六 長城郡 命 郡屬 金嶺政治
 (全南)
 九、一 莞島郡 命 郡屬 崔文三
 (全南)
 九、八 咸北郡 命 郡屬 梁奉錫
 (咸北)
 九、〇 慶尙道 命 道屬 崔正烈
 九、二〇 江西郡 命 郡屬 金成烈
 (京畿)
 九、二二 振威郡 命 郡屬 長井又三

消 息

○こんど幹事の村辻氏が新設された資源課に榮轉された。協會としては誠に名残り惜しい氣がする。同氏は我が協會の創立當初からの、否、創立以前の準備時代から常にわれわれを指導鞭撻して氣運を助成され、協會の同氏に負ふところは相當に大きいものがある。其の間協會には何かと色々の困難もあり、苦心もあつてこれを突破して、行くためには種々同氏に御無理な御相談をもちかけたこともあつたが、いつも誠意をもつて之に應對され、多事な協會が免れ角も軌道に乗つて使命の一端を果たして來たことは、深く同氏に感謝しなければならぬところである。

○これに代つて和田喜三次氏が本陣を堅められることになつた。清新な、而して氣鋭な同氏によつて本誌は今後愈々活氣づいて來るだらう。我れら一同は充分安心して、協會當面の種々の難問を切り抜け、更に又將來への對策を益々積極的ならしめることが出來よう。編輯室も、此の程の移動によつて、以前の隣りの明朗な部屋に移つて來たし、室内は

忙がしい中にも一種清新な雰圍氣を作つてゐる。協會の仕事も今までは創立から遠くなく思ふ存分行かなかつたが、これからは次第に地盤が堅まり、段々面白味を加へて來ることにならう。石の上にも三年といふが、協會も滿二年を経過して既に第三年目に入つたのだから、がつしりと落つて意義ある路を進まねばならぬ。

○幹事片田隆一氏は今回國勢調査課に榮轉の上、人口動態統計の事務に盡力されることになつた。相變らず今後とも御願する譯であるが、同氏と毎日編輯室で相見えることの出來なくなつたのは何だか淋しい氣がする。それはその筈だ、文書課に長かつたのは村辻氏はそれ以上だが、片田氏も昭和四年以來だもの、協會の誕生の際からずつと面倒かけたことが多かつたが、唯今は協會の最も大事なことであり、同氏には尙ほ種々無理な御願ひを致すことが多いだらう。

○京畿道統計主任松崎重雄氏には地方委員として我が協會に絶えざる御盡力を惜しまれなかつたが、去る七月三十一日俄かに逝去された。あの濃厚篤實そのものやうな温顔を屢々この編輯室に現はされて我々を鞭撻し激勵されたが、復見ることの出來なくなつたこ

とは誠に悲しい極みである。茲に靜かに同氏の靈前に心禱を捧げる。

○本協會書記として、絶えず我が協會の進展に努力を續けられる安元三郎氏には、去る七月二十八日愛弟道彦氏（鐵道本局勤務）を喪はる。哀悼の至りに堪へず。この哀しみの中に、これに打勝ちつゝ協會のために益々盡粹される同氏に更めて深謝の意を表したい。

○馬淵正氏からは時々御便りがあつて、極めて壯健に、且つ眞劍に御働きのなつてゐる様子が窺はれる。同氏の生命を的にしての御奮闘を思ふとき、そこに非常なる喜びと誇りとを感ずると同時に、我々は更に一層の努力を以て朝鮮統計界のために精進する覺悟の必要なることを痛感する。生命を的にして働くことの如何に貴く、意義があるかは、古來先賢が親しく實踐して範を我々に垂れてあるところである。かの佛聖芭蕉であつたかは、自分の作る一句毎に、これが絶筆になるんだといふ強い決心を以て精進したといふことである。生命を賭けての仕事だつたから、あれだけの嵩高な境地がひらけたものと思ふ。吾々は馬淵氏の御健闘を祝福し、祈念すると同時に、吾々としても層一層眞摯な態度を以て事に處し、微力ながら奉公の誠をつくすやう努めたいのである。

編輯後記

◇秋冷を覺ゆる季節となつた。どうかした日は寒いやうな日がある。朝顔の花など十日程前までは遅咲きのものがいくらか見られたが、今は全く咲きつくし葉も黄ばみ、厚く堅い感じのものになつて、やがて来る寒さを豫報してゐるかの如く思はれる。えぞ菊その他の秋の花もだんく盛りを過ぎて行く。温突の修繕も急がねばならぬやうになつて來た。京城が既にさうだから、北鮮地方ではかなり寒いことであらう。

◇これにつけても思ひ出されるのは、こんどの事變でかの地に出てゐる皇軍將兵の辛苦の様である。新聞で見ると、北支の或る地方の山では、随分以前に雪が積つてゐたさうであるから今では随分と寒いことであらう。唯寒いばかりではない。かの地は本格的な大陸的氣候ではあり、その他種々の點に於いて違つた環境にあるのだから、この環境に順應し、うちかつて健

康を維持するだけでも大變だのに、貴き使命のために、人間わざとも思はれないやうな大きな働きをするのであるから、その困難は全く思ひやられる。われわれ會員はこゝに深甚の謝意と祈禱とを捧げずには居られぬ。

◇本當に今度の事變は、我が國の使命達成の上に極めて重大なものであるから、國民としては特別の覺悟が必要である。江上征史氏が本號に於いて、其の眞摯なる態度と懇切なる筆を以て此の問題に觸れた有意義なる原稿を寄せられたことは誠にありがたい。會員諸兄の熱讀を希望する次第である。

◇大内京城帝大教授がその御繁忙の中を割いて、今回もまた前回に引き続き玉稿を惠與されたことは之亦感謝の外はないところである。慶北の許治氏がその那の統計施設の概要を寄せられたことは、各地の實情を明かにしたい希望を抱いてゐる本誌として本當に嬉しい。この種の原稿は今度とも成るべく切らさずに掲載したいのであるから、一般會員におかれても、閑暇を見つけて御寄稿して戴きたいのである。

◇此の十月一日の協會創立記念日に第二回の表彰を行つた。各道に一面若しくは一人であるが、これらの面の状況や功績者の努力は、各會員が参考とし、或は模範とするに適當なものであると思はれるから、その梗概を本號上に掲載し、それらの面や人々の光榮を祝福すると共に各自研鑽の資とした。

◇こんど文書課から資源課が生れたりして、幹事その他にも多少の異動を免れなかつたが、われわれはこの秋の際であり統計の任務は益々加重されて來た譯であるから、更に一段の努力と奮闘を盟つてゐる。各會員におかれても充分御信頼の上、格段の御聲援を冀ふものである。

廣告案内

本誌廣告掲載御希望の向は本會事務所（朝鮮總督官房文書課内）又は本會地方委員（各道府郡島廳内統計主任）へ御照會ありたし。

昭和十二年十月二十五日 印刷

昭和十二年十月三十日 發行

定價（送料共）拾五錢

京城府太平通官會第一號

編輯兼 和 田 喜 三 次

發行人 和 田 喜 三 次

京城府壽松町二七番地

印刷人 藤 本 外 次

京城府壽松町二七番地

印刷所 鮮光印刷株式會社

朝鮮總督官房文書課内

發行所 朝鮮統計協會

撰登京城二四四八番

株式會社

朝

鮮

銀

行

株式會社

朝

鮮

殖

產

銀

行

大改訂 新裝幀 朝鮮行政手帳の豫約開始!

本社獨特の考案に成れる 實務 朝鮮行政手帳は昨年未敢然内地よりの日記洪水をせきとめて大好評裡に發賣増版に次ぐ増版の盛況を呈せしも今回更に其の内容外裝共に大改善を加へよりスマートにしてより實務的な昭和十三年版を完成皆様に層一倍の御愛用御批判を願ふ事と致しました何卒舊年版に倍して御用命の程偏に御願ひ致します

昭和十三年 朝鮮行政手帳 附 實務 便覽

優美上革製
ポケット型
三方金椽
定價六〇錢
(送料五錢)

概 容 内

卷 頭	
一、昭和十三年略歴	一、氣 節
一、教育ニ關スル勅語	一、恒例行事
一、戊申詔書	一、朝鮮風俗行事
一、國民精神作興ニ關スル詔書	一、金 言
一、國際聯盟離脱ニ關スル詔書	一、毎日ノ備忘欄
一、官吏服務規律	一、自由日記
一、朝鮮總督諭告	一、住所氏名録
	一、報告例並通牒ニ依ル報告事項欄
	一、備忘手控

覽 便 務 實

一、報告例	一、國旗ノ制式及掲揚方法
一、通牒ニ依ル報告事項	一、賀表及言上書ノ様式並ニ奉呈方
一、現行公文用字例	一、服忌表並ニ朝鮮ニ於ケル除服出仕方
一、送り假名法	一、行政統計
一、御眞影拜賀式ニ於ケル學校作法	一、朝鮮第三種所得稅摘要
一、勅語謄本ノ取扱ヒ方	一、朝鮮印紙稅摘要
一、神社參拜作法	一、郵便法一覽
一、朝鮮總督府及所屬官署ノ執務時間	一、メートル法
	一、年齢ト年代對照表
	一、朝鮮内主要驛間三等賃金表

發行所

京城府壽松町二七番地
株式會社 朝鮮地方行政學會

310.5
至54ス
N.7
c.1